

The Institute of Humanities and Social Sciences Nihon University

研究活動報告書

第9号 2017年度



日本大学文理学部人文科学研究所

目次

1 人文科学研究所総合研究報告

1-1	近現代の諸地域における「伝統」と「革新」をめぐる諸相	1
1-2	話芸・映像メディアを中心とした社会・文化・言語ステレオタイプの多角的研究	5
1-3	コーパス言語学の学際的研究	12
1-4	「ジャンルの記憶」とその転換をめぐる研究——東アジアの言語・文化・表現史を中心に	15

2 人文科学研究所共同研究報告

2-1	心と世界をつなぐもの	18
2-2	日本史研究と歴史教育	20
2-3	大学院・学部・学科教育を視野に入れた日本語学・日本語教育学ならびに書学研究の融合	23
2-4	日本文学に関する広域的総合研究	27
2-5	時代の要請に応えた中国学の発信に向けて	32
2-6	英語英文学の包括的研究(その7)	35
2-7	ドイツ語圏における近現代文学・語学・文化研究	40
2-8	現代社会における問題の状況の分析に資する社会学的研究Ⅶ—現代人の「生」をめぐる諸側面—	43
2-9	現代社会における問題の状況の分析に資する社会学的研究Ⅶ—「格差・不平等」をめぐる諸側面—	46
2-10	ソーシャル・インクルージョンをめぐる社会福祉課題に関する総合的研究Ⅲ	48
2-11	現代教育改革における理念・方法・政策に関する研究方法の構築	51
2-12	体育教師養成段階における学生の創発身体知の評価査定に関する研究	53
2-13	スポーツ競技中の選手の心理社会的なストレス反応の精神生理学的な測定	56
2-14	基礎心理学分野の日常場面における応用に関する総合的研究(2)	59
2-15	精神健康に関する臨床心理学的研究(7)	62
2-16	アセアン諸国の社会経済発展に関する理論・実証的分析	66

3 人文科学研究所公開講演会

	「ことわざの魅力とは」	68
--	-------------	----

4 各種研究費助成

4-1	科学研究費助成事業(文部科学省・日本学術振興会)	79
4-2	日本大学学術研究助成金	82
4-3	文理学部個人研究費及び付置研究所所員個人研究費	83
4-4	その他の助成金等	88

5 研究員受入

6 研究紀要

6-1	人文科学研究所研究紀要第94号総目次	97
6-2	人文科学研究所研究紀要第95号総目次	98

7 事業報告

1-1 近現代の諸地域における「伝統」と「革新」をめぐる諸相

- 代表者 古川隆久（史学科・教授）
- 分担者 小浜正子（中国語中国文学科・教授）
土屋好古（史学科・教授）
松重充浩（史学科・教授）
森ありさ（史学科・教授）
粕谷 元（史学科・教授）
小野雅章（教育学科・教授）
初見 基（ドイツ文学科・教授）
大川謙作（中国語中国文学科・准教授）

【研究の目的および概要】

「伝統」と「革新」の論理がどのように利用されてきたかという観点から近現代の人類社会の歴史を再検討することで、歴史認識の深化を図ることを目的とする。

各分担者の研究テーマは、〔古川隆久〕日本近現代政治史における保守系代議士の状況認識、〔粕谷元〕近現代トルコにおける政教関係の研究、〔土屋好古〕帝政末ロシアにおける政治と社会、〔松重充浩〕1920年代中国東北地域在地有力者層の地方議会認識、〔森ありさ〕近現代ヨーロッパにおける戦争・紛争とコメモレーションの比較研究、〔大川謙作〕チベット社会史における伝統と革新の諸問題、〔小浜正子〕中国近現代における家族改革、〔初見基〕近現代ドイツにおける「公的歴史」、〔小野雅章〕学校文書からみた地域と教育の関係史の考察、である。

研究会は、5月18日に古川隆久「5・15事件後政党内閣復活工作と前田米蔵」、6月15日に森ありさ「アイルランド独立期の定義と二大政党の歴史認識」、11月23日に初見基「集合の罪」をめぐるドイツ敗戦直後の言説、2018年2月14日に土屋好古「第一国会（国家ドゥーマ）選挙とペテルブルクの労働者」の4回が史学科会議室で行われた。

主催シンポジウムは、高大連携歴史教育研究会と日本大学史学会の共催で「歴史教育の未来を拓くⅢー歴史教育改革の具体像」と題して2018年3月21日13時～17時に文理学部オーバルホールで行われた。小浜教授の司会で、桃木至朗、中村翼、荒井雅子、林裕文、小島孝太、直井智宏の諸氏が歴史用語の精選や高校での授業実践について報告し、野々山新氏、松重教授がコメンテーターとなった。当日は強風、降雪などの荒天にもかかわらず会場がほぼ満席となる155名の参加を得た。なお、3月9日に直井氏の予備報告会（コメンテーター松重教授）も行われた（史学科会議室）。

【研究の結果】

4回の研究会での議論をふまえた【研究発表】と【研究成果物】に記載の諸研究成果を通じて、「革新」のための「伝統」の利用、あるいは「伝統」を守るための「革新」イメージの利用などの諸相が浮き彫りとなった。

【研究の考察・反省】

十分な成果を挙げることができた。これをふまえ、次年度の総合研究を進めることが求められる。

【研究発表】

〔古川隆久〕

- ①「近代日本における建国神話の社会史」（「歴史/物語を歴史化する——神話・文学を入りに」日本大学人文科学研究所総合研究プロジェクト「ジャンル」の記憶とその転換をめぐる研究——東アジアの言語・文化・表現

- 史を中心に」(代表・紅野謙介)主催)2017年7月25日 日本大学文理学部)
- ②「紀元2600年奉祝をめぐって―「皇室ブランド」を中心に―」(日本史研究会2017年11月例会「大衆消費と天皇―大正・昭和戦前期を事例として」2017年11月19日京都大学人文科学研究所)
- ③「紀元2600年奉祝の諸相」(第17回文化資源学フォーラム「周年の祝祭―皇紀2600年・明治100年・明治150年―」主催：東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室, 2018年2月11日, 東京大学本郷キャンパス)

〔森ありさ〕

「ヨーロッパ近現代史と公式記念行事の比較研究―フランス革命とアイルランド独立の事例から―」日本大学史学会平成29年度第2回例会報告, 2017年7月27日, 日本大学文理学部

〔粕谷元〕

「トルコ大国民議会会議録から見るオスマン帝国の滅亡」(東洋文庫東洋学講座, 2017年7月24日, 東洋文庫)

〔大川謙作〕

「見えざる台湾チベット人：不可視性の構造」(日本大学・政治大学共同国際ワークショップ「文類的記憶与其転換的研究」2017年12月1日 政治大学台湾文学研究所〔台湾〕)

〔小野雅章〕

- ①埼玉大学大学院人文社会科学研究科学際系2017年度連続シンポジウム・ワークショップ第一回シンポジウム「言説とイメージの歴史学と社会学―戦争と近代日本」コメンテーター, 2017年10月20日, 埼玉大学教養学部
- ②「国のたちと教育制度―教育は国家の鏡か」2017年度めぐろシティカレッジ講座「近・現代日本再考」, 都立桜修館中等学校, 2017年11月18日

【研究成果物】

〔古川隆久〕(いずれも単著, 査読あり)

- ①『「木戸幸一日記」と『細川日記』(細川護貞)―昭和終戦期の政界上層部』黒沢文貴・季武嘉也編著『日記で読む近現代日本政治史 史料で読み解く日本史2』ミネルヴァ書房, 2017年, 206～218頁
- ②「植民地期台湾で巡回上映された娯楽映画の特徴」三澤真美恵編(出版協力国立台湾歴史博物館)『植民地期台湾の映画』東京大学出版会, 2017年, 30～60頁
- ③「近代日本における建国神話の社会史」『歴史学研究』958号, 2017年6月, 27～36, 46頁(依頼)
- ④「五・一五事件後の政党内閣復活工作と前田米蔵―政友会「更生」から近衛新党へ―」『研究紀要』〔日本大学文理学部人文科学研究所〕94号, 2017年9月, 23～43頁
- ⑤「広田内閣期の前田米蔵」(『桜文論叢』第96巻, 2018年2月, 63～84頁〔縦書き〕)

〔小浜正子〕

- ①小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子編『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会, 2018年2月, 全486頁(共編)
- ②「少子社会,あるいは「卵子の老化」の何が問題なのか?」『学術の動向』22-8, 2017年8月, 36～39頁(単著)

〔土屋好古〕(単著)

- ①「ネーション形成という課題とその困難な道—日露戦争・第一次革命と自由主義者」松戸清裕・浅岡善治・池田嘉郎・宇山智彦・中嶋毅・松井康浩編『ロシア革命とソ連の世紀1 世界戦争から革命へ』(岩波書店), pp.59-84, 2017年6月
- ②「全ロシア相互扶助会大会プランから第1回全ロシア労働組合協議会へ—第一次革命期における労働組合生成の起源と系譜およびリーダーシップに関する若干の考察」前掲『桜文論叢』第96巻, 17-38頁

〔松重充浩〕(単著)

- ①『『近代中国都市案内集成 大連編』に記録された中国人』, 松重充浩・木之内誠・孫安石監修『近代中国都市案内集成 第43巻』, ゆまに書房, 3-25頁, 2017年
- ②「大連日本人社会における中国認識: 総合雑誌『満蒙』を事例として」, 松重充浩, 田中仁編『21世紀の東アジアと歴史問題—思索と対話のための政治史論』, 法律文化社, 106-122頁, 2017年

〔森ありさ〕(単著)

- 「第一次世界大戦100年期のメモリアル研究」前掲『桜文論叢』第96巻, 65—80頁

〔粕谷 元〕(いずれも単著)

- ①「トルコ大国民議会会議録から見るオスマン帝国の滅亡」(2017年度前期東洋学講座講演要旨)『東洋学報』第99巻第2号, 2017年9月, 59-61頁(依頼原稿)
- ②「ムスタファ・ケマル(アタテュルク): 国父の功績と負の遺産」(鈴木董編『悪の歴史 西洋編 [上]・中東編』清水書院, 2017年12月, 390-401頁(依頼原稿))
- ③“The Turkish Revolution between Secularism and Islam: The Three Laws Enacted by the Grand National Assembly of Turkey on March 3, 1924,” Sophia Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies 35 (2017) (査読あり)

〔大川謙作〕

- ①Kensaku Okawa, “A Study on Nang zan: On the Reality of the ‘Servant Worker’ in Traditional Tibetan Society.” In Franz-Xaver Erhard et al eds. Ancient Currents, New Traditions: Papers presented at the Fourth International Seminar of Young Tibetologists, Berlin: Edition Tethy, 2017年5月。(単著, 査読あり)
- ②『セルニャ: チベット文学と映画製作の現在 Vol.5』, 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018年3月。(共編)
- ③ペマ・ツェテン著(大川謙作訳)「轢き殺された羊」, 『セルニャ: チベット文学と映画製作の現在 Vol.5』, 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所』所収, 2018年3月(単独訳)。

〔初見 基〕(単著)

- ①「衝撃と沈黙—〈集団の罪〉政策と反撥—」『リユンコイス』第51号141-168頁, 2018年3月5日, 桜門ドイツ文学会
- ②戦後ナチ批判言説のはじまり—「集団の罪」の追及と反撥, 『断絶のコミュニケーション』頁未定, 2018年3月刊行予定, ひつじ書房

【小野雅章】(単著)

- ①歴史学研究会編『歴史を社会に活かす—楽しむ・学ぶ・伝える・観る』東京大学出版会, 2017年5月
- ②「教育勅語の教材化容認批判—学校儀式と修身教科書の歴史からの検討—」『日本教育史往来』No.229, 2017年8月
- ③「教育勅語の内容と実施過程——教育勅語は学校教育に何をもたらしたのか」日本教育学会教育勅語ワーキンググループ編『教育勅語の教材使用に関する研究報告書』, 2017年12月
- ④「戦前日本における教師の不祥事・犯罪と世論——小学校教師を中心に」『季刊教育法』No. 195, エイデル研究所, 2017年12月

1-2 話芸・映像メディアを中心とした社会・文化・言語ステレオタイプの多角的研究

- 代表者 田中ゆかり（国文学科・教授）
- 分担者 岡 隆（心理学科・教授）
古川隆久（史学科・教授）
佐藤至子（国文学科・教授）
関田朋子（英文学科・教授）

【研究の目的および概要】

本研究は、話芸・映像メディアのような大衆に流通するコンテンツ類を時代・社会・文化のありようとそれに従うステレオタイプが反映されたものと捉え、多角的な分析を行うものである。

本年度は本研究課題の基盤共有を行うとともに、映像資料・実演を鑑賞し、全員で分析する全体活動を行った。また、平行して個別テーマに基づく研究も続けていった。全体活動は、本研究テーマの中核となるメディア間におけるステレオタイプ研究の比較を行いつつ、構成員の相互の研究分野の理解を深めることを主眼とした。以下では、個別研究テーマの目的と概要を示す。なお、本研究課題は前年度まで関連研究課題の分担者として参加した林直樹（文理学部若手特別研究員）が随時、準メンバーとして研究会や実地調査に参加した。

〔田中ゆかり〕

「言語ステレオタイプ研究」の一環として、話芸・日本トーキー映画など大衆に流布したコンテンツ類に再現されたヴァーチャル言語のうち、地域方言に着目した。ヴァーチャル方言のありようを通して、時代・社会・メディアに投影された方言ステレオタイプについて考察することを目的とした研究を行った。また、「田舎弁」形成過程の調査の一環として、方言キャラである「芋侍」の登場する江戸落語「棒鱈」について、複数の音源の文字化と速記録などのデジタル化を進めた。

さらに、「言語ステレオタイプ研究」とは異なる観点から話芸を捉えるため、江戸・東京圏において落語に現れる地名・舞台がどのように分布するのかを分析し、話芸で表象されやすい江戸・東京を明らかにすることも試みた。

〔岡 隆〕

落語に登場する典型的人物に対する社会的ステレオタイプを調査し、その構造と機能を明らかにする。

〔古川隆久〕

映像コンテンツの歴史学的研究。具体的には、昭和戦前・戦中期日本トーキー映画で言語の問題がどのように扱われているかについて検討する。

〔佐藤至子〕

話芸の表現研究。具体的には落語における擬人化手法について検討する。

〔関田朋子〕

19世紀英国の大衆作家 Wilkie Collins 作 *The New Magdalen* (1873) を、三遊亭円朝の落語『蝦夷錦古郷家土産』(1886-87)、および菊廼舎東籬の小説『欧州奇談 夢の暁』(1889) と比較し、明治期翻案物がヴィクトリア朝原作から社会・文化・言語的に変更・変換される際の、その特徴について事例研究として考察する。

【研究の結果】

全体活動は、共同研究会や江戸落語実地調査を通して、本研究テーマの研究基盤形成に努めた。全体活動は以下のようなスケジュールで実施した。

共同研究会（第1回）：2017年6月8日（木）研究メンバーによるミーティング

共同研究会（第2回）：2017年7月27日（木）研究メンバーによる映像資料鑑賞・分析（鑑賞資料：幕末太陽傳）

落語鑑賞：2017年9月18日（月）上野鈴本演芸場

歌舞伎鑑賞：2017年12月17日（日）・18日（月）歌舞伎座

共同研究会（第3回）：2017年12月21日（木）研究メンバーによる映像資料鑑賞・分析（鑑賞資料：水戸黄門漫遊記）

歌舞伎鑑賞：2018年3月21日（水）歌舞伎座

これらとは別に、江戸落語・歌舞伎にかんする資料・書籍・映像資料等を購入・共有し、基礎知識の向上にも努めた。以下では、個別研究テーマごとの結果を示す。

【田中ゆかり】

「言語ステレオタイプ研究」を進めるにあたり、具体的には、映画（日活、川島雄三監督、1957年公開）と商業演劇（2017年4月から7月、宝塚歌劇団雪組公演、小柳奈穂子演出）において、メディアミックスされた『幕末太陽傳』を素材とした。同作には「高杉晋作とその一派」として長州藩関係のキャラクターが複数登場する。とりわけ「高杉晋作」は同作のW主役といってよい立ち位置にある。いわゆる脇役には「方言キャラクター」は登場するが、主役級の登場人物に与えられるヴァーチャル方言について映画と商業演劇の比較を行った。

どちらも方言指導はついておらず、用いられる「長州弁」はかなりステレオタイプ化されたものであった。宝塚版の台詞造形は基本的に日活の脚本に従ったものとなっているため、両者に差が認めにくい理由はそこに求められる。日活版の「長州弁」ステレオタイプについては、文末表現・人称詞の他、同作に特徴的と思われるアイコニックに繰り返される言い回しなど確認された。

また、「田舎弁」形成過程の調査の一環として、方言キャラである「芋侍」の登場する江戸落語「棒鱈」について、複数の音源の文字化と速記録などのデジタル化を進めた。

さらに、落語資料を基にした研究も林直樹（文理学部若手特別研究員）と連携しながら遂行した。この研究では、江戸・東京圏における地名・舞台を抽出するため、旅德利氏が管理するWebサイト「はなしの名どころ」から907、田中敦氏著『落語と歩く』（2017年、岩波書店）から139の地名をピックアップし、緯度経度情報を付した。出現数の分布をみると、東京23区内では台東区が最も多く、次いで中央区、千代田区、港区、墨田区という順になった。一方、出現数が少ないのは中野区・練馬区・世田谷区・杉並区と、東京の西側に偏ることもわかった。

このデータは、「江戸・東京WebGIS」に搭載するための移行作業を現在進めているところである。これらの情報をアップするために、データ管理者への申請も行い、データ公開の許諾を得た（2018年5月公開）。

【岡 隆】

定性的な文献調査を通して、落語に登場する典型的な人物に対する社会ステレオタイプが、一次元的な単純構造を成すものではなく、両義性ステレオタイプ(ambivalent stereotype)構造、ないしは補償性(compensation)構造を成していることを、ステレオタイプ・コンテンツ・モデル(SCM; stereotype content model; Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002)に基づいて明らかにした。

〔古川隆久〕

戦前・戦中の製作でフィルムが残る日本製劇映画の中はほぼ唯一劇中で落語が演じられている東宝映画製作の喜劇映画『水戸黄門漫遊記』（1938年8月に東海道の巻、9月に日本晴の巻が封切られた）を検討した。同作は1938年の東宝興行収入第1位となっており、1930年代中期に普及したトーキー映画の技術を活用し、トーキーならではの企画として、話芸が活用されていることの一つの証左として同作が位置づけられることがわかった。

〔佐藤至子〕

言葉を話す動物が登場する古典落語「狸賽」「安兵衛狐」「元犬」「大どこの犬」を検討した。「狸賽」「安兵衛狐」「元犬」には動物と人間が会話する場面がある。「狸賽」では狸がサイコロに化け、「安兵衛狐」「元犬」ではそれぞれ狐と犬が人間に化けるが、それらの動物の挙動には何らかの〈動物らしさ〉が伴い、滑稽性に結びついている。一方「大どこの犬」には動物と人間の会話場面はなく、動物の鳴き声を人間のことばに「翻訳」して動物の世界を人間の世界に擬えてみせる点に面白さがある。

〔関田朋子〕

円朝の場合は舞台を日本に変更した結果、つじつまの合わなくなった点を、「親が認めない恋愛と駆け落ち」「道中、癪に苦しむ女性を助けることで知り合いになる」など、当時の大衆芸能にステレオタイプとして見られるエピソードで埋める傾向がある。菊廬舎東籬の場合は、舞台や史的背景は正確に原作に倣っているが、中国人誘拐犯をうら若いヒロインがたたきのめすなど、荒唐無稽かつ大胆なストーリーの変更が多く見られる。

【研究の考察・反省】

〔田中ゆかり〕

日活版に投影される「長州弁」造形はかなり定型化したものであった。一方で同作に特徴的と思われる方言的フレーズも認められたため、これらが造形された言語資源の追究を今後の課題としたい。リメイク、メディアミックス作品をたどることによって、メディア特性・時代性などを見通す手がかりを得ることができそうである。これも今後の課題とする。「田舎弁」については、データ整理に終始したので、分析は今後の課題とする。

落語資料はWebGIS上へのマッピングを行い、2018年5月に公開した。整備したデータを用いた本格的な分析は、今後の課題とする。

〔岡 隆〕

今年度は、定性的な文献研究を実施し、落語の典型的登場人物に対する社会的ステレオタイプの両義性仮説（補償性仮説）を構成した。この仮説について、落語の聴衆から定量的なデータを採取することによって検証することが求められる。

〔古川隆久〕

トーキーならではの娯楽映画の企画として、漫才師に加えて落語家も対象となっていることについて検討を深めたい。

〔佐藤至子〕

古典落語「大どこの犬」の表現構造は新作落語「バイオレンスチワワ」「新ぐつぐつ」にも共通して見られる。新

作落語における擬人化手法について、さらに多くの事例を調査して検討したい。

【関田朋子】

円朝の翻案は、舞台を日本に移しながらも、ストーリー自体については原作に驚くほど忠実である。円朝が直接原作を英語で読むことは考えられないため、翻案に先立ち別の正確な翻訳があったのかもしれないが、当時の翻訳事情を考える限りその可能性は極めて低い。よって、その細部に至るまでの原作の忠実な再現は不思議としか言いようがない。とくに蝦夷という土地の当時の政治的あり方が巧みに、かつ原作に沿うように組み込まれている点は注目に値する。菊廼舎東籬の翻案については、内容や形式から、事前に何らかの形で連載されていたことが考えられるが、確認できなかったことが残念である。

【研究発表】

【田中ゆかり】

シンポジウム（招待） 発題1「テレビドラマと「方言」—ヴァーチャル方言の世界へようこそ—」群馬県立女子大学国文学科連続シンポジウム「第1 国語国文学を学ぶ楽しみ 方言研究の楽しみ」（2017年7月1日）於：群馬県立女子大学（パネリスト：田中ゆかり，新井小枝子，神戸道子）

シンポジウム 発題2「方言ヒーロー／ヒロインは幕末に咲く！」「時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる！世界観を形づくる「ヴァーチャル時代語」」（主催：科学研究費基盤研究（C）（課題番号15K02577 代表者：田中ゆかり）2015～2017年度「ヴァーチャル方言研究の基盤形成と展開」，早稲田大学演劇博物館共催，日本大学国文学会協賛）（2018年3月9日 於：早稲田大学小野記念講堂）（登壇者：金水敏，児玉竜一，吉川邦夫，大森洋平）

国際学会講演（招待） The “Dialect Cosplay” Phenomenon: Detaching Regional Dialects from Geographic Localities, The Sixteenth International Conference on Methods in Dialectology METHODS XVI (Methods16) Plenary Talk (2017年8月8日)（於：国立国語研究所）

講演（招待） 「「方言コスプレ」現象：土地から解き放たれる「方言」」ブリティッシュコロンビア大学（2017年9月11日，バンクーバー市）

講演（招待） 「「方言コスプレ」とその社会的背景」韓国国語日文学会2017年冬季国際学術シンポジウム「方言コスプレとコミュニケーション」（於：韓国外国語大学校）（2017年12月16日，ソウル特別市）

卓話（招待） 「方言ヒーロー／ヒロインは幕末に咲く！」（2018年3月29日 東京神田ロータリークラブ例会，於：ホテルグランドパレス）

【岡 隆】

口頭発表 「被撮影場面の種類によるパーソナリティ特性と不安感・満足感との関連の差」日本写真学会2017年次大会，一橋講堂（2017年6月）（共同発表者：伊藤幸子）

ポスター発表 「高校生における認知的熟慮性とSNS利用リスクの楽観視との関連」日本教育工学会第32回全国大会，島根大学（2017年9月）（共同発表者：河合萌華・中嶋凌・木村敦）

ポスター発表 「SNSで問題を起こす人に対するステレオタイプの認知の調査」日本心理学会第81回大会，久留米大学（2017年9月）（共同発表者：山本真菜・木村敦）

ポスター発表 「レズビアンに対する女性異性愛者の態度に仮想接触が及ぼす効果」日本心理学会第81回大会，久留米大学（2017年9月）（共同発表者：堀川佑惟）

- ポスター発表 「開放性と審美的価値観の階層構造に関する一考察」日本心理学会第81回大会, 久留米大学 (2017年9月) (共同発表者: 宮下達哉・木村敦)
- ポスター発表 「集団主義と個人主義に関するステレオタイプの検討: 日・中・英・米の典型的な人物像のイメージによる調査」日本心理学会第81回大会, 久留米大学 (2017年9月) (共同発表者: 西村光一)
- ポスター発表 「認知症の普及啓発活動の効果測定: “視点取得(自分が認知症になったとしたら)” にもとづく顕在的イメージ測定尺度を用いた検討」日本心理学会第81回大会, 久留米大学 (2017年9月) (共同発表者: 遠藤忠・谷田林士・村山憲男・蛭名直美・下垣光・小野寺敦志・中嶋紀一)
- ポスター発表 「Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語6項目版(ATLG-J6)と原著との関連の検討」日本社会心理学会第58回大会, 広島大学 (2017年10月) (共同発表者: 堀川佑惟)
- ポスター発表 「数学能力に関する性ステレオタイプの活性化が女性の数学課題成績に及ぼす影響」日本社会心理学会第58回大会, 広島大学 (2017年10月) (共同発表者: 朝川明男)
- ポスター発表 「パーソナリティの開放性と美的評価との関連—媒介変数として審美的価値観に着目して—」第19回日本感性工学会大会, 筑波大学東京キャンパス (2017年9月) (共同発表者: 宮下達哉・白川真裕・木村敦)
- ポスター発表 “The order effect of verbal and behavioral measures of the attitudes toward lesbians in imagined contact studies.” The 19th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Atlanta, Georgia, March 2018. (共同発表者: Horikawa, Y.)
- ポスター発表 “Does Stereotype Threat Mediate the Relationship between Stereotype Activation and Stereotype Reactance?: The Effect of Gender Stereotype Activation on Math Performance in Japan.” The 19th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Atlanta, Georgia, March 2018. (共同発表者: Asakawa, A.)
- ポスター発表 “A Study on Individualism-Collectivism Stereotypes in Japan: Focusing on Perceived Typical Characteristics of the Americans, British, Chinese, and Japanese.” The 19th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Atlanta, Georgia, March 2018. (共同発表者: Nishikawa, K.)
- ポスター発表 「名画および駄作に対する美的評価と審美的価値観との関連」第13回日本感性工学会大会春季大会, 名古屋大学 (2018年3月) (共同発表者: 宮下達哉・長瀬容江・木村敦)

〔古川隆久〕

- 口頭発表 「近代日本における建国神話の社会史」(「歴史/物語を歴史化する——神話・文学を入りに」日本大学人文科学研究所総合研究プロジェクト「「ジャンル」の記憶とその転換をめぐる研究——東アジアの言語・文化・表現史を中心に」(代表・紅野謙介) 主催) 2017年7月25日 日本大学文理学部)
- 口頭発表 「紀元2600年奉祝をめぐる「皇室ブランド」を中心に」(日本史研究会2017年11月例会「大衆消費と天皇—大正・昭和戦前期を事例として」2017年11月19日京都大学人文科学研究所)
- シンポジウム(招待) 「紀元2600年奉祝の諸相」(第17回文化資源学フォーラム「周年の祝祭—皇紀2600年・明治100年・明治150年—」主催: 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室, 2018年2月11日, 東京大学本郷キャンパス)

〔佐藤至子〕

なし

〔関田朋子〕

なし

【研究成果物】

〔田中ゆかり〕

論文 「全国2万人webアンケート調査に基づく方言・共通語意識の最新動向」『語文』158（日本大学国文学会）pp.1-35（2017年6月）

エッセイ 「読み解き方言キャラ ②土佐弁ヒーロー龍馬見参！」『考える人』60 2017年春,pp.112-113（新潮社）（2017年4月）

インタビュー記事 「自著紹介 『方言萌え!? ヴァーチャル方言を読み解く』岩波書店 「方言」を価値あるものとして、ポジティブに受容する時代」『週刊教育資料』1442, p.35, 教育公論社（2017年8月）

インタビュー記事 「方言は「おもしろい」「かわいい」!?!」「特集 生きている日本語 方言コスプレと新オノマトペ」『ビッグイシュー日本版』329, pp.8-10, ビッグイシュー日本（2018年2月）

報告書（編著）『銀座の言語景観7』（私家版）（2018年2月）

報告 田中ゆかり・岡隆・佐藤至子・関田朋子・林直樹「平成28年度 人文科学研究所総合研究 研究報告 「話芸」の多角的研究」『研究紀要』95（日本大学文理学部人文科学研究所）pp.173-185（2018年2月）

※外部資金の新たな獲得

2018年度「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度（千代田区）「WebGISを用いた千代田ヴァーチャル時空散歩アプリの構築」（代表者）取得

〔岡 隆〕

論文 「美的評価の個人差要因：開放性および審美的価値観との関連」『日本感性工学会論文誌』16(3), pp.315-320.（2017年8月）（共著者：宮下達哉，木村敦）

論文 「児童養護施設で暮らす子どもの生活安全感・安心感と精神的健康との関係ー「生活安全感・安心感尺度」の改良を通してー」『研究紀要』94, pp.47-62.（日本大学人文科学研究所）（2017年9月）（共著者：松村香・宇津木孝正）

論文 「ステレオタイプ抑制における反ステレオタイプと非有意ステレオタイプの役割」『心理学研究』.（印刷中）（共著者：山本真菜）

論文 「Big Fiveの開放性と美的評価との関連：媒介変数として審美的価値観に着目して」『日本感性工学会論文誌』.（印刷中）（共著者：宮下達哉，木村敦）

〔古川隆久〕

共著 『『木戸幸一日記』と『細川日記』（細川護貞）——昭和終戦期の政界上層部』黒沢文貴・季武嘉也編著『日記で読む近現代日本政治史 史料で読み解く日本史2』ミネルヴァ書房, pp.206-218（2017年4月）

共著 「植民地期台湾で巡回上映された娯楽映画の特徴」三澤真美恵編（出版協力国立台湾歴史博物館）『植民地期台湾の映画』東京大学出版会, pp.30-60（2017年9月）

- 論文 「近代日本における建国神話の社会史」『歴史学研究』958号, pp.27-36, 46 (依頼あり) (2017年6月)
- 論文 「五・一五事件後の政党内閣復活工作と前田米蔵——政友会「更生」から近衛新党へ——」『研究紀要』〔日本大学文理学部人文科学研究所〕94号, pp.23-43 (2017年9月)
- 論文 「広田内閣期の前田米蔵」(『桜文論叢』第96号『長沼宗昭教授古希記念論文集』, pp.63-84 (2018年2月))

【佐藤至子】

- 著書 『江戸の出版統制』吉川弘文館 (2017年11月)
- 編書 『雨月物語』(角川ソフィア文庫ビギナーズクラシックス) KADOKAWA (2017年12月)
- 論文 「〈研究へのいざない〉落語における〈言葉を話す動物〉の表象」『語文』160輯 (2018年3月)

【関田朋子】

- 論文 「イングランドにおける大衆読者層の形成と拡大」『読者ネットワークの拡大と文学環境の変化ー19世紀以降にみる英米出版事情』小林英美他編, 音羽書房鶴見書店 (2017年5月), pp.104-129.
- 論文 “The Early Journalism of Eliza Meteyard.” 博士論文. 2017年6月Leicester大学(UK)提出 (2018年1月Ph. D. 取得)
- 翻訳 「ベンジャミン・ディズレイリ作『コニングズビー』第4巻8章」欧米言語文化学会*Fortuna* 29 (2018年3月)

1-3 コーパス言語学の学際的研究

- 代表者 荻野綱男（国文学科・教授）
- 分担者 塚本 聡（英文学科・教授）
田中ゆかり（国文学科・教授）
保阪靖人（ドイツ文学科・教授）
板倉 歌（ドイツ文学科・教授）
韓 東力（情報科学科・教授）

【研究の目的および概要】

本研究では、研究対象の言語が異なる研究者に加えて、情報処理を専門とする研究者も参加して、それぞれが個別のテーマで研究を進めるとともに、年3回（5月、9月、2月）の共同研究会を開催して、相互にコーパス言語学としての方法論を中心に討議を行い、それぞれの専門分野の研究を他分野の視点から考えて、研究としてどのようにあるべきか、どうすればより効果的な研究として進展させうるのかを共同討議する。

共同討議については、具体的に目的・目標を示すことがむずかしい。

そのため、以下では、各研究者の個別の課題について目的を示すことにする。

（荻野）WWWをコーパスとして利用する研究を推進する。

（塚本）史的コーパスを利用し、言語変化を数量化することを目的とする。

（田中）携帯メールコーパスの整備とそれに基づく研究ならびにコーパス公開準備を目的とする。

（保阪）映画の会話のコーパスを作成し、そのコーパスを利用することによって、応答表現や、照応表現の分布を探る。

（板倉）ドイツ語の現代語コーパスを用いて、ドイツ語における連語表現とその意味を研究する。

（韓）twitter上の発言データからオノマトペを含んでいる文を大量に収集し、各種フィルタリングを通過させたものをオノマトペ用例コーパスとして構築する。

【研究の結果】

共同討議では各自が進めた研究の途中報告を行い、相互に議論した。以下では個人ごとに研究結果を記す。

（荻野）鉛筆・えんぴつ・エンピツの表記のゆれを調査し、正式なものには漢字が、固有名詞性が強い場合はカタカナが、子供向けの商品名にはひらがなが使われることがわかった。

（塚本）YCOE, PPCME, PPCEME, PPCMBE, ARCHER, およびCOHAコーパスによる観察では、進行相は約300年、be完了形は200～250年、動詞補部動名詞は200年、限定詞の義務化は700年程度の時間をかけ、変化している。このことから、いくつかの変化は200～300年で共通している。変化にはある一定の変化速度があることが観察された。

（田中）携帯メールコーパスについては、絵文字についての整備を中心に進めた。これについては、全データに使用される絵文字コード（ユニコード）と具体的絵文字の結びつけが完了した。絵文字ののべ・異なり数と、その概要についての簡単な報告を本共同研究研究会にて実施した。

（保阪）ドイツ語のdochの機能（付加疑問文での応答詞、心態詞、接続詞）の実例を取り出して、英語やイタリア語との対訳を通して、様々な形で表現されることが明らかとなった。たとえば文脈によって doch = now, however, but などのバリエーションが見られる。照応表現では指示代名詞や、関係代名詞として使用される deren のコーパスでの分布を調べ、指示代名詞がある構文に使われやすいことを明らかにした。

（板倉）いくつかの連語表現について、Institut für Deutsche Spracheの書き言葉コーパスCOSMAS IIを用い、まず

共起の度合いを確認した上で、検出例それぞれの意味を分析し、その傾向を探った。

(韓) 事前に作成したストップ語句リストと優先順位付きオノマトペ使用パターンリストを用い、3ヶ月間のツイートデータに対してフィルタリング作業を行った結果、200万文以上の用例文を収集することができた。

【研究の考察・反省】

具体的な研究内容の考察・反省なので、ここでは個人別に記すことにする。

(荻野) いくつかの単語について表記のゆれを WWW で調べ、一応の結果が得られたが、それらの個別の単語に共通する「表記のゆれの一般ルール」の考察までは至っていない。今後は一般化を目指して考察を進めたい。

(塚本) 英語史的コーパスは、他の言語と比較して利用可能なコーパスは多いが、Middle English 期の言語使用を提供するコーパスは限られており、さらに、そのコーパス内の特定の時期のサンプリングは量的にも少なく、代表性を欠いている。得られる結果の信頼性に問題が生じることがある。

(田中) 絵文字以外のコーパス整備については、まだ不十分なところが多く、公開の段階には至っていない。また、コーパスを用いた研究についても簡単な報告にとどまっている。コーパスの整備と研究の進化、公開に際してのさらなる整備などが今後の課題である。

(保阪) 接続詞や指示代名詞の使用は前の文との関連で使用されることは明らかであるが、そのパターンをさらに明示化することができる可能性があるため、そのパターン抽出を進めたい。たとえば、全文が引用になっている場合に、“引用”, *sagt deren Chef....* のように後置された主語に指示代名詞が利用されることが多い。このことは文体研究とも関わるので、文体の観点からのアプローチも必要である。

(板倉) 今回は、COSMAS II のうちのごく一部のみを対象にした調査にとどまったので、今後はもう少し体系的な調査を目指して工夫したい。

(韓) フィルターの一つである優先順位付きオノマトペ使用パターンリストは統計により抽出されたものを整理せずにそのまま利用したため、一部予想を反する用例文も獲得してしまった。また、データの収集期間が数ヶ月と短かったことによるサンプル数の不足も統計精度の低減の一因であろう。今後は、これらの問題に対処しながら、用例文の再利用方法を検討していきたい。

【研究発表】

(荻野)

2018.2.10「基調講演・情報化時代の学際的日本研究」韓国日本学会(KAJA)第96回国際学術大会, pp.21-25

(田中)

シンポジウム 発題1「テレビドラマと「方言」ーヴァーチャル方言の世界へようこそー」群馬県立女子大学国文学科連続シンポジウム「第1 国語国文学を学ぶ楽しみ 方言研究の楽しみ」(2017年7月1日) 於：群馬県立女子大学 (パネリスト：田中ゆかり，新井小枝子，神戸道子)

国際学会講演 (招待) The “Dialect Cosplay” Phenomenon: Detaching Regional Dialects from Geographic Localities, The Sixteenth International Conference on Methods in Dialectology METHODS XVI (Methods16) Plenary Talk (2017年08月08日) (於：国立国語研究所)

講演 (招待) 「方言コスプレ」現象：土地から解き放たれる「方言」ブリティッシュコロンビア大学 (2017年09月11日，バンクーバー市)

講演(招待)「方言コスプレ」とその社会的背景」韓国日語日文学会2017年冬季国際学術シンポジウム「方言コスプレとコミュニケーション」(於：韓国外語大学校)(2017年12月16日, ソウル特別市)

【研究成果物】

(荻野)

2017.6.20「自作プログラムで Canon LIPS プリンタに出力する」計量国語学 Vol.31, No. 1, pp.48-59

2017.9.1「新語の普及過程をツイッターで調べるには」日本語学 Vol.36, No.10, pp.34-41

2017.9.20「日本語研究におけるコンピュータ利用の一側面」日本語学研究(ISSN 1229-7275) 第53輯 pp.5-20

2017.11.10「技術革新と日本語」日本語学 Vol.36, No.12, pp.164-174

2018.3.10(編著)『現代日本語学入門 改訂版』明治書院

(田中)

論文「全国2万人webアンケート調査に基づく方言・共通語意識の最新動向」『語文』158(日本大学国文学会) pp.1-35(2017年6月25日)

エッセイ「読み解き方言キャラ ②土佐弁ヒーロー龍馬見参!」『考える人』60 2017年春 pp.112-113(新潮社)(2017年04月)

報告書(編著)『銀座の言語景観7』(私家版)(2018年02月)

(韓)

Comparison of Multiple Recommendation Methods of Similar Onomatopoeia, Dongli Han, Ryo Fukuoka, Genki Wakabayashi, Taro Shimizu, Shinnosuke Masuda, Proc. of the 12th International Conference on Computer Science & Education, pp.89-92, 2017.08

1-4 「ジャンルの記憶」とその転換をめぐる研究——東アジアの言語・文化・表現史を中心に

●代表者 紅野謙介（国文学科・教授）

●分担者 久米依子（国文・教授）

高 榮蘭（国文・教授）

武内佳代（国文・准教授）

大川謙作（中文・准教授）

神谷まり子（中文・准教授）

三澤真美恵（中文・教授）

山口 守（中文・教授）

【研究の目的および概要】

文学や映画などには、創作そのものが商品として流通する文化産業の側面がある。遅れて近代化を強いられた東アジアの地域において、アートとしての文学を商品として消費する読者の急速な拡大は、マスメディアの後押しを受けながら、読者の需要に応える読み物を次々に生産するようになった。生産と消費のサイクルを滑らかに回転させていくためには、類似した素材、シチュエーション、定型化された「筋」や文体が必要になる。アートがエンターテインメントになる環境が用意され、そこに文学や演劇、映画などの「大ジャンル」のもとに「サブジャンル」が生まれた。こうした「ジャンル」は東アジアにおいて急激に増殖し、大量生産と消費をもたらした。読者との関係の深い「ジャンル」だからこそ、そこに歴史的社会的な体験がたたみ込まれているし、その機制に抗おうとする作家たちの身ぶりもまた強く表れてくる。「ジャンル」の地域的な横断や越境、記憶の継承と対立・葛藤のプロセスを探ることによって、それぞれの地域や社会、政治形態の差異と連続性を明らかにする。

【研究の結果】

まず研究会の記録を掲げる。

- (1) 5月20日：成瀬巳喜男監督「上海の月」の鑑賞と討議（国立近代美術館フィルムセンター）、参加者は学外ふくめ8名。
- (2) 7月25日：「歴史／物語」を歴史化する、古川隆久（本学史学科）と成田龍一（日本女子大）による研究発表と討議。学外ふくめ、30人以上の参加者があった。
- (3) 10月5日：神谷まり子「民国初期社会小説『新歇浦潮』における自動車の描写について」の研究発表と討議。
- (4) 11月9日：久米依子「フィチンさんと三つのハルピン—植民地のリプレゼンテーション 佐多稲子・上田としこ・村上もとか—」の研究発表と討議。
- (5) 12月1日：台湾の国立政治大学台湾文学研究所においてワークショップ「ジャンルの記憶」とその転換をめぐる研究を開催。1日かけて山口守、呉佩珍（政治大学）、金井景子（早稲田大学）、大川謙作、高榮蘭、紀大偉（政治大学）、崔末順（政治大学）らによる研究発表と討議を行ない、翌日にかけて台湾市内や二二八記念館などを視察した。
- (6) 1月18日：西村正男（関西学院大学）「戦後日本の流行歌シーンにおける中国趣味の継承—山口淑子・胡美芳から」の研究発表と討議。

以上のように年間5回の研究会と1回の国際学術ワークショップを開催し、それぞれの研究成果のとりまとめを行った。研究メンバーにとどまらず、多くの参加者にも刺激を与え得たと考える。

【研究の考察・反省】

1回目の研究会を企画し、スターターの役割を果たされた三澤教授が6月に突然、ご病気になられ、半年以上、休職されたことが研究の活性化においてたいへんつらいことではあったが、残りのメンバーで何とか活動を維持し、成果をあげることができた。とりわけ台湾政治大学とのワークショップは新たな国際学術会議の開催と両校の交流において大きな可能性を抱かせることとなった。

【研究発表】

- 久米依子「Japanese girls'fiction after World War II and Anne of Green Gables 第二次大戦後の日本の少女小説と『赤毛のアン』」(オーストラリア日本学会 Japanese Studies Association of Australia (JSAA) 2017年度研究大会, オーストラリアウーロンゴン大学, 2017年6月28日)
- 山口 守「巴別塔之後：華語語系到母語之外 (After Babel: From Sinophone to Exophone)」(“世界華文文学区域関係與跨界發展” 国際学術研討会, 中国：浙江大学人文学院, 2017年4月8日)
- 山口 守「巴金在台湾」“巴金和他的朋友們” 展開幕式講演, (文訊雜誌社・巴金故居・紀州庵文学森林共催, 台湾台北：紀州庵, 2017年6月17日)

【研究成果物】

- Kensaku Okawa, “A Study on *Nang zan*: On the Reality of the ‘Servant Worker’ in Traditional Tibetan Society.” (In Franz-Xaver Erhard et al eds. *Ancient Currents, New Traditions: Papers presented at the Fourth International Seminar of Young Tibetologists*, Berlin: Edition Tethy, 2017年5月)
- 大川謙作『セルニャ：チベット文学と映画製作の現在 Vol.5』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018年3月, 共編)
- 大川謙作「チベット旧社会の村落構造をめぐって：二つの政府領の比較から」(池田巧・岩尾一史編『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』臨川書店, 2018年3月)
- 神谷まり子「自動車小説としての『新歇浦潮』——交通事故・殺人事件・運転手のイメージ」(日本大学大学院文学研究科中国学専攻『中国語中国文化』第15号, 2018年3月, pp.16-38)
- 久米依子「明治から昭和へ——古典の大衆化と少女文化」(助川幸逸郎・立石和弘他編『新時代への源氏学10メディア・文化の階級闘争』(竹林舎)所収, 2017年4月, pp.151-173)
- 久米依子「大正期少女雑誌から婦人雑誌への位相——伊東英子の軌跡を視座として——」(『国語と国文学』第94巻第5号, 2017年5月, pp.18-33)
- 高 榮蘭『談論と表現の日本学 담론과 표현의 일본학』(韓国語)(慶熙大学校日本学論集刊行委員会編, J & C, 2017年11月, 全599頁)
- 高 榮蘭「『不良分子』の指紋と『朝鮮人』の位置づけから——高野麻子『指紋と近代』を手がかりに——」(東京外国語大学海外事情研究所『クアドランテ』第20号, 2018年3月, pp.17-26)
- 紅野謙介「『大菩薩峠』と岡千代彦の「自由活版所」——印刷工とアナキズムのネットワーク」(『昭和文学研究』76集, 2018年3月, pp.2-16)
- 武内佳代「三島由紀夫と『婦人倶楽部』——婚約不履行時代の『永すぎた春』ほか3篇」(『日本古書通信』82(5,6,9,11), 2017年5,6,9,11月, pp.14-15, pp.34-35, pp.4-6, pp.14-15)
- 山口 守『黒暗之光：巴金的世紀守望』(復旦大学出版社, 2017年6月, 全394頁)
- 山口 守「アフター・バベル——華語語系文学が聞き分ける声」(『三田文学』第96巻第131号, 2017年11月,

pp.174-187

2-1 心と世界をつなぐもの

- 代表者 飯田 隆（哲学科・教授）
- 分担者 三平正明（哲学科・准教授）
- 永井 均（哲学科・教授）
- 高橋陽一郎（哲学科・教授）
- 小林紀由（哲学科・教授）

【研究の目的および概要】

平成27年度の共同研究「心と世界」、および、平成28年度の共同研究「心と世界—思想史的観点から」の後を受けて、その総括として企画された本年度の研究は、哲学のさまざまな分野における知見を用いて、心と世界の関係についての正しい理解がどうあるべきかという問いに答えることを目指した。心と世界との関係を理解することのむずかしさは、一方で心が世界の中にあることは自明でありながら、他方で心は世界を反映しており、それゆえ、心の中に世界があるようにもみえることから来る。本研究では、われわれが日常営むさまざまな活動の在り方を具体的な仕方でも反省することによって、心と世界とのあいだのこうしたパラドキシカルな関係の源を探ろうとした。

この意図のもとに、認識論、教育哲学、美学といった多様な哲学分野において、国外も含めた学外の研究者との交流を通じて、心と世界という問題が現在どのように取り扱われているのかの状況を把握したうえで、それをもとに多くの議論を重ねてきた。具体的には、9月と11月と、二回にわたって開催した人文科学研究所哲学セミナーと、例年と同様、本年度の研究の総括として3月16日に開催した第13回の人文科学研究所哲学ワークショップが、その大きな機会となった。

【研究の結果】

9月15日に開催した人文科学研究所哲学セミナーでは、デンマーク工科大学所属のNina Gierasimczuk氏を招いて「Topological Epistemology: A Logical Perspective on Observability, Learning, and Knowledge」（トポロジカルな認識論—観察可能性、学習、および知識についての論理的考察）という講演をしてもらい、その後、その内容について議論を行った。Gierasimczuk氏は、近年急速に発展を遂げつつある形式認識論（formal epistemology）の最先端で活躍している研究者であり、形式的・論理的な道具を用いて、伝統的な認識論の問題に迫るという彼女の方法論は、心と世界の関係という、さらに大きな問題に取り組む本研究にとっても、きわめて示唆的であった。

その約二か月後の11月10日に開催した、本年度二回目の哲学セミナーでも、認識論的問題が取り上げられた。ただし、そこでは、教育の問題に特化した形での認識論の在り方が議論された。エジンバラ大学所属のLani Watson氏による講演「The Epistemology of Education: A Role of Questioning and Inquisitiveness」（教育の認識論—問うことと好奇心の役割）は、教育の認識論の現状について紹介するとともに、教育における問いの重要性について具体的な実践例を示しながら論じたものであり、形式的論理的な取り扱いとは異なり、それを補足するような研究法が、認識論と限らず、哲学一般にとっても大事であることを聴衆に印象づけた。

本年度の研究の総括として3月16日に開催した第13回人文科学哲学研究所ワークショップのテーマは分析美学である。英語圏での美学研究が、それまでの美学研究の伝統を引き継ぎながらも、哲学における分析的手法の導入によって、新たな発展を遂げていることは、しばらく前からわが国でも知られていたが、そうした方法を自身のものとして意識的に採用して美学的問題を論じるオリジナルな研究が行われるようになったのは、むしろ最近のことである。今回のワークショップでは、そうした研究を現在精力的に行っている若手の研究者に講演を依頼することで、分析美学の現状を展望するとともに、心と世界をめぐるこの三年間行ってきたわれわれの研究が、美学の分野からどのような示唆を受け取ることができるか、また、美学的問題にも適用可能かどうかを見ようとした。

「美的経験、再考！」と題されたこのワークショップでは、四つの講演がなされた。森功次氏による「美的選択と個性：伝統的美学理論からの逸脱と影響」、松永伸司氏による「スノッブのなにが悪いのか」、青田麻未氏による「観光者と居住者の美的経験—環境美学からの美的経験論再考」、および、高田敦史氏による「美的価値と行為の理由」である。このワークショップには、哲学・美学の専門研究者だけでなく、芸術に関心をもつ一般の人も多数参加し、講演後の討論もきわめて活発であった。全体として強く印象に残ったのは、伝統的な美学がもっぱら芸術作品にその関心を集中してきたのに対して、現在の美学的研究が、その研究対象を、より日常的な美にまで拡大していることと、分析的な議論のスタイルの導入により、美学の基本的な問題と、哲学の他分野との関連が、より見通しのよいものになるという、二つの点であった。このワークショップは、美学の研究者以外の哲学研究者にとって、ふつうの（？）哲学からは距離あるものと思われてきた美学が、哲学の一部であることを再認識させる効果があったのではないかと考える。

【研究の考察・反省】

哲学科では、人文研究所共同研究費の援助を受けて、年度末の3月に哲学ワークショップを開催してきた。その効果として、このワークショップのシリーズは、首都圏での哲学関係の恒例行事のひとつであるだけでなく、若手の哲学研究者の研究動向を知るによい場所であると、みなされている。昨年度の報告では、美学と宗教哲学をテーマとするワークショップをこれまで開催してこなかったことを反省点として挙げたが、今年度は、その課題の半分を果たすことができた。

本年度の反省点としては、取り上げたテーマが、ごく最近の研究動向（形式認識論、教育の認識論、分析美学）にかかわるものに偏ってしまったことがある。昨年度の研究が、とくに哲学史・思想史的なものに重点を置いた結果、それを補足しようとしたためであるが、理論的研究と歴史的研究のバランスを取ることを、今後の共同研究においては、留意すべきであると考ええる。

【研究発表】

Yoichiro Takahashi “Idee und Zeit – Die Probleme der Ideenlehre beim jungen Schopenhauer” Internationale Konferenz

“Der junge Schopenhauer und seine Zeit”, 平成30年2月22日, 於関西学院大学上ヶ原キャンパス

飯田 隆「タイプとアイデア—幾何学的対象の存在論—」ギリシャ哲学セミナー, 平成29年9月9日, 於学習院大学。

飯田 隆「構文論と意味論の区別とは何か, それは何のための区別か」日本科学哲学大会第50回大会, ワークショップ「菊池誠『不完全性定理』を読む」平成29年11月19日, 於東京大学。

小林紀由「神のかきかえをめぐる」日本宗教学会第76回学術大会, 平成29年9月17日, 於東京大学。

【研究成果物】

飯田 隆『新哲学対話 ソクラテスならどう考える?』平成29年11月, 筑摩書房。

永井 均「存在と意味—哲学探究2」平成29年5月～平成30年3月, Webマガジン『web春秋』, 春秋社。

高橋陽一郎「両義的解釈への問い—板橋勇仁氏著『底無き意志の系譜—ショーペンハウアーと意志の否定の思想』をめぐる」『ショーペンハウアー研究』第22号, 日本ショーペンハウアー協会, 平成29年10月, pp.7-19。

高橋陽一郎「板橋氏の質問に対する回答」同, pp.39-46。

2-2 日本史研究と歴史教育

●代表者 関 幸彦（史学科・教授）

●分担者 中村順昭（史学科・教授）

上保國良（史学科・教授）

古川隆久（史学科・教授）

大塚英明（史学科・教授）

堀川 徹（史学科・助手）

【研究の目的および概要】

大学における日本史研究の現状と今後の教育の方向性を考えるために、高校の地歴科教育の実情をふまえ、教科書叙述のなかに反映されるべき事柄を調査・検討し、それを大学の歴史研究の具体的課題につなげることを目的とした。高校から近現代にいたる各日本史分野の研究者相互が数回にわたり自己の課題を提案しつつ、昨今問題とされている歴史用語の精選の方向性についても討議がなされた。また、教科書叙述が具体的なフィールドワークの実践にもとづく内容が少なく、それが生徒たちの学習意欲の減少をもたらしているとの現場教員からの報告もあり、その是正に向けて、日本史の大学教員がどのような形で歴史研究の興味深さを伝えられるかをフィールドワークの実践を展開、提案した。さらに大学での学会報告でも文部科学省の教科書調査官を招き、教科書の内容について、大学の専門研究とのギャップに関して建設的な意見交換を行うなどした。

【研究の結果】

日本史の高校分野の各社の教科書を比較、検討した結果、かつての教科書問題のようなイデオロギー的な偏向的叙述は次第に姿を消し、それなりの学問的成果に立脚した叙述が定着している傾向がここ10年来顕著になっていること、概して、歴史認識が成熟し、教科書を政争の具に用いる状況が少なくなっていること、しかし一方で、依然として暗記主義に偏した叙述も多くみられ、深い耕し方にもとづく内容にいたっておらず、この点で限界も認められるとの判断に至った。今後はその分析状況をふまえ、どのような方向を取れば歴史的思考力をより深化させる内容となるか、受験・試験での形式にも関係するもので、そのあたりでの議論が活発になされた。以下、研究分担者それぞれが対応したテーマに関し、若干のコメントを行う。

古代史（中村）の分野では、武蔵国府や国分寺などの史跡に関する研究を行うとともに、それら史跡を歴史教育や市民の生涯学習の中でどのように活用するかについて考察をすすめた。発掘調査などによる研究成果を市民や生徒に分かりやすく伝えることは歴史研究の重要な役割である。地域の博物館の学芸員、中学・高校の教員、文化財行政の担当者などと大学の研究者との協業が活発に行われるような体制を築くことが課題となる。

中世史（関）の分野では、フィールドワークを教育現場で体现するためにどのような事例があり得るかとの観点から、夏季期間に北陸（福井県）の中世の地城を踏査し、冬季期間には熊野古道を歩き、信仰の在り方や伝承の伝わり方について検討する機会を得た。これらの具体的実践を教科書レベルでの反映のみならず、大学の歴史教育にどう活かすかが問われることになる。

近世史（上保）の分野では、江戸幕府存在期の教育施設として高等学校の教科書等に見える各種の教育機関（昌平坂学問所・藩校・郷校・私塾[古義堂・芝蘭堂・塾々斎塾・鳴滝塾・鈴の屋・松下村塾]・諸生寮・寺子屋等）などについて検討したが、ここでは幕府直轄の昌平坂学問所について寛政異学の禁を中心に述べておくことにする。寛永期に江戸上野忍ヶ岡に設けられた林家の家塾は元禄時に湯島に聖堂学問所として移転したが、寛政2年に松平定信は朱子学者柴野栗山の建言を入れここでの朱子学以外の異学の教授を禁止した。さらに定信はここを官立とし

朱子学への理解を試した「学問吟味」を実施し、幕吏へ登用につなげている。もちろんこの学術試験への対策本も出されおり（遠山景晋『対策則』）、さらに天保8年には大坂町奉行所の与力だった大塩平八郎が乱をおこしているが、彼は幕府が嫌う陽明学者だったのである。すなわち「異学の禁」とはあくまでも寛政期の松平定信の施策であり、それゆえに「寛政」と冠する用語なのである。今後は朱子学と陽明学の違いを高校生にも考えさせ、出来れば昭和の三島由紀夫事件の背景を理解させたいものである。

近現代史（古川）の分野は、論文「近代日本における建国神話の社会史」（『歴史学研究』958, 2017）と口頭発表「近代日本における建国神話の社会史」（「歴史/物語を歴史化する——神話・文学を入りに」日本大学人文科学研究所総合研究プロジェクト「「ジャンル」の記憶とその転換をめぐる研究——東アジアの言語・文化・表現史を中心に」（代表・紅野謙介）主催）2017年7月25日 日本大学文理学部）は、戦前日本における建国神話の受容に関する研究で、戦前日本の初等教育における歴史教育の建前と実態に関しても論及しており、歴史教育のあり方を考える手がかりの一つとなりえるであろう。

古代史（堀川）の分野では、関同様フィールドワークの機会を得、島根県（出雲地域）の調査を行い、古代における人々の暮らしについて検討した。島根県の調査によって古代の人々の暮らしについて多くのことがわかっているが、それらを広く歴史教育にどのように活用するかという点を考察し、現地の研究者等と議論することができた。また、歴史教育について、研究課題である日本史研究と歴史教育をどのように接合すべきか、という点を検討し、研究成果として発表することができた。

なお、文化財学の視角から博物館での展示と歴史教育の関係性を検討していた大塚は、7月17日に死去した。大塚の研究は他の担当者に引き継がれ、とりわけ堀川が島根県の博物館にて展示担当の学芸員と歴史教育の在り方について議論をおこない、堀川の研究成果の一部として結実している。

【研究の考察・反省】

以上、各自の専門分野に対応した形で研究と教育の相互補完について、各分担研究者間での議論にまだ不十分さが目立ち、十分に消化しきれていない。より具体的なテーマを組み込むことで、現場の高等学校の教員との相互補完を古代・中世・近世・近代・現代と時代ごとに細分化して提案できればと考えるところである。

【研究発表】

- ・関 幸彦「武家とは何か、幕府とは何であったか」（日本大学史学会大会、2017年6月）
- ・古川隆久「近代日本における建国神話の社会史」（「歴史/物語を歴史化する——神話・文学を入りに」日本大学人文科学研究所総合研究プロジェクト「「ジャンル」の記憶とその転換をめぐる研究——東アジアの言語・文化・表現史を中心に」（代表・紅野謙介）主催）2017年7月25日 日本大学文理学部）
- ・古川隆久「紀元2600年奉祝をめぐる「皇室ブランド」を中心に」（日本史研究会2017年11月例会「大衆消費と天皇一大正・昭和戦前期を事例として」2017年11月19日京都大学人文科学研究所）
- ・古川隆久「紀元2600年奉祝の諸相」（第17回文化資源学フォーラム「周年の祝祭—皇紀2600年・明治100年・明治150年—」主催：東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室、2018年2月11日、東京大学本郷キャンパス）
- ・堀川 徹「大会報告批判 中大輔報告「日本古代国家形成期の交通と国司—その前史と成立・展開—」について」（歴史学研究会例会、2017年7月）

【研究成果物】

- ・関 幸彦「中世史学史の点と線」(井上章一編『学問をしぼるもの』思文閣出版, 2017年10月)
- ・関 幸彦「「武家」とは何であったか—近世の中の中世—」(『桜文論叢』第96巻, 2018年2月, 33頁～61頁)
- ・関 幸彦『その後の鎌倉』(山川出版社, 2018年(予定))
- ・中村順昭「地方官衙の役人—駅家を中心に」(『日本古代の道路と景観』八木書店, 2017年5月, 113～130頁)
- ・中村順昭「国師と地方寺院」(『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社, 2017年8月, 48～56頁)
- ・中村順昭「古代武蔵国府の地域史」(『日本歴史』836号, 2018年1月, 55～60頁)
- ・中村順昭「飛鳥・藤原の時代と東アジア」(『古代史講義』筑摩書房, 2018年2月, 73～86頁)
- ・中村順昭「律令成立期の国造と国司」(『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館, 2018年3月, 529～552頁)
- ・古川隆久「『木戸幸一日記』と『細川日記』(細川護貞)——昭和終戦期の政界上層部」(黒沢文貴・季武嘉也編著『日記で読む近現代日本政治史 史料で読み解く日本史2』ミネルヴァ書房, 2017年4月, 206～218頁)
- ・古川隆久「植民地期台湾で巡回上映された娯楽映画の特徴」(三澤真美恵編『植民地期台湾の映画』東京大学出版会, 2017年9月, 30～60頁)
- ・古川隆久「近代日本における建国神話の社会史」(『歴史学研究』958, 2017年6月, 27～36, 46頁)
- ・古川隆久「五・一五事件後の政党内閣復活工作と前田米蔵——政友会「更生」から近衛新党へ——」(『研究紀要』〔日本大学文理学部人文科学研究所〕94, 2017年9月, 23～43頁)
- ・古川隆久「広田内閣期の前田米蔵」(『桜文論叢』第96巻, 2018年2月, 63頁～84頁)
- ・堀川 徹「古代日本の国際社会への参加」(歴史科学協議会編『知っておきたい歴史の新常識』勉誠出版, 2017年6月, 28頁～31頁)
- ・堀川 徹「歴史教育と歴史研究の接続に向けて—教員養成の視角から—」(『星槎大学教職研究』第2巻第1号, 2017年8月, 67頁～72頁)
- ・堀川 徹「人制から部民制へ」(篠川賢ほか編『国造制・部民制の研究』八木書店, 2017年10月, 111頁～131頁)
- ・堀川 徹「評制の展開と国司・国造」(『ヒストリア』266, 2018年2月, 55頁～81頁)
- ・堀川 徹「歴史教育の現場における用語とその問題」(『教育実践年報』No.1, 2018年2月, 1頁～3頁)
- ・堀川 徹「県・県主小考—三嶋竹村屯倉設置説話の事例から—」(加藤謙吉編『日本古代の氏族と政治・宗教』上, 雄山閣, 2018年3月, 181頁～198頁)

2-3 大学院・学部・学科教育を視野に入れた日本語学・日本語教育学ならびに書学研究の融合

- 代表者 鈴木晴彦（国文学科・教授）
- 分担者 荻野綱男（国文学科・教授）
田中ゆかり（国文学科・教授）
鈴木功眞（国文学科・教授）
鮮于 媚（国文学科・助教）

【研究の目的および概要】

本共同研究は、その成果の学部・学科教育への反映を視野に入れた複数の領域の融合的研究と学部・大学院教育への反映を目指すものである。なお、複数の領域とは、日本語学（田中ゆかり、荻野綱男、鈴木功眞）、日本語教育（鮮于媚）、書学（鈴木晴彦）の3領域である。本研究課題の構成メンバーは合計5人ということになる。

本研究では、以下の2つの柱を設け、複合的な領域の融合と学部・大学院教育への反映をめざす。

第一の柱は、現代日本語学と日本語教育の融合である。研究テーマは、現代の日本語と日本語社会の実態把握とその背景の解明である。日本語学の研究成果は、生きた日本語・日本語社会を反映するもので、日本語教育に反映されるべきものである。一方、日本語教育の立場からは、どのような日本語学的研究成果が期待されるものであるのか、という提案が可能である。双方向に理解を深め、研究・教育の両面における融合をめざす。

第二の柱は、文献日本語学と書学の融合である。研究テーマは、右筆と日本語正書法研究のための文献に関する基礎的研究である。本研究の成果は、書学ならびに日本語史の教育への還元が期待される。

本研究では、以下の4チームを設け、複合的な領域の融合と学部・大学院教育への反映をめざした。

- ①現代日本語学1（荻野綱男）
- ②現代日本語学2（田中ゆかり）
- ③書学・文献日本語学（鈴木晴彦・鈴木功眞）
- ④日本語教育（鮮于媚）

それぞれの成果を共有することによって、現代日本語学と日本語教育、文献日本語学と書学の融合をめざした。以下、成果報告は①～④について記すこととする。

【研究の結果】チームごとに研究成果を示す。

①現代日本語学1（荻野綱男）：本研究費によって、関西大学 千里山キャンパスで行われた社会言語科学会に参加し、さまざまな研究発表を聞き、学際的な研究を進める際に必要な指針を得ようとした。社会言語科学会自体が学際研究をモットーにしている学会であり、各種研究の成果を知ると同時に、どのように学際的なテーマを選べばいいのか、どのようにアプローチすればいいのかなど、多方面に関して有益な知見を得ることができた。これらを通して多分野の研究の融合に関して、考察が深まった。

②現代日本語学2（田中ゆかり）：本研究費によって、社会言語科学会に参加した（2017年9月、於：関西大学千里山キャンパス）。また、そこから得た知見などを基に下記リストの通り、研究成果としてさまざまなかたちで公開した。同時に、新たな競争的資金「2018年度「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度（千代田区）「WebGISを用いた千代田ヴァーチャル時空散歩アプリの構築」（代表者）」ならびに統計数理研究所一般研究2（30-共研-2026 78代表者）「異なる手法を用いた話者類型の抽出とその比較・分析 一般研究2」の取得につなげた。

③文献日本語学（鈴木功眞）・書学（鈴木晴彦）：日本語史、及び書学の調査では書記残存資料の実見、及び金石文

資料の伝存する地域文化の考察のため、松坂・伊勢地域の中でも本居宣長記念館、及び伊勢神宮周辺の実地踏査を行った。とりわけ本居宣長記念館周辺の松坂を実地踏査し、近世の伊勢参詣と宣長の国学の経済的基盤について松坂商人の館の見学によって具体的に知ることができた。その上で、伊勢神宮周辺の地理的重要性も確認できた。これら実地調査に付随し、建造物内に展示されている残存資料や書蹟等に関して書法や日本語表記についての意見交換を行うことにより、以後の研究や教育現場へ反映させることができる。また、これらを間近に観察することができ、当時の書体等書記実態を実見できたことは大変有益であった。その他、実地調査に伴って撮影・記録された写真は、研究のみならず教育現場においても有用な資料としての活用が期待される。

- ④日本語教育（鮮于媚）：日本語教育班では、日本語学習者、主に、中国語、韓国語を母語としている学習者による日本語の学習過程を多角度からの調査および分析を行なった。調査は実践調査、実証調査の二つ側面から実施した。実践研究として、自己表現力と日本語の表現、そして、その教育的サポートを中心に行なった。この調査は、1年間、学習者が日本の文化や社会をどのように受け入れ、どのように自己表現に繋げるのかを調査したものである。調査の結果では、「個」の投影感が強いものであれば文化の理解、そして、関連した言語表現にも親密感を感じる可能性があることが示唆された。今後、インタビューの結果をさらに分析に論文に投稿をする予定である。二つ目の実践研究として、シャドーイングを用いた発音練習である。この調査は、一人で練習できるように制作したプログラムを用いて練習を行なった場合、どのような変化があるのかについて調査したものである。その結果、イントネーションへの自然度が高くなり、聴覚的な評価も高くなる結果が得られた。最後に、実証研究について報告をする。今年の実証研究としては、日本語の長短音素、中でも促音を中心にデータを収集、分析を行なった。そこで、二つの結果が得られた。まず、学習者は日本語の直音の連続の単語時に休止を入れ、促音が入っているように聞こえる、いわゆる、促音挿入の現象があることである。その原因は、生成時における調音法に問題がある可能性が示唆された。次に、学習者は促音と非促音の知覚する際に、母語話者より短い時間で促音と判断する境界値が存在していることもわかった。これらの結果はすべてまとめて、論文として投稿する予定である。

【研究の考察・反省】

チーム別の研究としては、末尾研究成果に示す通り、一定以上の成果が上がった。また、領域間融合という点においても、研究の結果として示した通り、書学・文献日本語学チームで有効に機能している。現代日本語学と日本語教育の融合については、4チームの研究成果を共有することによって、両者が研究と教育の両輪であることが認識され、こちらも有効に機能した。今後の課題としては、より積極的な融合を目指す方法を検討することなどを指摘することができる。

【研究発表】チーム・個人別に成果を示す。

①現代日本語学1（荻野綱男）

- 2018.2.10「基調講演・情報化時代の学際的日本研究」韓国日本学会（KAJA）第96回国際学術大会, pp.21-25

②現代日本語学2（田中ゆかり）

- シンポジウム 発題1「テレビドラマと「方言」—ヴァーチャル方言の世界へようこそ—」群馬県立女子大学国文学科連続シンポジウム「第1 国語国文学を学ぶ楽しみ 方言研究の楽しみ」（2017年7月1日）於：群馬県立女子大学（パネリスト：田中ゆかり、新井小枝子、神戸道子）

- シンポジウム 発題2「方言ヒーロー／ヒロインは幕末ものに咲く！」「時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる！世界観を形づくる「ヴァーチャル時代語」」（主催：科学研究費基盤研究（C）（課題番号 15K02577 代表者：田中ゆかり）2015～2017年度「ヴァーチャル方言研究の基盤形成と展開」，早稲田大学演劇博物館共催，日本大学国文学会協賛）（2018年03月09日 於：早稲田大学小野記念講堂）（登壇者：金水敏，児玉竜一，吉川邦夫，大森洋平）
- 国際学会講演（招待） The “Dialect Cosplay” Phenomenon: Detaching Regional Dialects from Geographic Localities, The Sixteenth International Conference on Methods in Dialectology METHODS XVI (Methods16) Plenary Talk (2017年08月08日)（於：国立国語研究所）
- 講演（招待）「方言コスプレ」現象：土地から解き放たれる「方言」ブリティッシュコロンビア大学（2017年09月11日，バンクーバー市）
- 講演（招待）「方言コスプレ」とその社会的背景」韓国日語日文学会2017年冬季国際学術シンポジウム「方言コスプレとコミュニケーション」（於：韓国外国語大学校）（2017年12月16日，ソウル特別市）
- 卓話（招待）「方言ヒーロー／ヒロインは幕末ものに咲く！」（東京神田ロータリークラブ例会，於：ホテルグラントバレス）

③書学・文献日本語学（鈴木晴彦・鈴木功眞）：

(1) 鈴木晴彦

- 特になし

(2) 鈴木功眞

- 特になし

④日本語教育（鮮于媚）

- 口頭発表（単）「音声研究をするための手続き的知識について—VOTを測定の実践—」東京音声研究会（2017年5月13日）（於：東京，日本大学文理学部）
- 口頭発表（単）「日本語学習者に見られる促音への知覚バイアス—韓国語の濃音の知覚境界値との比較—」東京音声研究会（2017年7月8日）（於：東京，日本大学文理学部）
- 口頭発表（単）「韓国語母語話者の促音と非促音の生成の特徴—母語話者による促音挿入判定に基づく新たな仮説—」東京音声研究会（2017年10月7日）（於：東京，日本大学文理学部）
- 口頭発表（単）「韓国語母語話者の生成時に見られる促音挿入について—先行母音のフォルマントおよび子音の持続長を中心に—」『日本音響学会春季研究発表会講演論文集』pp.1401-1402, 日本音響学会（2018年3月15日）（於：埼玉，日本工業大学）
- 口頭発表（単）「シャドーイングプログラムを用いた自律発音練習の実践—イントネーション・アクセントの変化—を中心に—」『日本語教育方法研究誌』Vol.24, No. 2, pp.44-45, 日本語教育方法研究会（2018年3月24日）（於：名古屋，名古屋大学）

【研究成果物】チーム・個人別に成果を示す。

①現代日本語学1（荻野綱男）

- 2017.6.20「データの視覚化（9）自作プログラムで Canon LIPS プリンタに出力する」計量国語学 Vol.31, No. 1,

pp.48-59

- 2017.9.1「新語の普及過程をツイッターで調べるには」日本語学 Vol.36, No.10, pp.34-41
- 2017.9.20「日本語研究におけるコンピュータ利用の一側面」日本語学研究 (ISSN 1229-7275) 第53輯 pp.5-20
- 2017.11.10「技術革新と日本語」日本語学 Vol.36, No.12, pp.164-174

②現代日本語学2 (田中ゆかり)

- 論文「全国2万人webアンケート調査に基づく方言・共通語意識の最新動向」『語文』158 (日本大学国文学会) pp.1-35 (2017年6月25日)
- エッセイ「読み解き方言キャラ ②土佐弁ヒーロー龍馬見参!」『考える人』60 2017年春pp.112-113 (新潮社) (2017年04月)
- インタビュー記事「自著紹介『方言萌え!? ヴァーチャル方言を読み解く』岩波書店「方言」を価値あるものとして、ポジティブに受容する時代」『週刊教育資料』1442, p.35, 教育公論社 (2017年8月7・14日号)
- インタビュー記事「方言は「おもしろい」「かわいい」!?!」『特集 生きている日本語 方言コスプレと新オノマトペ』『ビッグイシュー日本版』329, pp.8-10, ビッグイシュー日本 (2018年2月15日号)
- 報告書 (編著)『銀座の言語景観7』(私家版) (2018年02月)

③書学・文献日本語学 (鈴木晴彦・鈴木功眞):

(1) 鈴木晴彦

- エッセイ「ふるさと一変」美術新聞社『千趣万香』(33号) p.7 2017年4月
- 論文「『古京遺文』管見」早稲田大学會津八一記念博物館『狩谷掖斎学業とその人』pp.30-34 2017年11月

(2) 鈴木功眞

- 論文「落葉集小玉篇の和訓に於ける第四類本倭玉篇との関係に就いて」『語文』158 (日本大学) pp.135-148, 2017年6月25日
- 論文「夢梅本倭玉篇の和訓に就いて—倭玉篇諸本の「巾」部の対照を通して—」『学芸国語国文学』50 (東京学芸大学) 11ページ分, 2018年3月15日

④日本語教育 (鮮于媚)

- 論文 (共)「中国人日本語学習者による促音時間制御特性の分析」『中日言語対照研究論叢』第8号, 中日言語対比研究会, 華東理工大学出版社, 280-295 (2017年8月) (著者: 張琰龍・鮮于媚・加藤宏明・勾坂芳典)
- 論文 (共)「知覚特徴量に基づく日本語学習者の促音聴取難易度推定」『連語論研究』第41号, 国際連語論学会, 59-68 (2017年9月) (著者: 張琰龍・中嶋秀治・鮮于媚・加藤宏明・勾坂芳典)

2-4 日本文学に関する広域的総合研究

- 代表者 藤平 泉（国文学科 教授）
- 分担者 梶川信行（国文学科・教授）
阿部好臣（国文学科・教授）
竹下義人（国文学科・教授）
佐藤至子（国文学科・教授）
久米依子（国文学科・教授）
紅野謙介（国文学科・教授）
高 榮蘭（国文学科・教授）
武内佳代（国文学科・准教授）
高橋優美穂（国文学科・助手）
鈴木雅裕（国文学科・助手）

【研究の目的および概要】

本研究は、昨年度の共同研究の成果を踏まえ、上代から現代に至るこれまでの日本文学研究の枠組みを越えて、国内外の研究、特に、近隣東アジア諸国における日本文学、歴史学・社会学等近接研究分野の成果を吸収、それと連携しつつ日本文学の新しい視点を明らかにすることを目的とする。特に上代、近現代においては、ここ数年間関係近隣諸国の研究者との研究交流の活発化しており、その成果を着々と発表しつつある。各時代別では、古代前期においては朝鮮半島での歴史学、考古学研究の成果を中心に踏まえて広く古代の東アジアにおける文化の相互交流を視野に上代文学に新たな視点を構築する。また近現代文学研究においては、日本占領時代の朝鮮における歴史研究を吸収しつつ、当時の出版に関わる検閲の状況や抵抗、その影響を海外の研究者と連携しながら東アジア全般を視野に進める。平安、中世、近世文学研究においても、歴史学研究や発掘調査、出版文化研究等の最新成果を元に、従来の縦割りの文学史的枠組を越えて新しい日本文学研究の視点を模索する。本共同研究は、これまで日本文学を文化総体として位置づけ、文学の形成される様々な環境について、従来の文学研究の領域とされてきた枠を越境しまた日本国内に留まらず諸外国研究者との研究交流を通じ、文学の内外との多様な関係性の中で、新たな日本文学研究への視点を模索してきた。それらここ数年の成果の上に、本年度は、さらにそれを前進させるべく各専門分野における研究を深化させ、また研究集会、シンポジウムの実施などを通しその成果を発表することを目的とする。本研究の展開の中心軸となるのは、研究分担者それぞれが専門とする研究領域での個別的研究を進めると共に、個別的研究を接続させる研究上のアイディアの構築や研究領域・時代を横断する問題意識の形成をはかるため研究会、シンポジウム等を展開する。そのため国文学科の研究組織である日本大学国文学会の活動において研究集会やシンポジウム、講演会等を企画・実施し、研究を展開させる。本研究の分担者は、日本文学のすべての時代をカバーできる構成になっているので、各自の個人研究活動と連繋するかたちで、研究全体としての具体的な成果を積み上げることが可能である。

【研究の結果】

研究成果物

【口頭発表 講座】

阿部好臣

- ・物語研究会12月例会 『竹取物語』源流考ー「ハイヌウェレ・奈具社・食料起源と神」2017年12月 青山学院大学

久米依子

- ・日本近代文学会 春季大会 パネル発表「女同士のきずなの生成と分断そして再生——明治から戦後にかけて」ディスカッサント（芳賀祥子・菊地優美・山田順子・レティツィア・グリーニ発表）2017年5月27日 東京外国語大学
- ・オーストラリア日本学会Japanese Studies Association of Australia (JSAA)
「Japanese girls'fiction after World War II and Anne of Green Gables 第二次大戦後の日本の少女小説と『赤毛のアン』」2017年度研究大会 2017年6月28日 オーストラリアウーロンゴン大学 (UNIVERSITY OF WOLLONGONG)
- ・「フィチンさんと三つのハルピン——植民地のリプレゼンテーション 佐多稲子・上田としこ・村上もとかー」日本大学文理学部人文科学研究所総合研究（「ジャンルの記憶」とその転換をめぐる研究——東アジアの言語・文化・表現史を中心に）主催研究会 11月9日 日本大学文理学部中国語中国文化学科会議室

高 榮蘭

- ・「「ジェンダー」と「朝鮮／日本」の危うい関係ー『＜戦後＞の誕生』・『平和なき「平和主義」』を手がかりにー」, 国際シンポジウム「再び戦後を問う」, 科研費基盤研究C「冷戦アジアの「革命」とベトナム戦争における「日本語」の役割に関する研究」主催, 2017年5月14日 日本大学文理学部
- ・The Korean Peninsula and the Nuclear Threat: through the medium of literature, “Third Annual UCLA Trans-Pacific Symposium: “Kizu・傷/Wounds”, Cosponsored by TERASAKI CENTER FOR JAPANESE STUDIES, Center for Korea Studies, JUNE 10th 2016, at UCLA
- ・「日米地位協定 第9条「軍隊構成員などの出入国」をめぐる」, シンポジウム「日米地位協定から見える沖縄・日本・世界」, 「戦後沖縄・歴史認識アピール」のつどい2主催, 2017年7月15日 早稲田大学
- ・日本は誰の見方でもないー非武装中立「日本」と「朝鮮戦争」物語」, グローバルな記憶空間としての東アジア 第1回国際セミナー, 韓国西江CGSCトランスナショナル人文学研究所主催, 2017年9月23日 西江大学（韓国, ソウル市）
- ・「絶叫と沈黙のあいだー「文学・記憶・女」の移動を軸にー」, シンポジウム「ディアスポラ文学と想像力」, 第5回 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 2017 ソウル大会, 東アジアと同時代日本語文学フォーラム・他主催, 2017年10月28日 東国大学（韓国, ソウル市）
- ・「出入国をめぐる文化政治と文学ーアジア通貨危機と李恢成の韓国籍取得を手がかりにー」, 日本大学・国立政治大学共同ワークショップ, 国立政治大学台湾文学研究所・日本大学人文科学研究所総合研究「「ジャンルの記憶」とその転換をめぐる研究——東アジアの言語・文化・表現史を中心に」共催, 2017年12月1日 国立台湾政治大学（台湾, 台北）
- ・「他者をめぐる翻訳-政治の力学——冷戦アジアにおける日本語空間の再編を手がかりに」, 国際シンポジウム「東アジアの文学・文化研究の国際化とナショナリズムの陥穽」, 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏ー東アジアにおける人文学の危機と再生」第2グループ主催, 2017年12月9日 早稲田大学

紅野謙介

- ・「早稲田文学増刊 女性号」刊行記念シンポジウム「女性とその文学について男性として向き合うことの困難と必然」(河野真太郎・斎藤環・市川真人と) 2017年11月26日 早稲田大学

高橋優美穂

- ・和歌文学会1月例会「足利義教と法楽和歌—『新玉津島社三十首和歌』を端緒として—」2018年1月6日 日本大学文理学部

鈴木雅裕

- ・古代文学会『古事記』における天照大神奉祭の起源—「佐久久斯侶 伊湊受能宮」による表出をめぐって— 単独 2018年2月
- ・上代文学会 仮想される言語空間—『古事記』における「言向(趣)」をめぐって— 単独 2017年11月

【研究論文】

梶川信行

- ・「戦時体制下の『万葉集』一斑——佐佐木信綱と武田祐吉——」『史聚』(史聚会) 50号 2017年4月
- ・「深層の異国——『万葉集』と百濟——」
蔵中しのぶ編『古代の文化圏とネットワーク』(竹林社刊) 2017年年11月
- ・「『万葉集』の宴席歌と琴——越中国府で——」『史聚』(史聚会) 51号 2018年3月

阿部好臣

- ・『竹取物語』源流考—縄文への眼差し 『物語研究』十八号, 2018年3月

藤平 泉

- ・藤原秀能の変容 語文第158輯 2017年6月

佐藤至子

- ・『江戸の出版統制』吉川弘文館, 2017年11月
- ・(編)『雨月物語』(角川ソフィア文庫ジギナーズクラシックス) KADOKAWA, 2017年12月

久米依子

- ・「明治から昭和へ——古典の大衆化と少女文化」助川幸逸郎・立石和弘他編『新時代への源氏学10 メディア・文化の階級闘争』(竹林舎) 所収, 2017・4・5刊 151ページ~173ページ
- ・「大正期少女雑誌から婦人雑誌への位相——伊東英子の軌跡を視座として——」
『国語と国文学』第94巻第5号(特集・近代のメディア——雑誌と文学) 2017年5月1日刊 18ページ~33ページ
- ・「御転婆」「生意気」「瞳／瞳子／眸」「リボン」小森陽一編集『漱石辞典』(翰林書房) 所収, 2017・5・24刊 323ページ, 357ページ, 364~366ページ, 379ページ

高 榮蘭

- ・「'원폭'을 둘러싼 상상력의 틀: 베트남 전쟁과 '아시아' 담론을 중심으로 (「原爆」をめぐる想像力の枠組み——ベトナム戦争と「アジア」言説を手がかりに)」, 『두 번째 '전후' 1960~1970년대 아시아와 마주친 일본 (二度目の「戦後」1960~1970年代アジアに遭遇した日本)』, 한울아카데미, 韓国語, pp. 267-294, 2017年6月
- ・「不良分子」の指紋と「朝鮮人」の位置づけから—高野麻子『指紋と近代』を手がかりに—, 『クアドランテ』第20号, 東京外国語大学海外事情研究所 2018年3月

紅野謙介

- ・「内務班というシステム」(野間宏『真空地帯』解説, 岩波文庫, 2017年12月15日, pp.605-616)
- ・『大菩薩峠』と岡千代彦の「自由活版所」—印刷工とアナキズムのネットワーク—(『昭和文学研究』76集, 2018年3月, pp.2-16)

武内佳代

- ・「三島由紀夫と『マドモアゼル』——『肉体の学校』へようこそ」(『日本古書通信』82(11), 2017年11月)
- ・「三島由紀夫と『婦人画報』—「優雅」な女賊黒蜥蜴」(『日本古書通信』82(9), 2017年9月) 4
- ・「三島由紀夫と『若い女性』—『お嬢さん』の〈幸福な結婚〉」(『日本古書通信』82(6), 2017年6月)
- ・「三島由紀夫と『婦人倶楽部』——婚約不履行時代の『永すぎた春』」(『日本古書通信』82(5), 2017年5月)

鈴木雅裕

拡張する系譜—「孝霊記」若建吉備津日子命から「景行記」倭建命へ—『語文』第159輯 2017年12月

高橋優美穂

- ・「足利義教の文学活動について—附・足利義教文学年譜稿—」『語文』第158輯, 2017年6月, 日本大学国文学会
- ・「日本大学文理学部所蔵『百人一首聞書』について」『語文』第158輯, 2017年6月, 日本大学国文学会 *辻勝美氏・金子馨氏・荒川真一氏・許藝涵氏と共同執筆

【その他 講座 書評 解説 等】

梶川信行

- 「教科書の中の万葉歌——大伴家持の春愁歌を読む——」『語文』(日本大学国文学会) 158輯 2017年6月
- 「教科書の中の万葉歌——大伴旅人の望郷歌を読む——」『語文』(日本大学国文学会) 159輯 2017年12月
- 「教科書の中の万葉歌——雄略天皇御製を読む——」『語文』(日本大学国文学会) 160輯 2017年3月

阿部好臣

「源氏物語端役列伝」(『相模原「源氏」の会ニュース』)

佐藤至子

- ・「〈研究へのいざない〉落語における〈言葉を話す動物〉の表象」『語文』160輯, 2018年3月

久米依子

- ・「フィチンさんの引き揚げ体験スケッチ——上田としこから佐多稲子へ」日本近代文学館主催「講座 資料は語る」10月21日 日本近代文学館

武内佳代

- ・「〈新刊紹介〉金井景子・棚沢健・能地克宜・津久井隆・上田学・広岡祐著『浅草文芸ハンドブック』」(『昭和文学研究』第75集, 2017年9月, 昭和文学会)
- ・「小説一 指 鷺沢萌」(『教授資料 国語総合 現代文編1』2017年4月, 教育出版株式会社)
- ・「月」「策略」『漱石辞典』(翰林書房, 2017年5月)

高 榮蘭

- ・慶熙大学校日本学論集刊行委員会編『談論と表現の日本学 담론과 표현의 일본학』J & C (韓国語), 2017年11月, 全599頁
- ・「1930年代, いま・この根っこを探して 出版帝国のプロパガンダ, 「クールジャパンへの進化」, 『週刊 京郷』1243号, 京郷新聞社, 2017年9月5日, pp.64-66
- ・「ベトナム反戦運動」(pp.91-95)「検閲と表現」(pp.128-132)「朝鮮半島と核危機」(pp.193-197), 川口隆行編『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社, 2017年9月
- ・「幸徳秋水」(pp.42)「日本, 日本人」(pp.526-528), 小森陽一・他編『漱石辞典』翰林書房, 2017年5月
- ・「朝鮮半島の「日本語教育」とコミュニティ」, 伊藤守・他編『コミュニティ事典』春風社, pp.16-17, 2017年7月

【研究の考察・反省】

本年度も各分野において精力的な研究発表や論文発表が行われ、特に海外における学会発表が多く行われた。近隣学問領域との共同研究も共同での研究発表会、シンポジウムの開催など大きな成果をあげたといえる。また、一般への啓蒙的活動も行われ、台湾、韓国・オーストラリアなど海外における研究発表、シンポジウム等への参加も精力的に行われた。周辺学問領域や、海外での研究活動は、活発であったが、日本文学の各時代間での領域をまたいだ研究は、まだ少ない。日本文学の各時代の研究は、現在細分化しており、時代枠を超えた研究が望まれる。

2-5 時代の要請に応えた中国学の発信に向けて

- 代表者 青木 隆（中国語中国文化学科・教授）
- 分担者 大川謙作（中国語中国文化学科・准教授）
神谷まり子（中国語中国文化学科・准教授）
小浜正子（中国語中国文化学科・教授）
館野正美（中国語中国文化学科・教授）
張 麗群（中国語中国文化学科・教授）
平井和之（中国語中国文化学科・教授）
山口 守（中国語中国文化学科・教授）

【研究の目的および概要】

日本は、古くからの漢学の伝統があり、極めて高い水準の研究成果が蓄積されてきた漢学大国である。さらに、近代以降、伝統的漢学にあきたらず、人文諸科学のさまざまな領域から新しい角度からの研究が盛んに行なわれている。本学科は、そのような日本の中国学研究の第一線の専門家を擁する中国学の研究センターの一つである。

非西洋世界の西洋化が推し進められた19世紀後半以降、中国の知的資源は、日本社会の知的ニーズの主たる対象でなくなったかのようであった。しかし、21世紀の現在、近年の顕著な経済的発展に裏打ちされた中国の国際的プレゼンスの増大により、長い歴史にわたる中国の知的遺産を、内外にわかりやすい形で伝えることがかつてないほど緊急の世界的課題になっている。いうまでもなく、こうした課題を担うことのできる中国学の専門家集団は、本学科においてほかにない。本共同研究は、そのような中国学のそれぞれの領域で研究を深化させ、その成果を内外に発信する方法を探ることを目的とするものである。

【研究の結果】

中国語中国文化学科のスタッフである研究代表者及び分担者が、個人の専門領域に即した中国研究を推進し、以下のような成果を得た。具体的には、研究代表者の青木が総括を勤めると共に中国前近代イスラム思想の研究を、研究分担者の大川が現代チベットにおける社会文化史的研究を、同様に神谷が清末民国期の社会小説に描かれた新しい女性像に着目した中国近代文化論的研究を、小浜が都市社会論的・ジェンダー論的な観点から見た中国近現代史研究を、張が日中比較言語対照の立場から見た現代中国語語法研究を、館野が中国医学を受け継ぎつつ独自の発展を見せた江戸時代の漢方医学の理論の研究を、平井が長年にわたる自己の現代中国語教育の経験を踏まえた中国語教育法の研究を、三澤が中国語圏映画史の観点から見た第二次戦後台湾のメディア政策史研究を、山口が中国語圏全体を俯瞰した近現代中国・台湾文学史研究をそれぞれ担当し、研究成果を発表した。

【研究の考察・反省】

本学科は、中国内地の漢族による漢学を主要な研究対象とするにとどまらず、中国内地の内なる他者である中国ムスリム、チベット族を中心とする周辺部の少数民族、台湾・香港さらには華僑・華裔をも対象に加え、中国内地の伝統的な視点及びグローバルな視点を兼ね備えた幅広い中国文化研究を展開してきた。今年度も、台湾における文学研究や世界各地の華語・華文の文学を論じる山口守教授の研究や、チベットの文学や社会を分析する大川謙作准教授の研究など広い地域における広義の中国文化や、斬新な視覚で現代文学を分析する神谷まり子准教授の研究、中国ジェンダー研究をまとめた小浜正子教授の編著、中国医学と日本の漢方医学を両者の関係性に注意しつつ論じる館野正美教授の研究など、本学科がかねてから示していたはば広い研究の方向性をさらに明確にし、着実に発展させることができたと言う事ができる。また、本学科で推進されている研究の内容をわかりやすい形で発信す

るという点においても、日本語・日本国内に閉じた形の研究発信にとどまらず、中国語・英語による研究発信、国際的な学会会議や媒体における研究発信が積極的に展開された。また、専門家を対象とした学術発表にとどまらず、一般向け啓蒙書の編集や分担執筆も積極的に行なわれた。以上より、今年度の本学科の学術研究は、その内容・形式ともに本学科の目指す研究発信として大いに満足すべきものであったといえる。

【研究発表】

- ・大川謙作「見えざる台湾チベット人：不可視性の構造」（日本大学・政治大学共同国際ワークショップ「文類的記憶 与其轉換的研究」2017年12月1日 政治大学台湾文学研究所）
- ・館野正美「〈未病を治す〉と〈医は意なり〉：中国医学の思想的淵源」（第68回日本大学哲学会学術研究発表会 17年10月28日）
- ・Masami Tateno, "Zhuangzi and Dreams: from Philosophical and Medical Point of View", University of Kansas, Lawrence, KS, 2017.10.31.
- ・山口 守「巴別塔之後：華語語系到母語之外（After Babel: From Sinophone to Exophone）」「世界華文文学区域關係 與跨界發展」国際学術研討会，中国：浙江大学人文学院，2017年4月8日。
- ・山口 守「巴金在台湾」「巴金和他的朋友們」展開幕式講演，文訊雜誌社・巴金故居・紀州庵文学森林共催，台湾台北：紀州庵，2017年6月17日。
- ・山口 守「痛苦的张我军的痛苦：被文学和政治夹击的主体性」认知新维度国际学术研讨会，北京第二外语学院，2017年9月23日。

【研究成果物】

- ・青木 隆「イスラーム教の伝来と現状—中国内地のムスリム文化史」、『中国文化事典』丸善出版株式会社，平成29年4月20日。
- ・Kensaku Okawa, "A Study on Nang zan: On the Reality of the 'Servant Worker' in Traditional Tibetan Society." In Franz-Xaver Erhard et al eds. *Ancient Currents, New Traditions: Papers presented at the Fourth International Seminar of Young Tibetologists*, Berlin: Edition Tethy, 2017.5.
- ・大川謙作『セルニャ：チベット文学と映画製作の現在 Vol.5』，東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2018年3月。（共編）
- ・ペマ・ツェテン著，大川謙作訳「轢き殺された羊」，『セルニャ：チベット文学と映画製作の現在 Vol.5』，東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所』所収，2018年3月（単独訳）。
- ・大川謙作「チベット旧社会の村落構造をめぐる：二つの政府領の比較から」，池田巧・岩尾一史（編）『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』臨川書店，2018年3月。（単著，査読あり）
- ・神谷まり子「民国初年社会小説的汽車書写と女性形象——朱瘦菊『新歇浦潮』」（名古屋大学附属亞洲中の日本文化研究中心編『文学革命的百年伝承，暗流及特異点——現代東亜文化的光譜』）2017年10月，99～108頁，全10頁。
- ・神谷まり子「自動車小説としての『新歇浦潮』——交通事故・殺人事件・運転手のイメージ」（日本大学大学院文学研究科中国学専攻『中国語中国文化』第15号）2018年3月，16～38頁，全23頁。
- ・神谷まり子「訳者解説」王德威著『抑圧されたモダニティ 清末小説新論』（神谷まり子，上原かおり共訳）東方書店，2017年6月，449～463頁，全15頁。
- ・小浜正子『中国ジェンダー史研究入門』（共編著）京都大学学術出版会，2018年2月，全486頁。
- ・小浜正子「少子社会，あるいは「卵子の老化」の何が問題なのか？」『学術の動向』22-8，2017年8月，36～39頁。

- ・小浜正子「歴史教育改革とジェンダー史」『じっきょう地歴・公民科資料』84, 2017年春号, 1-6頁。
- ・舘野正美「恵美三白の医術と医論—医学思想の観点から」日本東洋医学会, 『日本東洋医学雑誌』67巻, 4号, 2017年4月, pp.165-175.
- ・舘野正美 “Human Nature [Hsing 性] and the Tao 道: Philosophy of Mencius 孟子 from the viewpoint of Laotzu's 老子 Tao” 『日本大学人文科学研究所 研究紀要』94号, 2017年7月, pp.1-10。
- ・舘野正美「荻野台州『吐方論』攷—医学思想の観点から—」『中国語中国文化』, 15号, 2018年3月。
- ・山口 守『黒暗之光：巴金的世紀守望』復旦大学出版社, 2017年6月, 全394頁。
- ・山口 守「アフター・バベル——華語語系文学が聞き分ける声」『三田文学』第96巻第131号, 三田文学会, 2017年11月1日, pp.174-187.

2-6 英語英文学の包括的研究（その7）(A Comprehensive Study of the English Language and Literature (7))

●代表者 吉良文孝（英文学科・教授）

●分担者 関田朋子（英文学科・教授）

高橋利明（英文学科・教授）

【研究の目的および概要】

人文学部に存在した伝統的な「英文学科」の多くが、地域研究や文化研究をカリキュラムの中心に据え、改革を行っている。また、学習指導要領の改訂や社会のニーズの変化により、高校生一般の「英文学科」に対する期待像も変貌してきている。それに対し、本学の英文学科では、従前の名称を継承し、カリキュラムについては小規模な改変を中心に行ってきた。

このような社会の変容に対し、文理学部英文学科が掲げる英語の3つの学問領域、すなわち、英語学、英文学、米文学の3領域を中心とした研究方針の妥当性を今一度検討し、そのカリキュラムに適した英語技能、知識、教授法について検証することを研究の目的とする。また、教員養成機関としての適切なカリキュラムのあり方を検討する。

【研究の結果】

「英文学分野」

平成29年度の英文学分野では、17世紀の詩人John Miltonに関する研究において、大きな成果が得られた。先達の叙事詩人たちからMiltonが受容した文学形式や思想、詩的発想および言葉の選択に注目し、電子版ラテン語コンコーダンス『『イングランド国民のための第一弁護論』におけるラテン語・英語・日本語対照データベース（The Comparative Table of Latin, English and Japanese in Pro Populo Anglicano Defensio）』と電子図書『Pro Populo Anglicano Defensio 1651/1658『イングランド国民のための弁護論』1651年版と1658年版の比較対照版』を出版・公開し、研究成果の集大成とよぶべき段階に達した。さらに『17世紀の革命/革命の17世紀』の『『偶像破壊者』から『楽園の喪失』へ—祈りの問題を中心として—』を出版した。また、ウェブサイト『野呂有子の研究サイト（ジョン・ミルトンを中心にして）』に過去の執筆論文を多数公開し、学部学生・大学院生の卒業論文・博士論文作成の手本・参考に供した。また、仮面劇*A Mask*（1634）をその種本であるBen Jonsonの仮面劇と比較し、Miltonが信仰心を備えた有徳の女性をいかに重視していたかを明らかにし、『*Pleasure Reconciled to Virtue*から*A Mask*へ—Comus描写から窺えるMiltonの考える悪役像とヒーロー像—』を日本大学英文学会で口頭発表した。

Victoria朝の社会問題小説家の作品や、定期刊行物と読者層との関係性に関する研究においては、『読者ネットワークの拡大と文学環境の変化』収録「イングランドにおける大衆読者層の形成と拡大」を発表し、大衆読者層の拡大を社会史的背景においてとらえた。また、レスター大学に提出した博士論文“The Early Journalism of Eliza Meteyard”においては、Meteyardが1840年代に、初期調査型ジャーナリストとしての自己の執筆方法を確立させていったあり方を考察した。他にはBenjamin Disraeli作*Coningsby*第4巻8章の翻訳を欧米言語文化学会のFortunaに発表した。

また、Sigmund Freudの精神分析学理論を援用して、イギリスに帰化したポーランド出身の作家Joseph Conradの*Almayer's Folly*を考察した研究では、サイコアナリティカル英文学大会において、「*Almayer's Folly*の精神分析的考察——反復を視点として——」を発表し、本作にさまざまな形の「反復」が存在することを指摘し、それらの精神分析的な解釈を試み、作品における反復の主題性を指摘した。いずれも実際の授業における教育効果が大きいと期待される研究となった。

「米文学分野」

「エデンの探究——ホーソーンの平衡感覚と『大理石の牧神』」というテーマのもと、研究が遂行された。その結果、この研究によって、ホーソーンにとって「エデンの探究」、つまり〈無垢〉なるものの価値の確認というもの、いかに重要なテーマであったかが実証されている。ケニヨン、及び作者のドナテロの犯した罪に対する〈共感〉は、〈無垢〉な人間が、犯した罪によって〈より高い無垢〉を手に入れる可能性をもつことを示唆する。この「エデンの探究」のテーマは、先行する他の3つの長編ロマンス（『緋文字』、『七破風の屋敷』、『ブライズデイル・ロマンス』）にも共通するものであり、ホーソーンの平衡感覚を裏打ちするものと言える。なお、この論考は、平成29年9月23日に行われた日本大学英文学会主催・アメリカ文学シンポジウム「失われたエデンを求めて——ホーソーン、トウエイン、モリソンの文学」に基づいており、さらに本年6月開催予定の国際ポー・ホーソーン学会（於・京都ガーデンパレス）での研究発表の元になるものである。

また、“English Literature in the Classical Tradition”というテーマで研究が遂行され、その成果は、昨年12月に本（共著）の形で出版された。タイトルは、“How to Write a Best-Selling Novel: *The House of Mirth* in the Classical Tradition”で、書名は、*Critical Insights: Edith Wharton* である。また、研究発表では、この2月に“Mythological Realism: Apollo in the Fiction of Edith Wharton.”（Intersections between Literature & Reality/LiberLit 9, 成蹊大学）というテーマのもと行われた。

さらに、“The Humanities in Cross-Cultural, Multilingual Contexts”というテーマの研究の成果は、この春に出版される本（共著）に結実している。タイトルは、“The Shadow of America on Japanese Higher Education”で、書名は *Western Curricula in International Contexts: Tertiary American Education around the World* である。また、研究発表に関しては、次の通りである。

- ・“Amateur, Professional, Passionate, Useless: The Humanities and Those Who Teach Them.”（Invited speaker. The Humanities Café. Good Heavens Bar, 東京 2018年1月29日）
- ・“Words, Patterns, Grammars and Gradients of Reality.”（Liberlit 2018. 成蹊大学 2018年2月19日）
- ・“Possibilities of English Studies in Japan: Relevance, Critical Thinking, and Utility.”（Panelist. Liberlit 2018. 成蹊大学 2018年2月19日）
- ・“Global/Provincial: The Futures of Anglophone Literary Studies.”（Anglo-American Literature/Culture and Education Conference, 名古屋大学 2018年3月18日）

以上のように、各研究者はそれぞれに極めて活発な研究活動を実践し、「人文科学」（“the Humanities”）研究の意味を世に問うている。

「英語学分野」

本年度の英語学研究は、意味論、統語論、英語教育の分野において、顕著な成果を見た。まず、意味論の分野に関しては、“*Be to, or not be to, that is the question*”というテーマの下で共同研究がなされ、2017年度日本大学英文学会10月英語学シンポジウムにおいて、その成果が発表された。

次に、統語論研究として、論文「動詞rainをめぐる一非人称用法と人称用法の狭間で一」が論文集『〈不思議〉に満ちたことばの世界』（開拓社）に掲載された。本書は、英語や日本語など、ことばとそれに関係する多くの領域で観察される「不思議」な現象を取り上げ、それらを平易に、分かりやすく解説することを目的として編まれた論文集である。

さらに、英語教育分野においては、啓林館より『Vision Quest English Expression 2 Ace』、『Vision Quest English Expression 2 Hope』の2冊（ともに高等学校向け教科書）が刊行された。

本年度の英語学研究では、世界規模・全国規模の学会における研究成果が相次いだ。具体的には、International Medieval Congress 2017やHawaii University International Conference, 15th Asia TEFL International Conference, 日本英文学会第89回大会における口頭発表（シンポジウム）、および、日本英語学会発行の『English Linguistics』（34:2）に掲載の書評などが挙げられる。

また、「英文学」「米文学」「英語学」の3分野に関しては、下記の文学研究科英文学専攻主催の大学院特別講義を学部学生にも公開し、当該分野の最新知見を得る機会を設けた。

- ・「フラナリー・オコナーを読むために——南部人として、カトリックとして」野口肇氏（首都大学東京名誉教授）
- ・「日英語諸構文の機能的分析」高見健一氏（学習院大学教授）
- ・「21世紀批評理論における4つの転回（Turn）」大橋洋一氏（東京大学大学院教授）
- ・"Why read annotation?" / "What can British cinema teach us about the country's political and social history?" Alex Watson氏（名古屋大学大学院准教授）

さらに、日本大学英文学会との共催事業として、安井泉氏（筑波大学名誉教授）による特別講演「英語をあなごころな　ことばにとことん向き合う——たのしい文学　おもしろい語学——」を開催した。

【研究の考察・反省】

上記のように、本年度も多くの研究成果が挙げられたが、こうした研究成果を各種専門科目の中にかんして組み入れ、魅力ある授業を展開していくかについては、更なる考察が必要である。

なお、次年度は、平成28年度より施行された新カリキュラムも3年目を迎える。3年次における新規科目「Advanced Communication 1・2」や「英米随筆演習1・2」、「英米小説演習1・2」「英語コーパス演習1・2」、そして、「卒業論文研究ゼミ1・2」には大きな期待がかかる。今後も、学科の総力をあげて、充実したカリキュラムの実現に向け、一層の努力を続けていく。

【研究発表】

飯田啓治朗. 2017.「*Almayer's Folly* の精神分析的考察——反復を視点として——」サイコアナリティカル英文学会第44回（平成29年度）大会. 桃山学院大学.

一條祐哉. 2017.「be to文の意味ネットワーク」2017年度日本大学英文学会10月英語学シンポジウム. 日本大学文理学部.

桶田由衣. 2017.「*Pleasure Reconciled to Virtue* から *A Mask* へ—Comus 描写から窺えるMiltonの考える悪役像とヒーロー像—」日本大学英文学会2017年度学術研究発表会. 日本大学文理学部.

Caraker, Richard. 2017. "Koma Super Science High School Special Lecture on Oral Presentation Skills." 山梨.

Caraker, Richard. 2018. "Mitsui Trading Company Special Seminar on Global Communication Skills." 東京.

佐藤健児. 2017.「条件文の帰結節におけるbe going toに関する記述的研究」日本英語教育英学会2017年度第2回研究部会. 玉川大学.

佐藤健児. 2017.「現代英語のbe to構文に関する記述的研究」2017年度日本大学英文学会10月英語学シンポジウム.

- 日本大学文理学部。
- 佐藤健児. 2017.「現代英語のbe+to不定詞の語法」六甲英語学研究会2017年12月例会. 龍谷大学大阪梅田キャンパス.
- 隅田朗彦. 2017. “The Effects of Explicit Grammar Instruction Incorporated in EFL Writing Practice in a Japanese Context. 15th Asia TEFL International Conference.” インドネシア, ジョグジャカルタ
- 隅田朗彦. 2017.「EFLライティング学習におけるプレタスク・ポストタスクの効果—明示的文法プレタスクと明示的フィードバックは文法習得を助けるか—」関東甲信越英語教育学会(KATE)2017新潟研究大会. 新潟大学.
- 高橋利明. 2017.「ホーソーンの『大理石の牧神』の見出されたエデンをめぐって」2017年度日本大学英文学会9月アメリカ文学シンポジウム. 日本大学文理学部。
- Chilton, Myles. 2018. “Amateur, Professional, Passionate, Useless: The Humanities and Those Who Teach Them.” The Humanities Café. Good Heavens Bar. 東京。
- Chilton, Myles. 2018. “Words, Patterns, Grammars and Gradients of Reality.” Liberlit 2018. 成蹊大学。
- Chilton, Myles. 2018. “Possibilities of English Studies in Japan: Relevance, Critical Thinking, and Utility.” Liberlit 2018. 成蹊大学。
- Chilton, Myles. 2018. “Global/Provincial: The Futures of Anglophone Literary Studies.” Anglo-American Literature/Culture and Education Conference. 名古屋大学。
- 塚本 聡. 2017.「コーパスから見えるif... were (was) to / should ... の特徴」2017年度日本大学英文学会10月英語学シンポジウム. 日本大学文理学部。
- 保坂道雄. 2017.「機能範疇の階層構造を共時的・通時的に探る」:「機能範疇創発のメカニズム」日本英文学会第89回大会シンポジウム. 静岡大学。
- 保坂道雄. 2017. “Ambiguity Between the BE perfect and the BE passive in Old English.” International Medieval Congress 2017. University of Leeds.
- 保坂道雄. 2018. “Micro vs. Macro Evolution of Language” Hawaii University International Conference. Honolulu.
- LO DICO, Mauro. 2018. “Mythological Realism: Apollo in the Fiction of Edith Wharton.” *Intersections between Literature & Reality*. LiberLit 9. 成蹊大学。

【研究成果物】

- 桶田由衣. 2017.『『イングランド国民のための第一弁護論』におけるラテン語・英語・日本語対照データベース』ウェブサイト『野呂有子の研究サイト(ジョン・ミルトンを中心にして)』
- Caraker, Richard. 2017.『Vision Quest English Expression 2 Ace』Keirinkan Publishers.
- Caraker, Richard. 2017.『Vision Quest English Expression 2 Hope』Keirinkan Publishers.
- Caraker, Richard. 2017. “Towards a CLIL syllabus in Japanese Universities.”『研究紀要』第94号. 日本大学文理学部人文科学研究所。
- Caraker, Richard. 2018. “CLIL and Pre-service Teacher Education in Japanese Universities.”『研究紀要』第95号. 日本大学文理学部人文科学研究所。
- 関田朋子. 2017.「イングランドにおける大衆読者層の形成と拡大」小林英美他(編).『読者ネットワークの拡大と文学環境の変化—19世紀以降にみる英米出版事情』音羽書房鶴見書店。
- 関田朋子. 2018. Tomoko Kanda. “The Early Journalism of Eliza Meteyard.” Ph.D. 論文. (2017年6月レスター大学(UK)提出.)

- 閑田朋子. 2018. 「ベンジャミン・ディズレイリ作『コニングズビー』第4巻8章」 *Fortuna*. 29. 欧米言語文化学会.
- 佐藤健児. 2017. 「ことばに寄り添う」(『謎解きの英文法—動詞』久野暉・高見健一著(四六版/278pp. 本体1,600円くろしお出版)の書評)『英語教育』8月号. 大修館書店.
- 隅田朗彦. 2018. 「オンライン英語多読教材を使用した多読学習における読書行動の読解力及び読解速度への影響」『研究紀要』第95号. 日本大学文理学部人文科学研究所.
- 隅田朗彦. 2018. “The Effects of Explicit Grammar Instruction and Written Corrective Feedback on Accuracy Development in EFL Writing.” *Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)*. 29.
- Chilton, Myles. 2017. 「越境する言葉と英文学の使命 (*Bridging Words and the Mission of English Literature*)」『知のスクランブル—文理学的思考の挑戦 (*Knowledge Scramble: The Challenge of Liberal Arts Thinking*)』Trans. Yuko Noro. Ed. Kensuke Kono. Chikuma Shinsho.
- Chilton, Myles. 2018. “The Shadow of America on Japanese Higher Education.” *Western Curricula in International Contexts: Tertiary American Education around the World*. Ed. M. Rajakumar. Lexington Books.
- 塚本 聡. 2018. “Review: *Diachrony and Synchrony in English Corpus Linguistics* Ed. by Alejandro Alcaraz-Sintes and Salvador Valera-Hernández, Peter Lang, Bern, 2014, 393pp.” *English Linguistics*. 34:2. The English Linguistic Society of Japan.
- 野呂有子. 2017. 電子版ラテン語コンコーダンス『イングランド国民のための第一弁護論』におけるラテン語・英語・日本語対照データベース (The Comparative Table of Latin, English and Japanese in *Pro Populo Anglicano Defensio*) (ウェブサイト『野呂有子の研究サイト (ジョン・ミルトンを中心にして)』(<http://www.milton-noro-lewis.com/database.html>) に掲載)
- 野呂有子. 2017. 「『偶像破壊者』から『楽園の喪失』へ—祈りの問題を中心として」『17世紀の革命/革命の17世紀』17世紀英文学会。金星堂。
- 野呂有子. 2018. 電子ブック『*Pro Populo Anglicano Defensio 1651/1658*』『イングランド国民のための弁護論』1651年版と1658年版の比較対照版』
- 保坂道雄. 2017. 「動詞rainをめぐる—非人称用法と人称用法の狭間で—」高見健一・行田勇・大野英樹(編). 『<不思議>に満ちたことばの世界』開拓社。
- 保坂道雄. 2017. 「機能範疇創発のメカニズム」『日本英文学会第89回大会Proceedings』日本英文学会.
- LO DICO, Mauro. 2018. “How to Write a Best-Selling Novel: *The House of Mirth* in the Classical Tradition.” *Critical Insights: Edith Wharton*. Ed. Myrto Drizou. Salem Press.

2-7 ドイツ語圏における近現代文学・語学・文化研究

- 代表者 森田 悟（ドイツ文学科・教授）
- 分担者 大羅志保子（ドイツ文学科・教授）
安達信明（ドイツ文学科・教授）
保阪靖人（ドイツ文学科・教授）
初見 基（ドイツ文学科・教授）
板倉 歌（ドイツ文学科・教授）
関口なほ子（ドイツ文学科・准教授）
勅使川原聖子（ドイツ文学科・助手）

【研究の目的および概要】

ドイツ語圏文化は、ドイツ・オーストリア・スイス等において使用されるドイツ語を通して、それぞれの地域において独自の色彩を育み、思想、文学、音楽をはじめとした多くの分野で卓越した担い手を生んできた。統一の遅れたドイツが近代化に乗り遅れた後進性という問題を抱えた点は日本とも共通性を持つと言える、大戦後の経済復興、東西ドイツの分裂、さらに再統一といった政治的、社会的な激動を経ながらその社会・文化はより刺激的になってきたとも言える。本共同研究は、文学・語学のエキスパートがそれぞれの専門分野の最新の研究を持ち寄る形で行うものである。ともすれば文学と語学の間、ひいては各研究分野の間に生じやすい「知の隙間」を埋め、より有機的な大きな成果の集合体を目指す。文学・語学・文化の諸領域における研究により、ドイツ近現代文化の諸相を明らかにすることは、それと共通性を持つ日本の社会・文化等の諸現象の理解にも大きな意味を持つことができるだろう。

【研究の結果】

それぞれの研究者の専門領域に応じて研究が進められた。言語学的アプローチは安達・保阪・板倉が進めた。安達は言語類型論、近現代のドイツ音楽劇研究を進めている。保阪はドイツ語の項構造の研究とドイツ語の *doch* の機能（付加疑問文での応答、心態詞、接続詞）研究を行い、特に後者が英語やイタリア語ではどのように表現されるかについて研究会で発表している。またドイツ語教育の観点から、外来語のアクセントの学習に関して、日本人が持つアクセントの特性を利用する提案を論文で行った。板倉は、2007年に当文理学部に滞在したドイツ国語研究所（Institut für Deutsche Sprache）前所長 Gerhard Stickel 教授の記念論文集「Deutsch：lokal-regional-global」を、同研究所現所長 Ludwig M. Eichinger 教授とポーランド・ジェロナグラ大学 Jarochna Dąbrowska-Burkhardt 教授とともに、編纂者として同研究所から出版した。文学的文化的アプローチは大羅・初見・関口・森田・勅使川原が進めた。大羅はドイツ文学の基礎が確立され、ドイツ文学特有の発展・展開を見る 18 世紀、19 世紀の作品から、ゲーテ（ドイツ）の『若きヴェルターの悩み』とシュティフター（オーストリア）の『晩夏』を取り上げ、両作品の成立時代に特有のテーマやモチーフが、第二次大戦以降のドイツ語圏現代文学においてどのような展開や変容を遂げているかを考察した。考察に際しては、両者に共通する要素として「ブルジョワ階級または教養市民階級の子息」に焦点を当て、個別には、ゲーテ作品では特に「愛の様相と予定調和的な自然観」、シュティフターでは「市民道徳や規律」というテーマ的側面と、語りの技法という側面から、ドイツ文学に特有な発展小説または教養小説という小説形式に焦点を当てた。これらの考察のメルクマールを指針として今回は、オーストリアの若手作家ラインハルトカイザー・ミューレッカーの小説 *Fremde Seele, dunkler Wald* (2016) を研究対象とした。初見は戦後ドイツにおけるナチ時代という「負の過去」をめぐる言説を扱っている。1945年のドイツ敗戦直後における主として作家や学者たちの発言

を検討し、一方において、ドイツの〈外〉(亡命者やドイツ語圏スイス)からドイツ人の「罪」が問われるのに対して、ドイツの〈内〉にあってはそれを否認する姿勢が色濃く現れている点を確認した。関口はユダヤ人女性作家であるヴィッキ・バウム (Vicki Baum, 1888-1960) の『ホテルの人々』(1929)を研究対象とし、急速に都市化されたベルリンを舞台にした小説を考察した。この作品は1930年代のアメリカでの映画化や現代日本演劇においてもリメイクされている。発表当時、教養小説の系譜から大きく外れる小説『ホテルの人々』は「娯楽小説」として批判されたが、ドイツ以外では「新しい文学ジャンル」としての「グループノベル」の典型として評価された。今回この作品を取り上げ、大都市の階級社会で特別な位置にいる様々な登場人物の[存在]を「空間」との関係性において捉え直し、作品の複層的な問題設定の考察から作品解釈を提示した。その上でドイツ文学における小説『ホテルの人々』の位置価値、ユダヤ人女性作家の文学的営為の意味を検証した。森田はE.T.A. ホフマンが過ごした1700年代後半から1820年代とくに1810年代に焦点を合わせて彼の文学活動のみならず彼の法律家としての活動に焦点を合わせて考察を進めている。特にデマゴグ訴追事件に司法官として直接関わりを持ったホフマンがどのような法的判断を行ったのかについてミュレンフェルス事件を手がかりに検討している。勅使川原は作家ギュンター・グラスを中心に遺作詩画集の東プロイセン方言の実地調査・標準語への訳出・解釈や、彼と同様に故郷を失った東欧作家や母語外で創作をする作家との比較、また日本人作家村上龍との自伝的要素を下地に描いた作品の比較を行った。それらを通じて個人的でローカルな事柄を描きつつ、言語と国家と文化を超えて、あるいは横断して歴史やアイデンティの問題に対して共通項を見いださう創作方法の一端を解明すること、及びユーモアの文学における力を解明しようと試みた。

【研究の考察・反省】

それぞれの専門研究は多岐にわたり研究は言語・文化・文学・歴史等の広範な領域に及んでいる。そのためそれらの研究の一つに収斂することは難しいことではある。しかしながら共同研究を通してドイツ語圏の様々な事象が明らかになっている。今後は語学、文学、文化等のさまざまな個別研究では明らかになりにくい広範囲な側面を共同研究によって、さらに解明することが求められる。共同研究のより緊密な連携がなされるようにしなければならない。それによって中世から近代さらには現代にいたるドイツ語圏の研究が新たな成果を生むことにつながる期待ができる。

【研究発表】

大羅志保子：(研究発表) Entwicklung durch innere Dunkelheit: der Roman „Fremde Seele, dunkler Wald“ von Reinhard Kaiser-Mühlecker (第26回オーストリア現代文学ゼミナール, 2017年11月12日)

【研究成果物】

Jarochna Dąbrowska-Burkhardt/ Ludwig M. Eichinger/ Uta Itakura (Hrsg.): (編著書) Deutsch: lokal – regional – global. Studien zur Deutschen Sprache. Forschungen des Instituts für Deutsche Sprache. Band 77. Tübingen: Narr Francke Attempto Verlag. (2017)

Uta Itakura: (論文) 20 Jahre danach: Soziale Veränderung und sprachliche Verbreitung. Verkaufsgespräch bei Japanern in Düsseldorf. In: Dąbrowska-Burkhardt/ Eichinger/ Itakura (Hrsg.) S. 387-400. (2017)

保阪靖人：(論文)「ドイツ語の外来語のアクセントについて ―語尾 -ik を例に、外国語教育の観点から―」、『ドイツ文学論集』第39号, 21頁-35頁 2018年

大羅志保子：(論文) Entwicklung durch innere Dunkelheit: Über den Roman „Fremde Seele, dunkler Wald“ von Reinhard

- Kaiser-Mühlecker『ドイツ文学論集』第39号,3頁-20頁2018年
- 関口なほ子：(論文)「ヴィキィ・バウムの小説『ホテルの人々』(1929)について」,『リュンコイス』第51号,71頁-90頁2018年,桜門ドイツ文学会
- 初見 基：(論文)「衝撃と沈黙—〈集団の罪〉政策と反撥—」,『リュンコイス』第51号,141頁-168頁2018年,桜門ドイツ文学会
- 初見 基：(論文)「戦後ナチ批判言説のはじまり—『集団の罪』の追及と反撥」,『断絶のコミュニケーション』,2018年3月刊行予定,ひつじ書房
- 初見 基：(書評)『啓蒙と神話—アドルノにおける人間性の形象』(藤井俊之著),週刊読書人,3195,2017年6月23日
- 勅使川原聖子：(論文)「ギュンター・グラス遺作『限りあることについて』の一考察」,『リュンコイス』第51号,91頁-114頁2018年,桜門ドイツ文学会

2-8 現代社会における問題的地位の分析に資する社会学的研究Ⅶ—現代人の「生」をめぐる諸側面—

- 代表者 仲川秀樹 (社会学科・教授)
- 分担者 中森広道 (社会学科・教授)
- 山本質素 (社会学科・教授)
- 久保田裕之 (社会学科・准教授)
- 中村英代 (社会学科・准教授)
- 山北輝裕 (社会学科・准教授)
- 後藤美緒 (社会学科・助手)

【研究の目的および概要】

本共同研究では、前年度に引き続き、現代人の「生」の問題に焦点を当て、1) 理論・学説、2) 文化・情報メディア、3) 実証・応用という多様な領域と関心に基づき、「生」をめぐる社会学的諸側面の様相を明らかにすると同時に、そうした「生」の在り方を可能とするような現代社会の存立構造について考察と分析を深めていくことを目的とした。

生殖や誕生、病や老いといった人生のリスクや課題とむきあうための作法が強く求められる昨今、「生と死」をめぐる「死生学」や「生存学」など、領域横断的な形で展開される研究がとみに増加してきている。

こうした問題に対し社会学は、E.デュルケムの『自殺論』を嚆矢として、個体の生物学的なイベントとしての「誕生」と「死」を他者や集団の価値体系との関係性や社会的相互行為から分析する研究成果を積み重ねてきた。本人を取り巻く人間関係（配偶者、家族、友人、医療・介護従事者等）や社会環境（地域社会、メディア等）に目配せしながら、より広い文脈で社会的存在としての人間の「生と死」に関する営みを考察していくことは、社会学独自の強みであるといえよう。

こうした観点に立ち本共同研究では、「生」をキーワードとして、生命や生活、生き方や生き様、生きがいや生きづらさ、生涯など、様々な側面を有する現代人の「生」の形態を明らかにしつつ、そうした「生」の在り方を規定する現代社会の実情を反省的に捉え直していく。その上で、最終的には豊かな「生」の在り方や望ましい社会のしくみを構想していく手がかりを獲得することを目指した。

本共同研究では、上記の課題・目的を達成するために、研究代表者ならびに研究分担者それぞれの専門領域を踏まえ、1) 理論・学説（理論ならびに分析枠組みの検討）、2) 文化・情報メディア（メディア文化、災害、人生儀礼、娯楽）、3) 実証・応用（野宿者、シェアハウス、依存症）という3つの研究グループを構成した。その上で、各研究グループそれぞれが、当該領域における研究成果をもとに、上述のような現代人の「生」の在り方を可能とするメカニズムとその構造的要因を探究した。具体的には、現代人の「生」という共通テーマのもとで研究代表者・分担者各自のテーマに基づき、①先行研究の分析、②各領域における現代人の「生」をめぐる情報の収集と整理、③各研究グループ内での情報・意見交換を行った。

【研究の結果】

本年度の研究成果を日本学術会議協力学術研究団体の日本大学社会学会で年3回発行している『社会学論叢』誌へ投稿した。また、7月に開催された2017年度日本大学社会学会大会（兼日本大学文理学部学術研究発表会社会学部会）では、特別講演、4人の報告者による自由報告とともに、テーマ部会として「社会学における歴史認識をめぐって」というテーマのもとシンポジウムを実施した。2人のシンポジストからの、「歴史について語ること」「機能主義的伝統と歴史認識」をテーマとした報告を踏まえ、コーディネーター、フロアの参加者が一体となって活発な討論が行われた。

【研究の考察・反省】

ここまで研究代表者・分担者各個人の研究はそれぞれ進められ、成果を生んでいる。しかし、まだ個人の成果としてとどまっているため、今後はこれを各グループで情報を共有・理解を深め、一つの共同研究グループとして関連付けていく作業を進めていきたい。

【研究発表】

仲川秀樹

- ・第8回中町シンポジウム「ショッピングモール化を軸とした中心市街地再生」2017年10月18日、マリーン5ミュージアムホール。

中森広道

- ・日本災害情報学会大19回大会、「緊急地震速報の本運用から10年——社会調査から考える人々の意識・評価の変遷」2017年10月22日、京都大学。

久保田裕之

- ・[Accepted]Oral Presentation at the International Sociological Association (ISA) Research Committees RC06 (Family) and RC41 (Population) Conference
- ・[Accepted]Miwa, SATO., Hiroyuki, KUBOTA, "Same-sex Partnership Registrations at the Municipal Level in Japan", 17-19 May 2018 /Singapore.

中村英代

- ・〔シンポジウム〕中村英代，第6回ナラティヴ・コロキウム・病いの語りを臨床にどう活かすか？「依存症者における病いの語りーナラティヴ・アプローチの立場から医療者に伝えたいこと」，2018年3月，駒澤大学。

後藤美緒

- ・第68回関西社会学会，「ラジオに現れた『漫才』——戦前期JOBKの演芸番組の構成に着目して」2017年5月27日，神戸学院大学（第68回関西社会学会大会奨励賞）。
- ・〔企画・司会〕マス・コミュニケーション学会春季研究発表会，ワークショップ3「放送番組確定表から探る『上方』放送文化の成立——JOBKのメディア史研究にむけて」，2017年6月18日，新潟大学。
- ・特別研究「なにわ大阪の『笑い』に関する調査と研究」研究会（招待），「漫才作者という生き方——秋田 實の新人会体験」，2018年2月20日，関西大学なにわ大阪研究センター。

【研究成果物】

仲川秀樹

- ・「ショッピングモール化を軸とした中心市街地再生ー伝統からあたらしいポピュラーな文化の発信ー」シンポジウム報告書，2017年10月18日，文理学部社会学研究室・仲川秀樹（仲川ゼミナール）。

中森広道

- ・「一月五日の緊急地震速報と東京都民」『東京消防』平成30年4月号（最終稿提出済み），東京消防協会。

久保田裕之

- ・「パートナーシップの多様性と段階性——同性パートナー制度の家族論的意義」『都市政策研究2018』10号, 2018年4月1日(予定), せたがや自治政策研究所.

中村英代

- ・〔単著〕『社会学ドリル—この理不尽な世界の片隅で』, 新曜社.
- ・〔編著〕南保輔・中村英代・相良翔, 2018『当事者が支援する—薬物依存からの回復 ダルクの日々パート2』春風社.
- ・〔書評〕「書評・浮ヶ谷幸代編『苦悩とケアの人類学—サファリングは創造の源泉になりうるか?』(世界思想社, 2015年)」『保健医療社会学論集』2017, 第28巻1号: 96-97.

山北輝裕

- ・「ハウジング・ファーストに関するノート①——ハウジング・ファーストとは何か」『社会学論叢』189: 39-69, 2017年6月25日, 日本大学社会学会.
- ・「ハウジング・ファーストに関するノート②——経験的証拠と批判」『社会学論叢』190: 63-82, 2017年12月25日, 日本大学社会学会.

2-9 現代社会における問題的地位的分析に資する社会学的研究Ⅶ—「格差・不平等」をめぐる諸側面—

- 代表者 好井裕明 (社会学科・教授)
- 分担者 後藤範章 (社会学科・教授)
- 中瀬剛丸 (社会学科・教授)
- 菅野 剛 (社会学科・教授)
- 立道信吾 (社会学科・教授)
- 松岡雅裕 (社会学科・教授)
- 松橋達矢 (社会学科・准教授)
- 徳山弓恵 (社会学科・助手)

【研究の目的および概要】

本共同研究では、前年度に引き続き、今日的課題として人々の耳目を集めている「格差・不平等」の問題に焦点を当て、1) 理論・学説、2) 文化・情報メディア、3) 実証・応用という多様な領域と関心に基づき、「格差と社会的不平等」をめぐる社会学的諸側面の様相を明らかにすると同時に、その構造的要因について考察を深めていくことを目的とした。

「格差」をめぐる問題については、2000年代半ばに流行語となった「格差社会」という言葉の出現を待つまでもなく、経済学の分野では「経済格差」(橋本 1998)や「所得格差」(大竹 2005)など所得や資産の再分配をめぐる研究が、また教育学においては「教育における意欲の格差」(荻谷 2001)など地位達成研究が、それぞれの視点から「格差」の存在を明らかにしてきた。

社会学においても、社会的な不平等という観点からこうした状況を問題化するべく、以前より、「社会階層と社会移動全国調査」(SSM調査)をはじめ、多様な領域にまたがる形で研究を蓄積してきた経緯がある。様々な形をとって顕在化する社会的資源(経済的・文化的・権力的・評価的・人的等)をめぐる不平等(階層間・地域間・世代間・学歴・職業選択等)の現代的な形態を明らかにしつつ、その解決策を模索していくことは、これまでの社会学の研究蓄積を見直すのみならず、新たな研究の地平を押し開いていく一助となるはずである。

こうした観点に立ち本共同研究では、「格差・不平等」をキーワードとして、より複雑さを増していく現代社会の実情を明らかにするとともに、最終的にはその実情に見合った、あるべき社会のしくみを構想していく手がかりを獲得することを目指した。

本共同研究では、上記の課題・目的を達成するために、社会システム論という分析的視点と方法論的アプローチに依拠しつつ、研究代表者ならびに研究分担者それぞれの専門領域を踏まえ、1) 理論・学説(T.パーソンズにはじまる社会システム論に依拠した理論ならびに分析枠組みの検討、M.ヴェーバーの近代資本主義精神と格差の関係の再検討)、2) 文化・情報メディア、3) 実証・応用(労働・雇用、社会階層、都市、エスノメソドロジー)という3つの研究グループを構成した。その上で、各研究グループそれぞれが、当該領域における研究成果をもとに、現代社会において「格差・不平等」を固定・拡大させていくメカニズムとその構造的要因を探索していき、最終的な研究成果をまとめるという手続きを採った。具体的には、「格差と社会的な不平等」という共通テーマのもとで研究代表者・分担者各自のテーマに基づき、①先行研究の分析、②各領域における「格差と社会的な不平等」をめぐる情報の収集と整理、③各研究グループ内での情報・意見交換を行った。

【研究の結果】

本年度の研究成果を日本学術会議協力学術研究団体の日本大学社会学会で年3回発行している『社会学論叢』誌へ投稿した。また、7月に開催された2017年度日本大学社会学会大会(兼日本大学文理学部学術研究発表会社会学

部会)では、特別講演、4人の報告者による自由報告とともに、テーマ部会として「社会学における歴史認識をめぐって」というテーマのもとシンポジウムを実施した。2人のシンポジストからの、「歴史について語ること」「機能主義的伝統と歴史認識」をテーマとした報告を踏まえ、コーディネーター、フロアの参加者が一体となって活発な討論が行われた。

【研究の考察・反省】

ここまで研究代表者・分担者各個人の研究はそれぞれ進められ、成果を生んでいる。しかし、まだ個人の成果としてとどまっているため、今後はこれを各グループで情報を共有・理解を深め、一つの共同研究グループとして関連付けていく作業を進めていきたい。

【研究発表】

松橋達矢

- ・「交通インパクトと都市・地域社会の構造変動(3)——埼玉高速鉄道沿線地域の事例分析」第90回日本社会学会大会自由報告部会、2017年11月5日、東京大学本郷キャンパス。

【研究成果物】

後藤範章

- ・キャロライン・ノールズ、ポール・スウィートマン編(後藤範章監訳)『ビジュアル調査法と社会学的想像力』(ミネルヴァ書房、2012年10月刊)の第2刷を、2018年2月に刊行することができた。それに先だって、全面的に点検し、多数の箇所を修正した。

立道信吾

- ・日本大学文理学部立道ゼミナール編、調査報告書『大学生の学業成績と就職活動に関する総合的研究 第7次報告』2017年3月、日本大学文理学部立道ゼミナール。

好井裕明

- ・『『ひろしま』から溢れだす力を見直す』『新社会学研究』第2号: 67-75, 新曜社。

松橋達矢

- ・「社会調査と社会調査教育のあいだ——『交通インパクトの社会的効果に関する第9次調査』を中心に」『社会と調査』第19号: 70-78.
- ・後藤範章・松橋達矢ほか、2017,「新線開業の社会学的効果に関する実証的研究(2)——埼京線・SR・TXと北陸新幹線・九州新幹線を事例とする第二次報告」『日本都市学会年報』Vol.50: 363-367.

2-10 ソーシャル・インクルージョンをめぐる社会福祉課題に関する総合的研究Ⅲ

- 代表者 川村宣輝 (社会福祉学科・教授)
- 分担者 上之園佳子 (社会福祉学科・教授)
- 井上 仁 (社会福祉学科・教授)
- 今泉礼右 (社会福祉学科・教授)
- 諏訪 徹 (社会福祉学科・教授)
- 山田祐子 (社会福祉学科・教授)
- 金子絵里乃 (社会福祉学科・准教授)
- 後藤広史 (社会福祉学科・准教授)
- 鴨澤小織 (社会福祉学科・助教)

【研究の目的および概要】

本共同研究では、「社会的包摂」(social inclusion, 以下「ソーシャル・インクルージョン」と記す)に焦点を当て、1) 問題、2) 政策・法制度、3) 方法論(ソーシャルワーク)のそれぞれから、1) 原論・理論、2) 児童・家庭福祉、3) 障害者福祉、4) 高齢者福祉、5) 低所得者支援・公的扶助、6) 地域福祉等の社会福祉の多様な分野や関心領域に基づき、その理論的・政策的・実践的課題を明らかにするとともに、分野横断的な政策・支援システム・実践・人材養成のあり方に関して考察する。さらに、こうした考察を踏まえたうえで、今後のソーシャル・インクルージョンのあり方や今後の展望について言及することを目的とする。

ソーシャル・インクルージョンは、単に「排除をしない」のみならず、今日の社会福祉政策における横断的な政策理念となりつつあり、現在我が国において社会問題となっている生活困窮、社会的孤立、障害者や高齢者の累犯、虐待、子どもの貧困などの様々な現象の背景には、社会的排除の連鎖という社会構造上の問題が横たわっており、社会福祉・社会政策による対応も、各分野別の施策ではなく制度横断的な対応が可能となる支援システムが求められている。

こうした問題意識から、1年目はソーシャル・インクルージョンにおける分野ごとの課題の考察を踏まえ、2年目についてはソーシャル・インクルージョンを可能にする領域横断的な支援システム・実践・人材養成のあり方等について検討を重ねてきた。平成29年度については、これまでの検討結果を踏まえた総括として、今後のソーシャル・インクルージョンのあり方や課題について考察しまとめていくこととした。

【研究の結果】

本共同研究では、上記の研究課題や目的を達成するために、研究代表者ならびに分担者それぞれの専門研究領域を基に、9分野の研究分担(者)を構成した。その上で、分担者それぞれが、あらかじめ決められた分野・領域について、これまでに行われた当該研究領域についての研究成果を参考にしながら、それぞれの分野における排除の現状や出現の仕方、また、その構造的な要因や福祉制度との関わりなどについて、調査・分析を行い、最終的な研究成果としてまとめるという作業を行った。今年度については、作年度に引き続き「ソーシャル・インクルージョン」および「社会的排除」という共通のテーマの下に、研究代表者・各分担者が各自のテーマに基づき、①先行研究の整理、②各領域における社会的排除をめぐる情報の収集と整理、③各研究者間における情報・意見交換を行った。各分担者が取り上げた具体的なテーマについては下記のとおりである。

- ・「ソーシャル・インクルージョン」に関する社会福祉・介護システムの研究
- ・子どもを取り巻く「ソーシャル・インクルージョン」の諸問題の研究

- ・「ソーシャル・インクルージョン」に関わる理論的枠組・分析的枠組みと諸問題の研究
- ・地域福祉にかかわる「ソーシャル・インクルージョン」の研究
- ・精神障がいを取り巻く「ソーシャル・インクルージョン」に関する諸問題の研究
- ・高齢者を取り巻く「ソーシャル・インクルージョン」に関する研究
- ・生と死の臨床における「ソーシャル・インクルージョン」の研究
- ・ホームレスを取り巻く「ソーシャル・インクルージョン」に関する諸問題の研究
- ・国際社会の動向と女性の貧困を取り巻くソーシャル・インクルージョンに関する研究

【研究の考察・反省】

今年度の研究は、これまで3年間にわたり行ってきた「ソーシャル・インクルージョンをめぐる社会福祉課題に関する総合的研究」の総まとめとして行われたものである。社会福祉における各分野の研究動向を「ソーシャル・インクルージョン」をキーワードとして、各分担者が各自のテーマを掘り下げた研究であった。各分野において一つの共通テーマを基に最新の研究を進めたことは、今後の社会福祉研究を進める上で意義のある試みとなった。反面、前回の反省点でも指摘されていた、各分野の研究者間の情報共有・意見交換については時間的な制限もあり、目的を十分に達成することができなかった。今後の更なる課題と思われる。

【研究発表】

井上 仁

- ・主宰者：第5回 施設・里親を巣立ったものの自立に関するシンポジウム 開催（共催＝世田谷区）
- ・テーマ：世田谷区における若者支援と児童相談所設置について
- ・日時・場所：2017年12月16日（日曜日）日本大学文理学部百周年記念館国際会議場 2017年9月25日

上之園佳子

- ・日本地域福祉学会 第31回大会
- ・Active Ageing と地域包括ケアシステム：「社会参加」概念の再考 2017年6月4日/松山大学

【研究成果物】

今泉礼右

- ・テーマ：現代社会における社会学と社会福祉
- ・発行年月日：2017（平成29）年4月20日
- ・発行所：サンウェイ出版

川村宣輝

- ・テーマ：精神障害者の職場定着の要因に関する一考察—合理的配慮の提供が及ぼす影響—
- ・誌名：東京成徳大学 研究紀要 第25号
- ・発行年月日：2018年3月15日
- ・発行所：東京成徳大学人文学部・応用心理学部

後藤広史

- ・テーマ：「ホームレス問題」の多様性ー「広義のホームレス」の実態と福祉制度（2018）『貧困問題の新地平ーもやいの相談活動の軌跡』
- ・発行年月日：2018年2月1日
- ・発行所：旬報社

- ・テーマ：ソーシャルワーカーは専門家であるべきかーソーシャルワーク教育で失われるもの『ソーシャルワーカーのソダチーソーシャルワーク教育・実践の未来のために』
- ・発行年月日：2017年7月20日
- ・発行所：生活書院

- ・テーマ：「ホームレス支援とコミュニティ」『コミュニティ事典』
- ・発行年月日：2017年7月14日
- ・発行所：春風社

諏訪 徹

- ・テーマ：「地域共生社会の実現に向けた人材の育成」
- ・誌名：『ソーシャルワーク研究』vol.44 No.1
- ・発行年月日：2018年4月30日

- ・テーマ：堀崇樹・浦田愛・諏訪徹「東京都区社協における全職員参加型地区担当制の試み」
- ・誌名：『地域福祉研究』公No.6（通算No.46）
- ・発行年月日：2018年4月

山田祐子

- ・テーマ：介護における虐待防止に向けて
- ・誌名：『介護福祉2017秋季号No.107』，公益財団法人社会福祉振興・試験センター，21-33.
- ・発行年月日：2017年9月25日

2-11 現代教育改革における理念・方法・政策に関する研究方法の構築

- 代表者 佐藤晴雄（教育学科・教授）
- 分担者 小野雅章（教育学科・教授）
小笠原喜康（教育学科・教授）
下司 晶（教育学科・教授）
末富 芳（教育学科・教授）
広田照幸（教育学科・教授）
渡部 淳（教育学科・教授）

【研究の目的および概要】

本研究は昨年度の課題を引き継ぎ、より深化させることを大きな目的とするものである。戦後最も大きな教育改革を企図した臨時教育審議会の答申がまとめられてから、多様化・国際化・情報化・生涯学習体系への移行などの視点からさまざまな教育改革が進められてきた。それ以後も、第15期中央教育審議会答申（平成8年）が21世紀を展望した教育の在り方を提言し、「生きる力」をキーワードにした教育課程の改善から学校週五日制の導入に至るまでのあらゆる分野にわたる改革が求められてきた。その後、教育改革国民会議、教育再生会議など官邸中心の教育改革も進展し、まさに矢継ぎ早に改革が行われてきている。ところが、そうした教育改革に関して、各専門分野では個々に研究が試みられてはきたが、分野を超えたトータルな分析・考察の視点の構築については、必ずしも十分になされてきているとはいえない。教育学内部の各分野でそれぞれに蓄積されてきた固有の問題関心や固有の分析概念などが、かえって各分野の壁を越えた共通の像を構築することを困難にしているのである。

以上のような問題状況を克服するために、本研究では、欧米の教育改革を研究する研究者、日本の教育改革の歴史を研究する研究者、現在の政策的な次元での動きを分析する研究者、それらの背景にある大きな教育思想の変容について研究する研究者などが、1980年代以降におけるわが国の教育改革の理念・方法・政策を考察する上で、どのような共通の視点を持ちうるのかをさぐっていく。

研究3年目にあたる今年度は、これまでの研究成果を踏まえて、今後の教育改革を展望するための知見を得るために、各分野の教員による研究成果の共有化を図ることに力点を置きたい。

【研究の結果】

4月1日の学科会議終了後に、問題意識を共有するための協議を行った。その上で、研究分担者がそれぞれの研究計画を立案した。その後、各自が専門と分担に基づいて、学会等で発表を行い、また論文等を公表してきた。そして、今年度の研究成果として、12月には、日本大学文理学部教育学科編（佐藤晴雄、広田照幸編集担当及び分担執筆）『現代教育改革の理念と実践に関する研究—日本大学文理学部人文科学研究所共同研究（第一次報告書）—』を刊行したところである。本報告書は、この研究成果の一部であり、わが国の教育改革の理念・方法・政策を考察する上で、教育学の中のさまざまな分野の研究者が、分野の垣根を超えてどのような共通の視点を持ちうるのかを探るという、一貫した目的に迫るものである。今年度は、このような報告書を作成することで成果発表の機会を設定したが、本テーマの目的に向けた考察の深まりを期待したところである。

【研究の考察・反省】

教育学の中でも専門の異なるメンバーがテーマに向けて研究を深め、各自がその成果を一定の形でまとめ、発表することができた。なかでも、教育学科編による報告書の刊行は従来にない成果として特筆できる。しかし、通常業務の多忙化により、研究協議を行う機会がなかなか得られず、各自の研究をつなげることによって、より深化さ

せることがどこまで出来たかは計りにくい。この反省点を踏まえ、専門の異なるメンバー間の相乗効果を最もよく発揮することを目指す研究を今後も継続したいと考えている。

【研究発表】

- ・小野雅章「言説とイメージの歴史学と社会学 ― 戦争と近代日本」のコメンテーター」埼玉大学大学院人文社会科学科学研究科学際系2017年度連続シンポジウム・ワークショップ第一回シンポジウム，2017年10月20日（金）於埼玉大学教養学部
- ・小笠原喜康「デジタル教科書のメリット・デメリットを考える：認識論と教育思想の視点から」2016年度日本教育メディア学会・企画委員会主催ワークショップ，内田洋行・新川ユビキタス，協創広場 CANVAS，2017年2月10日。
- ・下司 晶「教育哲学・教育思想研究をどう進めるか？」日本教育学会若手会員のための方法論ワークショップ理論・思想部会，2017年3月11日，於 早稲田大学早稲田キャンパス
- ・広田照幸「民主主義を学ぶ場としての学校 ― 現状と課題」子ども社会学会第24回大会公開シンポジウム「子どもは民主主義を学んでいるのか」，2017年7月2日，東京学芸大学。
- ・渡部 淳「グローバル時代の市民像を問う」日本国際理解教育学会第27回大会特定課題研究「国際理解教育における理念研究，方法研究の展望をひらく」報告者：渡部淳，宇土泰寛，山西優二 2017年6月4日，筑波大学・筑波キャンパス。

【研究成果物】

- ・佐藤晴雄『コミュニティ・スクールの成果と展望』ミネルヴァ書房，2017年4月。
- ・小野雅章「教育勅語の教材化容認批判―学校儀式と修身教科書の歴史からの検討―」『日本教育史往来』No.229，2017年8月。
- ・小笠原喜康（朝倉徹と共編）『哲学する道徳：現実社会をとらえ直す授業作りの新提案』東海大学出版部，2017年11月。
- ・下司 晶（北野秋男・小笠原喜康と共著）『現代学力テスト批判』東信堂，2018年1月。
- ・末富 芳『子どもの貧困対策と教育支援―より良い政策・連携・協働のために』明石書店，2017年10月。
- ・広田照幸「教育社会学と隣接諸学」日本教育社会学会編『教育社会学のフロンティア1 学問としての展開と課題』岩波書店，2017年10月。
- ・渡部 淳「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて 新しい学びが育む『自立的学习者』」『NIEニュース』第88号 日本新聞協会 2017年7月。
- ・日本大学文理学部教育学科編（佐藤晴雄，広田照幸編集担当及び分担執筆）『現代教育改革の理念と実践に関する研究―日本大学文理学部人文科学研究所共同研究（第一次報告書）―』日本大学文理学部教育学科，2017年12月。

2-12 体育教師養成段階における学生の創発身体知の評価査定に関する研究

- 代表者 鈴木 理 (体育学科・教授)
- 分担者 青山清英 (体育学科・教授)
- 大嶽真人 (体育学科・教授)
- 野口智博 (体育学科・教授)
- 水島宏一 (体育学科・教授)
- 伊佐野龍司 (体育学科・助教)
- 城間修平 (体育学科・助教)
- 吉田明子 (体育学科・助教)

【研究の目的および概要】

近年、教師の資質能力の向上に向けた政策が頻出している。中央教育審議会2012年答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」においては、教師にグローバル化や情報化等の社会の変化に応じた教科・教職に関する高度な専門的知識を有し、それらを授業・生徒指導・学級経営等において実践できる力を備えることを示している。また、2015年答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」では、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯に渡って高める、学び続ける教員像の確立や情報選択・活用能力や知識を有機的に構造化する力などが求められている。こうした現状は、佐藤(2015)が『『教える専門家』から『学びの専門家』として教師の役割が変化している』と述べるように、時代の変化に対応可能な専門職性の高い反省的实践家としての教師の育成に向けたパラダイムシフトと読み解くことができよう。

これに関して申請者らは、体育教師の運動指導における専門職性に発生運動学における創発身体知分析能力を掲げ、各実技授業においてこれらの能力の獲得に向けた実践を展開してきた。創発身体知の抽出シートの作成や授業改善を二ヶ年に渡り展開することで、学生が自らの動感身体について省察することへの習慣化が図られるなどの成果を得ている。

その一方で、実技担当教員から運動課題が処方されることで創発身体知の形成が図られているが、どのような創発身体知がどのような形成レベルでその運動課題の達成に寄与しているか詳細に提示されていない。今後、実技科目においても時代に応じた授業展開が求められることを踏まえれば、教材の構造分析と発生の関係を明示することが、学生の創発身体知の形成に向けた汎用性を担保する上で欠かせない。これらの問題意識から本研究は、当該運動の構造分析を踏まえ、体育教師養成段階における学生の創発身体知を評価・査定することを目的とする。

【研究の結果】

本研究の目的を達成するために、第一に体育の教材研究の学習経験を通じて学生の認識がどのように変容するのかを見極めることを実施した。それは学習課題となっている運動がどのような構造をなしており、課題解決にあたってはどのように努力を集中すればよいのか、すなわち「動きを覚えるための身体知」である運動創発身体知の視点から、他方では「教えるための身体知」である運動促発身体知の視点から光を当てながら、教育実践現場に生かされる当事者としての生徒の具体的・現実的な学びに寄り添おうとする教材研究が待ち望まれるためである。なお、当該研究の実施については日本大学文理学部において2016年度前期に開講された、「保健体育科授業実践演習1」を対象とした。授業は主として体育科教育学を専門とする専任教員が担当したが、必要に応じて実技担当教員の協力を得ながら進められた。第1講のガイダンスに続く第2講から第13講は、4つの運動領域、すなわち「器械運動：前転」、「陸上競技：砲丸投」、「ダンス：現代的なリズムのダンス」、「球技：バスケットボールのファストブレイク」

について、各々以下の3段階で編成された。具体例として以下では器械運動の領域について報告する。第一段階の課題は「教材の実体験と省察」であった。ここで実技担当教員は、当該領域の指導（対象は初学者や未熟練者を想定）に用いられる典型教材（運動、活動等）を提示するとともに、動きのコツやカンを導出するための方策について指導が行われた。学生は教材の全体イメージを捉えるとともに、実施上のポイントや留意点等を確認しながら、実際に生徒の立場に立ったつもりで試みることができる。学生は実体験を踏まえ、その教材を通じて何が「できる・わかる」ようになるのかを考察し、事後、レポート（教材の概要、ポイント・留意点、考察）を提出する。第二段階の課題は教材解釈と指導構想であった。第2段階の課題は教材解釈と指導構想である。学生は前時の考察に基づき、教材の構成機序（指導の目的内容、方法）についてグループで協議する。指導計画の立案にあたっては、運動の行い方やポイントを簡潔明瞭に示せるよう説明の仕方（具体的な指導言葉）についてよく吟味すること、学習活動を円滑に進めるために必要と思われる配慮（用具の準備、段取り等）について詳しく想定しておくこと、指導目標・内容に即して生徒のどのようなところに焦点化して観察するのか（＝どのようなことは問題にしないのか）を絞り込んでおくこと、そこではどのようなケースを「良い」あるいは「要修正」とするのか、またその際にはどのような言葉かけを行うのかについて具体的にシミュレーションしておくことが求められる。第3段階では模擬指導（マイクロティーチング）が実施される。各グループの指導担当者は、自グループで立案した指導計画を他のグループを対象に実施し、事後ただちにその場で振り返りのミーティングを行う。指導担当者と対象グループを交替しながら同様に4回繰り返す。指導を担当した者に対して事後レポートの提出を求めた。

本研究においては、授業の学習過程を内在的に記述・解釈するために、フィールドワークの手法を観察及び資料収集方法とした。本研究の目的に照らし、教材をめぐる学生の認識の変容を捉えるためには、彼/彼女らの経験（出来事）に身を寄せながら、そこに立ち現れてくる学びのありようを「分厚い記述（thick description）」（ギアーツ、1987）をもって記録よりすることが欠かせない。

精製されたフィールドノーツから体育の教材研究を中核テーマとする観察対象授業において、学生たちは学習活動中の立ち位置を異にする学び（3段階）を循環しながら経験を蓄積していく中で、漸進的・段階的に実践的指導力を獲得していったように窺われたことが本研究における主要知見として解釈された。すなわち「学び方の学習」から出発した教材研究は、『『生徒の学び』についての学び』へ、そして「教えるための身体知の探究」を経て、「学びのメタ認識の深化」に至ったと解された。こうして、生徒目線の学びで得られた「なぞらえによる理解」（尾ヶ崎、1990）は指導場面に身を転じた教師に二重（教師、生徒）の視点を準備する、という「役割の互恵性」が顕在化したことは、本研究が照射した新規的な教材研究の特筆すべき成果として挙げられる。それはまさに（緒言にて既述のごとく）、教師が教えようとする内容を、生徒にとっての「わたしが直面している問題」として捉え直すための戦略的拠点と言えよう。

【研究の考察・反省】

第一に、教材研究（をテーマとする授業）における知的発達を一層促進・充実させることである。本研究の観察対象授業では、教材研究の各段階で考察視点を明記したシートによるレポート提出を求めた。それらのドキュメントに記された文章は、学生たちの認識や見解を把握するための重要な手がかりとなり得るものと期待された。ところが実際には、記述内容の大半は事実の列挙や行為の仕方等、外見的・表層的レベルに留まり、当該の学習活動（具象）から意味を汲み出そうとする機運は低調であった。受講者の先行経験や言語発表能力を顧慮すると、リフレクションの進め方について丁寧な事前指導を行うとともに、考察視点の提示や回答方法にも改良を加えていくことが必要である。第二に、教材研究を通じて教師（を目指す者）としての「わたし」がどのような成長を遂げたのかを認識すること、すなわち「学びのメタ認識」を浸透させることである。ここで中教審答申を引くまでもなく、これが

らの時代、高度専門職業人たる教師は常に「学び続ける教師」であることが求められる。本研究では、新規的な教材研究が体育教員志望学生の実践的指導力形成に奏功することが開示されたが、それにもまして重要なのは、彼/彼女らが自らの意思で、自らの手で、そうした学びのサイクルを駆動していくことである。「学びのメタ認識」が、「私は何を学んだ(学んでいない)のか」を俯瞰するもう一人の私を担保することは想像に難くない。教材研究の授業担当教員は、このことを強く認識して指導に当たることが肝要である。

これら諸課題に適切に対応した教員養成プログラムを構築していくこと、そしてその成果と課題を検証していくことが待ち望まれるところである。

【研究発表】

伊佐野龍司（2017）ネットを使わないネット型の学習内容。上越体育授業研究会。上越教育大学学校教育実践研究センター。

【研究成果物】

鈴木理・伊佐野龍司・吉田明子・城間修平（2018）実践的指導力を高める教員養成プログラムの探究—体育の教材研究を通じた学生の認識変容—。日本大学FD研究6, 1-14.

2-13 スポーツ競技中の選手の心理社会的なストレス反応の精神生理学的な測定

- 代表者 水落文夫 (体育学科・教授)
- 分担者 水島宏一 (体育学科・教授)
- 高橋正則 (体育学科・教授)
- 松本 恵 (体育学科・准教授)
- 金野 潤 (体育学科・准教授)
- 小山貴之 (体育学科・准教授)

【研究の目的および概要】

オリンピックなどの重要な大会でスポーツ選手の多くは実力を発揮できない。たとえば、陸上競技ハンマー投種目のオリンピック5大会上位入賞選手の平均記録は、それらの選手の過去の最高記録に比べると約3%減と報告されている (Murofushi et al., 2016)。その主な原因として不安定要素とされる心理的要因が指摘される。スポーツ領域におけるこの方面の研究では、「あがり」研究に代表されるように様々な心理学的理論やモデルで現象が説明される。しかし、心理的ストレスの視座から、ストレス反応としての感情反応や生理反応がパフォーマンスにどのように影響するのかを実証的に検討したものは少なく、特に試合中の実態は明らかではない。本研究の目的は、既成の心理的ストレス課題に対するストレス反応 (実験室実験) と実際の試合におけるストレス反応 (フィールド実験) を感情反応と生理反応から測定することで、スポーツ競技における選手のパフォーマンスに影響する一過性のストレス反応を検討することである。

研究協力者は、競技レベルの高い大学生バレーボール男子選手で、心理的ストレス課題による実験室実験では7名、実際の公式試合によるフィールド実験では8名、練習試合では12名であった。実験室実験において選手は、心理社会的ストレス課題として信頼される TSST 課題の遂行前、中、後の心拍変動 (心電図 RR 間隔) を心拍センサーによって連続測定され、唾液採取管を用いた唾液採取と感情状態尺度 ASSSP への自己評定を頻回に行った。分析項目は、ローレンツプロット法による CSI (交感神経活動指標) と CVI (副交感神経活動指標)、副腎皮質ホルモンである唾液コルチゾール、独自に開発した感情状態尺度 ASSSP であった。なお、CSI は SAM ストレス反応系、コルチゾールは HPA ストレス反応系の活動を推測する項目として採用した。また、フィールド実験の練習試合と公式試合において選手は、試合前と試合中のセット間で唾液採取と ASSSP への自己評定を頻回に行った。今回の唾液採取や感情状態評価は、試合の進行や選手の安全を考慮して、身体的・心理的な負担をなるべく与えない簡易な測定方法として採用した。

【研究の結果】

実験室実験で採用した TSST はスピーチと暗算で構成される社会心理的ストレス課題であり、実験環境で急性ストレスを誘導し、HPA 系活性を確かに亢進させる最も一般的な方法とされている (Allen et al., 2014)。そこで、スポーツ競技の試合で生起する一過性ストレスを想定した TSST 課題に対する ASSSP とコルチゾールの反応を測定して、ストレス指標としての有用性を確認した。その結果、TSST 課題に対して ASSSP の因子である「低活性・快」の感情は低減し、「高活性・不快」と「低活性・不快」は増強傾向を示し、ネガティブ感情の軸を中心に ASSSP の高い反応性が認められた。また、生理指標であるコルチゾールの緩徐ではあるが明確な上昇が確認された。これらの感情反応と生理反応の同調は、HPA 系活動亢進によるストレス反応と推測された。心拍変動の時系列データに対するローレンツプロット法による分析から、TSST 課題中は交感神経系優位の自律神経活動が推測された。しかし、この反応はコルチゾールほど明確ではなかった。これらのことから、実験室実験により ASSSP の感情反応を評価するストレス指標としての高い反応性が確認された。

バレーボール競技の練習試合と公式試合によるフィールド実験では、実際のスポーツ競技における試合前と試合中の選手のストレス反応を、感情反応と生理反応からとらえることができた。その結果、練習試合（3対0のセットカウントで一方のチームが勝ち）では、試合中のASSSPPで評価した4つの感情領域とコルチゾールは、いずれも3セットの変化が両チームとも少なく、ストレス反応とパフォーマンスの指標としたセットの得失が関係しなかった。これに対して、公式試合の初戦（2対1のセットカウントで測定対象チームの勝ち）の第1セット（失）後と第2セット（得）後において、ASSSPPの「低活性・快」因子と「高活性・不快」因子およびコルチゾールに特徴的な変化が観察された。すなわち、落とした第1セット後は、活性度の高い不快感情とコルチゾールは練習試合と比較して有意に高かった。その後、取った第2セット後は、活性度の低い快感情は有意に増強し、活性度の高い不快感情とコルチゾールは有意に低減した。試合におけるネガティブ感情を中心とした感情状態とコルチゾールの変化は、パフォーマンスと関係するセットの得失に関与したと示唆された。

【研究の考察・反省】

スポーツ競技場面に存在する他者評価や結果予測などのプレッシャーと呼ばれる心理的ストレッサーによって生じる生理反応と感情反応は、実験環境における公共でのスピーチと暗算で構成される社会心理的ストレス課題であるTSSTによるストレス反応に似て、HPA系活性を亢進させ、ネガティブ感情の増強とコルチゾールなどのバイオマーカーの上昇を促すと想定される。本研究におけるTSST課題による実験室実験、および実際のバレーボールの公式試合では、ASSSPPによって評価された感情反応と、主にコルチゾールによって評価された生理反応は、それらの変化が同調しており、同様の傾向として観察された。したがって、まずは公式試合で観察された感情反応と生理反応は、主にHPA系活性による心理的なストレス反応であると確認され、ASSSPPとコルチゾールはスポーツ競技の固有性に対応する有能なストレス指標と判断される。

そして、このような心理的ストレッサーが存在する大会での試合は、心理的ストレッサーが低減した練習試合とは異なり、パフォーマンスに影響する明らかなストレス反応の変化をみせている。すなわち、今回の公式試合で多くの選手は、低活性・快と高活性・不快のネガティブ感情軸（Watson and Tellegen, 1985が提唱する「低いネガティブ感情－高いネガティブ感情」軸）の変化、およびコルチゾール分泌の亢進と抑制を、試合中の比較的短い時間の中で生起させており、それらの感情反応と生理反応の変化は、HPA系活動とともに、そのときの行動反応としてパフォーマンスにも関与したと推測される。浅井・佐川（2013）は、スポーツ競技の選手や指導者が、試合中のいわゆる「流れ」と呼ばれるパフォーマンスの大きな揺らぎを重要視し、その存在を信じていることを紹介した。この試合中の「流れ」にHPA系活動を基盤とする心理的なストレス反応が影響していることも考えられる。

スポーツ競技の試合における心理的ストレスを感情反応と生理反応から評価した先行研究（たとえば、Alix-Sy et al., 2008）では、試合直前あるいは試合後のコルチゾール増加と不安、自信、期待の変化を観察している。しかし、それらの研究のほとんどは試合前後を測定時点としており、試合中の動態を追跡したものではない。本研究は、ダイナミックに動く試合中の心理的ストレス反応の実態を捉えており、得られた知見は試合当日の心理的コンディショニングのために有益な資料となる。

本研究の課題の1点目として、今回の検証が単一の競技種目の2試合程度のデータに基づいていたことである。スポーツ競技場面で起こる心理的ストレス反応の実態をとらえるには、競技種目、大会・競技レベル、性・年代、さらに特性的な心理的要因などの変数を加えた検証が必要である。2点目は、選手にとって重要な試合で測定することの困難性である。試合中の限られた時間と場所の中で、選手に心理的ストレスを与えない測定方法の確立が急務である。3点目は、測定によるコンディションへの影響危惧から対象者確保が難しいことである。そのため、今回は独立群デザインとなった。得られた結果に説得力を与える同一対象者の反復測定デザインが有効であろう。そ

して、4点目にパフォーマンス変数の問題が残されている。セットの得失は対戦相手などの要因に影響を受ける。だからといって統制された試合では、肝心の競技ストレスによる心理的負荷の強度が再現できない。パフォーマンスの評価指標は様々に考案されているが、高い妥当性と有用性をもつ方法は未だにみられない。本研究を展開するために検討しなければならない大きな課題である。

【文献】

- Allen, A.P., Kennedy, P.J., Cryan, J.F., Dinan, T.C., and Clarke, G. (2014) Biological and psychological markers of stress in humans: Focus on the Trier Social Stress Test. *Neuroscience and Biobehavioral Reviews* 38 : 94-124.
- Alix-Sy, D., Scanff, C.L., and Filaire, K. (2008) Psychophysiological responses in the pre-competition period in elite soccer players. *Journal of Sports Science and Medicine* 7 : 446-454.
- 浅井雄輔・佐川正人（2013）バレーボールの試合における「流れ」の推移と試合状況について. *コーチング学研究* 27 : 9-22.
- Murofushi, Y., Mizuochi, F., Yatabe, K., Fujiya, H., and Musha, H. (2016) An analysis of performance evaluation criteria for hammer throwers : A case study of Olympians. *スポーツパフォーマンス研究* 8 : 47-63.
- Watson, D. and Tellegen, A. (1985) Toward a consensual structure of Mood. *Psychological Bulletin* 98 : 219-235.

【研究発表】

なし

【研究成果物】

- 「大学生スポーツ選手のスポーツ・パフォーマンスを予測する感情状態尺度の作成」, *スポーツ産業学研究*, 第28巻1号, pp.31-51, 2018年1月1日, 日本スポーツ産業学会。
- 「スポーツ競技の試合前および試合中における選手の心理的ストレス反応の変化：バレーボールの公式試合を対象として」, *桜門体育学研究*, 第53集（早期公開中）, 2018年9月25日発行予定, 桜門体育学会。

2-14 基礎心理学分野の日常場面における応用に関する総合的研究 (2)

- 代表者 坂本真士 (心理学科・教授)
- 分担者 巖島行雄 (心理学科・教授)
- 岡 隆 (心理学科・教授)
- 齋藤慶典 (心理学科・准教授)
- 内藤佳津雄 (心理学科・教授)
- 羽生和紀 (心理学科・教授)
- 依田麻子 (心理学科・教授)

【研究の目的および概要】

これまで継続的に研究テーマとしてきた心理学の基礎研究と応用研究の役割に関する総合的研究の成果を踏まえて、基礎心理学分野における研究手法や研究成果の日常場面での応用や実用の可能性に焦点を当てて、総合的に検討することを本研究の目的とする。

一昨年までの共同研究において、研究分担者の研究分野である社会心理学系、環境心理学系、認知心理学系、生理心理学系のそれぞれの研究成果について、実験室研究とフィールド研究という対比的な観点から、基礎と応用の統合についての検討を行ってきた。本研究では、その成果を生かしながら、社会心理学系、環境心理学系、認知心理学系、生理心理学系のそれぞれの専門分野における研究を継続し、これらの基礎心理学分野における研究方法や研究成果が、日常場面における心理学の応用や実用に対して、どのように貢献できるのか、引き続き総合的に検討を行う。

心理学科に所属する専任教員の研究領域である、社会心理学、環境心理学、認知心理学、生理心理学から、それぞれ日常生活に関わる研究テーマを取り上げた。社会心理学ではステレオタイプ・偏見や抑うつなどの社会的・個人的問題に関する検討を、環境心理学では建築物の環境や街の景観の機能と行動の関係を、認知心理学では日常の出来事の記憶、高齢者介護における認知心理学的理解等の検討を、生理心理学ではストレス、モチベーション、リラクゼーションなどに関する日常生活場面に近い状況における検討を進める。

これらの研究について、日常生活への応用や実用を念頭に置いた研究方法の検討を行うとともに、データ等の収集を開始し、得られた成果については、個別に学会報告や論文執筆を行う。また、それぞれの成果を持ち寄って討論を行い、テーマである基礎心理学分野の日常場面での応用や実用の可能性について検討を行う。

【研究の結果】

社会心理学分野では、SNSというバーチャルな日常空間、また、児童養護施設という濃密な実空間におけるリスク認知と安全感・安心感を規定する要因のいくつかを明らかにした(岡)。また、いわゆる「新型うつ」のパーソナリティ特徴として対人過敏・自己優先傾向を仮定し、それを測定する尺度を用いて、ストレスに対する反応を調べるとともに、「新型うつ」と見られる人が周囲からどのように認知されるのかを実証的に調べ、職位(管理職・非管理職)によって差異があることを見いだした(坂本)。

環境心理学分野では、都市住宅環境に関する研究を行い、移動経路の選択行動、言語的記述、景観特徴量などを多変量解析や機械学習を用いて分析する手法の開発を行った(羽生)。

認知心理学分野では、目撃供述では、人物の識別の誤りが起こり得る。その原因の一つが無意識転移と呼ばれる、別の場所、別の日時であった人を、特定の事件にあった人物と間違える誤りである。研究により、この識別の誤りが、変化盲によって起こり得ることを実験によって実証した(巖島)。また、地域に居住する高齢者の認知機能と日常生活機能の関係を、年齢とADLをコントロールした上で階層ロジスティック回帰分析を用いて検討した。その結果、

男性ではコミュニケーションに関する日常生活動作が「表情認知」や「環境認知」と関係がみられたが、女性では、展望記憶と自伝的記憶が多くの日常生活動作と関係しており、結果に性差が認められた（内藤）。

生理心理学分野では、唾液中コルチゾール濃度について、短時間の実験室場面におけるストレス指標として利用可能か検討したところ、実験室到着時に最も濃度が高く、課題遂行のような弱いストレス刺激が加えられても濃度が低下していくことが示唆された。また、性差も認められたため、実験室場面での利用には慎重な検討が必要であることが示された（齋藤）。また、ストレスの生化学的指標、特に交感神経系の賦活と関連があるとされている唾液アミラーゼによるストレス反応の検討を行った。ストレス場面での反応は認められたものの、実験開始時のベースライン測定データが高く出ること、個人差が大きいことなどの問題点の解決が必要である（依田）。

【研究の考察・反省】

社会心理学、環境心理学、認知心理学、生理心理学から、日常場面に密接に関連する研究テーマに関して貴重な知見が示され、基礎心理学分野の日常場面における応用に関する共同研究の2年目としての成果が得られた。いずれの研究成果も基礎心理学の研究手法や知見を生かしながら、養護施設におけるリスクと安全、新型うつ、住環境と景観、司法・裁判、高齢者介護、ストレス、といった日常場面に関する問題の解決に対して寄与するものであったといえる。今後は、さらに研究を重ねることで、基礎心理学的な知見を深めるとともに、日常への応用可能性をより高めていくことであり、それぞれの研究成果を一層深めていくことが課題である。

【研究発表】

Itsukushima, Y. (2017) Eyewitness memory: retrograde amnesia may be the causes of change blindness of person identification. EFPA 15th European Congress of Psychology 2017, Amsterdam, July, 13.

河合萌華・中嶋凌・木村敦・岡隆（2017）高校生における認知的熟慮性とSNS利用リスクの楽観視との関連．日本教育工学会第32回全国大会．

川島哲史・依田麻子（2017）大学生の生活習慣とゲームおよびSNSへの依存との関連性における基礎的研究．第24回日本行動医学会．

北村世都・内藤佳津雄・玉木賢太郎（2017）地域在住高齢者のADL・認知機能と日常生活機能の関連．日本老年社会科学会第51回大会．

梁昱茜・齋藤慶典（2017）同調行動としてのあくびに関する心理的・生理的反応の検討．第35回日本生理心理学会大会．

齋藤慶典・井澤修平・小川奈美子・依田麻子（2017）課題遂行と時間経過に伴う唾液中コルチゾール濃度の低下について．第35回日本生理心理学会大会．

山川樹・坂本真士（2017）対人ストレスに対する反応にパーソナリティが及ぼす影響（2）：20代のパート/アルバイト勤務者を対象とした映像刺激を用いたオンライン調査．日本心理学会第81回大会．

【研究成果物】

羽生和紀（2017）環境心理学—シリーズ心理学と仕事17— 北大路書房

檜原潤・村中昌紀・山川樹・坂本真士（2018）日本の会社員はうつ病症状について誰に相談したいと思うのか—援助要請意図とその規定因の検討— 研究紀要（日本大学人文科学研究所），95, 95-106.

勝谷紀子・坂本真士（2017）重要他者に対する再確認傾向と重要他者の行動および感情の推測との関連．パーソナリティ研究, 26, 173-176.

松村香・宇津木孝正・岡隆（2017）児童養護施設で暮らす子どもの生活安全感・安心感と精神的健康との関係―「生活安全感・安心感尺度」の改良を通して―. 研究紀要（日本大学人文科学研究所）, *94*, 47-62.

Sakamoto, S., Muranaka, M., & Yamakawa, I. (2017) Features of interpersonal cognition in people with high interpersonal sensitivity and privileged self: Personality features of “modern-type” depression. *Psychology*, *8*, 1390-1402.

玉木賢太郎・内藤佳津雄（2018）高競合状態における記憶の抑制処理：検索手がかりの種類の検討 日本大学心理学研究 *39*, 22-28.

2-15 精神健康に関する臨床心理学的研究 (7)

●代表者 菊島勝也 (心理学科・准教授)

●分担者 横田正夫 (心理学科・教授)

津川律子 (心理学科・教授)

岡田和久 (心理学科・教授)

山口義枝 (心理学科・准教授)

【研究の目的および概要】

臨床心理学は、情緒や行動の障害に関する研究 (research)、アセスメント (assessment)、評価 (evaluation)、予防 (prevention)、トリートメント (treatment) を専門とする心理学の部門である。すなわち、臨床心理学は人のこころの健康に寄与することを目的とした学問といえる。そして、こころの健康が損なわれる問題には、様々なレベルが存在しているため、多様なアプローチから継続的に研究を進める必要がある。

このような立脚点を踏まえ、今回の共同研究においても、引き続き「精神健康に関する臨床心理学的研究」を継続テーマとし、精神的健康に関する臨床心理学的知見を継続的に蓄積していくことを目的とする。そこで本研究では、精神障害の障害者から健常者までを対象として、各研究分担者が専門性を活かした研究を進めることを通じて、現代の精神的健康をとりまく問題について、実態把握を行い、それらへの心理支援の更なる質的向上に寄与したい。

具体的には、1) 子育て支援のためのグループ活動の効果、2) 統合失調症患者の長期経過を描画を通して調べ、改善・増悪する指標、3) 心理的アセスメント及びPMDD、アディクション、ふれ合い恐怖心性などの予防、4) 休職した気分障害者の復職プロセス、5) 共感不全が人に与えるマイナスの影響に関する複数の研究を行った。方法論としては心理検査法、質問紙法 (調査票)、面接法といった各領域の対象に合わせたアプローチにより、量的及び質的研究法を用いた。

【研究の結果】

実際に臨床実践を行っている対象に向けての研究も含まれるため、臨床実践に悪影響が生じないことを見立てたうえで、倫理的な配慮を十分に行って実施している。

横田は、「草むらに落とした500円を探している自分」の描画を求める草むらテストにおいて人物が複数描かれる分身を描いた統合失調症のケース報告をおこなった。分身がなぜ描かれるようになったのかを明らかにすることが目的であった。ケースは20歳の時に精神病院に入院し、以後退院しないまま経過した。彼の20歳代では、居場所を得たいとの訴えが続いた。しかし彼の描く家の絵にはドアや窓がなかった。30歳代には、性的逸脱行為が女性たいてい示されるようになった。この頃に描かれた樹木画は男根のようであった。40歳ごろには性的逸脱行為は受け身的なものとなった。これと同時期に草むらテストの描画に分身が出現した。この分身には脚や足先がなかった。このことは彼の性的欲動の弱まりを反映しているように思われた。統合失調症において「自分」を描く課題において分身が描かれることは、性的欲動に示されるように、自分のイメージが脆弱になっていることを示していた。

津川は、大別して2種類の研究を行った。1つは、心理的アセスメントに関する研究である。精神科外来通院中の大うつ病性障害患者40例を対象として、包括システムによるロールシャッハ法 (CS) と自殺関連行動との照合から、その特徴を抽出した結果、受検後1年以内の自殺関連行動とSuicide-Constellation (S-CON: 自殺の可能性) の12下位変数のひとつである“es>EA (刺激要求>現実体験)”との間に関連性が認められた。さらに、Vista (立体濃淡反応: V) およびMorbid (損傷反応: MOR) の反応内容に焦点を当て、S-CON下位変数の質的特徴について検討を進めた結果、受検後1年以内の自殺関連行動とMORを伴った反応内容との間に関連性を認めた。具体的には、自殺関連行動を呈した者は、Hx (人間的体験反応) を除く「人間反応」の反応内容にMORがコードされる傾向にあ

り、さらにその反応に「血液反応 (BI)」が付きやすかった。これらの結果より、自殺予防の視点において、特に着目すべきものは、S-CON下位変数の中の“es>EA”，およびMORを伴った人間反応であることが示唆された。加えて、このMORを伴った人間反応に血液反応が付された場合には、より一層の注意が必要であると考えられた。もう1つは、PMDD、アディクション、ふれ合い恐怖心性などの予防に関係する心理学的変数を、大学生を対象として筆頭研究者たちとともに実証的研究を行ったものであり、それぞれ専門学会にてポスター発表した。

岡田は、気分障害による休職経験者が休職前からその後の復職または再休職へと至る継時的プロセスについて、複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model : TEM) を用いて分析した。その結果、等至点 (EFP) : 「順調な復職」、両極化した等至点 (P-EFP) : 「再休職」、2個の分岐点 (BFP) : 「心身の不調」「休職に伴うネガティブな認知」、4個の必須通過点 (OPP) : 「うつ診断」「治療」「休職制度の活用」「復職後の通院」、26個の社会的方向づけ (SD) : 「仕事のプレッシャー」「ハラスメント」「職場の不適切なサポート」「職場外のストレス」「休職したことへの焦り」「休職後の職場との悪い関係」「復職前のやや過活動気味な状態」「復職後の職場内のサポート不足」「症状の再燃」等、10個の社会的ガイド (SG) : 「職場の人からの受診の勧め」「主治医による精神療法」「復職後の人的サポート・気遣い」等、が設定された。復職へと至るプロセスには、主治医による精神療法、復職後の人的サポート・気遣い、などがみられ、再休職へと至るプロセスには、ハラスメント、職場外のストレス、休職後の職場との悪い関係、復職前のやや過活動気味な状態、復職後の職場内のサポート不足、などがみられた。それゆえ、気分障害による休職経験者の順調な復職プロセスには職場や主治医との良好なサポート関係が存在する一方、再休職プロセスにはそれらの不足とともに、休職前から累積するさまざまな要因が影響している可能性が示唆された。

山口は、他者への共感的理解が難しいとされているASD (自閉症スペクトラム障害) 者と結婚した、定型発達女性パートナーについての文献研究を行った。現在、日本の専門誌においては、ASD男性とパートナーの結婚生活についての記述はまだ少ない。そのため、日本でも引用されることの多いAston (2003,2008,2012,2014), Attwood (2007, 2012) の研究を基に、日本においてASD男性と結婚した女性による体験記 (東山・東山・斎藤, 2012; 羽鳥, 2012; 西城, 2015; 野波, 2014, 2015 他) を検討した。そして、①抑うつ状態女性の心理面接において、パートナー男性にASD特徴が現れていないのかの確認を行う。②男性にASD特徴が認められ、女性から自責的な話が出た場合、男性に家庭生活の責任を担ってもらえない状態であるという視点から話を理解していく。③女性にASD男性との関わり方を具体的知識として伝える。④女性に、日常的共感が示されない辛さを伝える。⑤可能であるならば男性側にも自身の特徴理解を働きかけることが、ASD男性のパートナーへの支援として示された。

菊島は、子育て支援グループ活動におけるカンファレンスを取り上げ、学生スタッフの体験学習を促進する効果について検討を行った。質的データの分析から、体験学習を促進する効果として、(1)『学生スタッフの支援力の向上』〈子どもと関わる力の向上〉・〈子どもに対する観察力の向上〉・〈企画力の向上〉、〈相談して解消できる〉、(2)『子どもへの理解の深まり』〈多様な視点からの子ども理解の深まり〉・〈子どもへの発達心理学的な理解の深まり〉・〈親子関係の理解の深まり〉・〈支援方針の共有〉、(3)『活動全体への理解の深まり』〈活動全体への理解の深まり〉の3つの上位カテゴリーと9つの下位カテゴリーが抽出された。また、学生スタッフの体験学習の促進に関連する要因として、(1)『参加しやすい雰囲気の良いさ』〈発言しやすい雰囲気〉・〈熱意のある場〉・〈見守られている場〉、(2)『1年間の継続的な実施』〈1年間の継続的な実施〉という2つの上位カテゴリーと4つの下位カテゴリーが抽出された。

【研究の考察・反省】

横田の研究では、統合失調症の描画には多様な特徴があり、それぞれの特徴は患者の独自の背景を理解した上で理解されるものであり、特異な表現においてもその背景理解を十分行うことである程度の理解は可能になると思われる。

津川の研究では、実際の臨床事例において、心理療法開始前と回復して心理療法を終了する時の心理検査（再検査）の比較照合を通して、心理学の変数の変化をデータで確認し、臨床実践に活かせるような事例研究が必要であり、次年度に投稿を予定している。

岡田の研究では、TEM図をより精緻化した後、次年度以降の投稿を予定している。

山口の研究では、ASD男性と婚姻関係にある女性への支援方法について、実際の心理面接において実践していくことが今後の課題である。

菊島の研究では、子育て支援グループ活動の効果について自由記述による調査を行なったが、今後はインタビュー調査により詳細な内容を明らかにすることが今後の課題となった。

【研究発表】

櫻井薫・和田佳子・河野千佳・横田正夫：妊娠期の色彩円環家族イメージ画の描線の特徴と産後うつとの関連。第58回日本母性衛生学会学術集会。2017年10月6日。神戸大学（神戸）

河野千佳・和田佳子・櫻井薫・横田正夫：対児感情評定尺度の形容詞項目の検討。第58回日本母性衛生学会学術集会。2017年10月6日。神戸大学（神戸）

滑川瑞穂・横田正夫：バウムテストの印象評定と抑うつの関連—予備的調査から—。日本心理臨床学会第36回大会。2017年11月19日。東洋大学（横浜）

五十嵐愛・横田正夫：統合失調症者におけるぬり絵と精神症状、背景要因との関連。日本心理臨床学会第36回大会。2017年11月20日。東洋大学（横浜）

青木英美・横田正夫：彩色描画からみた統合失調症の約15年の経過報告。日本心理臨床学会第36回大会。2017年11月20日。東洋大学（横浜）

塚本美咲・津川律子（2017）：女子大学生における月経前の対処行動がPMDDに及ぼす影響についての検討。日本健康心理学会第30回大会。2017年9月3日。明治大学（東京）

佐藤日向子・津川律子（2017）：大学生の嗜癖傾向における心理的要因の検討—質問紙調査と半構造化面接を通して—。日本精神衛生学会第33回大会。2017年10月8日。ルーテル学院大学（東京）

白居麻琴・津川律子（2017）：ふれ合い恐怖的心性と対人的自己効力感が自己開示に及ぼす影響。日本精神衛生学会第33回大会。2017年10月8日。ルーテル学院大学（東京）

岡田和久（2017）：気分障害による休職経験者の休職前から復職または再休職へと至るプロセス。第30回日本総合病院精神医学会総会。2017年11月17日。富山国際会議場（富山）

【研究成果物】

滑川瑞穂・横田正夫（2017）：バウムテストの表現に関連する抑うつ症状について。臨床描画研究 Vol. 32, 143-156.

横田正夫・青木英美・道行隆・原淳子（2018）：草むらテストで分身を描いた統合失調症患者の臨床心理学的検討。日本大学文理学部心理臨床センター紀要15（1），印刷中。

津川律子（2017）：アセスメント（心理検査・投映法）。臨床心理学 第17巻第4号（通巻100号），418-419.

津川律子（2017）：公認心理師に求められるアセスメントの力。最新精神医学第22巻4号，317-322.

津川律子（2017）：アセスメントに関する理論と実践。こころの科学 公認心理師入門—知識と技術，130-133.

水野康弘・北島正人・有木永子・浅川けい・津川律子（2017）：ロールシャッハ実施後に自殺関連行動を認めた大うつ病性障害者のS-CONを中心とする特徴。包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌第21巻1号，43-49.

山口義枝（2018）：ASD男性と結婚した定型発達女性への支援についての文献展望．日本大学文理学部心理臨床センター紀要15（1），印刷中．

菊島勝也（2018）子育て支援グループ活動におけるカンファレンスの学生スタッフに対する効果．日本大学文理学部心理臨床センター紀要15（1），印刷中．

2-16 アセアン諸国の社会経済発展に関する理論・実証的分析

- 代表者 大塚友美（総合文化研究室・教授）
- 分担者 椎名正博（総合文化研究室・教授）
石川晃司（総合文化研究室・教授）
小林和歌子（総合文化研究室・准教授）
ティモシー・グティエレス（総合文化研究室・助教）

【研究の目的および概要】

本研究の主たる目的は、成長と発展の著しいアセアン地域の実状を、理論と実証の両面から分析し、国際社会や日本への影響を考察することにある。

社会経済のグローバル化が進展している今日、東南アジアに位置する国々の社会と経済は急速な成長と発展の軌道に乗りつつある。こうした情勢のもとにおいて、東南アジア地域の国々は2015年にアセアン経済共同体（AEC）を発足させた。これにより、欧州連合（EU）を上回る6億2000万人の人口と、総額300兆円を上回る域内総生産を有する巨大な経済（市場）が東南アジアに成立した。こういった要因を弾みに同地域の経済活動が活発化していることからするなら、今後、アセアン経済共同体（AEC）は世界や日本の社会経済にますます大きな影響を及ぼすことになる、と考えられる。

このように急速な成長と発展の途上にあるアセアン共同体の動向をできるだけ正確に把握することは、少子高齢化の進展などによって社会や経済の今後の動向が懸念されている日本のような先進国にとって、社会経済の先行きを考察する上で重要な意味をもっている、といえる。

しかし、アセアン地域諸国の実情は、意外と知られていないのが現実である。かつて岡倉天心は「アジアは一つ」と唱えたが、例えばヨーロッパの欧州連合（EU）などとは異なり、現実の東南アジアは文化・宗教・言語・生活習慣などを異にする国々から構成されている。また、アセアン経済共同体（AEC）の各構成国内に目を転ずると、経済の成長と発展が急速であるだけに、それにともなう経済的恩恵に浴せる階層と浴せない階層との格差が拡大しはじめ、これが一因となって複雑多岐にわたる社会・政治・経済問題が生じていることも、また確かな事実である。こうした問題の解決は容易ではないが、放置すれば政情不安などが生じ、その悪影響は世界に及びかねない、という懸念を増幅させることにもなる。本研究においては、このような問題意識と目的のもとに、アセアン経済共同体（AEC）の動向を理論と実証と両面から考察すると同時に、急速に発展しつつある同地域の実情を把握するために、アセアン地域のなかの代表事例となり得る国において現地調査を行う。なお、本共同研究の中核メンバーは、海外での実地研究などの経験も豊富であることから、有意義な知見が得られるものと確信している。

【研究の結果】

本共同研究は、総合文化研究室所属の教員による共同研究である。また、下記の研究担当領域が示しているように、各教員の専門分野はそれぞれ異なっている。このため、研究の成果を一括して記すことは困難であるが、下記の「研究発表」および「研究成果物」に示されているように、研究の成果は着実に蓄積されている（詳細は、これらの論文などを参照されたい）。

（研究分担）

大塚友美（研究代表者）；研究の総括、およびアセアン地域の経済・人口変動の理論・実証的分析。
椎名正博；アセアン地域におけるフランス文化の影響。

石川晃司；アセアン地域の社会経済変動と政治的対応。

小林和歌子；アセアン地域の言語政策。

ティモシー・グティエレス；アセアン地域の共通言語としての英語の教育。

また、本研究の主要メンバーは、平成29年12月23日から平成29年12月29日にかけて、アセアン地域の特徴を体現していると考えられるカンボジアでの現地調査に参加した。その成果は、プロジェクト教育科目「カンボジアの研究」における下記の講義、

1. カンボジアの人口と経済
2. カンボジアの政治
3. カンボジアの外国語教育

などに反映されており、学生および社会に還元されている。

【研究の考察・反省】

上記から分かるように、現段階において、本研究の成果は統一的な体裁に欠ける嫌いがあることは確かであるが、近い将来、この研究成果を体系的まとめて上梓する所存である。

【研究発表】

本研究に関連する研究発表には、およそ次のようなものがある。

1. 日本人口学会第70回全国大会にて発表。
「日本の人口政策の人口経済学的分析」
明海大学, 2018年6月2日(土)～3日(日)
2. 東アジア日本語教育・日本文化研究学会2017年度国際学術大会
「堀口久萬一のフランス詩漢訳について」
韓国仁川大学, 2017年度8月
3. How can we teachers provide effective listening activities for lower level learners?, JUSTEP2017, University of Hawaii at Manoa.

【研究成果物】

本研究に関連する研究成果物には、およそ次のようなものがある。

1. 「戦後昭和期・平成期における日本の人口政策—人口経済学的分析—」『研究紀要』（日本大学文理学部人文科学研究所）第94号, 2017年9月, pp.83－101。
2. 「人口政策と人口学的慣性」『研究紀要』（日本大学文理学部人文科学研究所）第94号, 2017年9月, pp.83－101。
3. 「人権の根拠をどのように考えるか」『研究紀要』（日本大学文理学部人文科学研究所）第94号, 2017年9月3日, pp. 63-82。

3 「ことわざの魅力とは」

平成29年度人文科学研究所主催公開講演会

- 講演者 北村 孝一（エッセイスト ことわざ研究者）
- 開催日時 平成29年11月30日 00:00～00:00
- 開催場所 文理学部 図書館3階オーバル・ホール

北村でございます。

私は長年、編集や翻訳を生業にしております、ことわざの研究に時間をかけられるようになったのは30年ほど前からでしょうか。その結果として、「ことわざの世界」という授業を学習院大学で担当したり、テレビの「笑っていいとも！」などにちょっと出たこともあります。もともと話をするのがあまり得意ではなかったんですが、少しずつ外へ出る感じになりました。私は決して笑わせるためにお話するというものではありませんが、ことわざ自体が面白い、楽しいということで、笑っていただく分には非常に結構なことだと思いますので、気楽に遠慮なくお笑いください。

「ことわざ」に対して抱くイメージは人それぞれで、ずいぶん違うと思います。なじみがないとか、古くさいとか、よくわからない、あるいは嫌いだという方もいらっしゃるかもしれないし、なんとなく好きだ、面白いなど、さまざまな考えや感じ方があると思います。しかし、「ことわざ」という言葉自体の語感、どこか時代を超えた不思議な響きがあるのではないかと。「ことわざ」という言葉自体を音感でイメージしていただいて、それからそつと目を閉じて考えてみると、多分かつてどこかで聞いた印象深いことわざがあって、それが使われた場面とともに蘇ってくるのではないかと思います。

なるべくあまり理屈っぽい話にならないようにしますが、素朴なところから出発して、ことわざに具体的に触れさせていただくことを考えています。国語辞典で「ことわざ」の項を引きますと、「古くからいいならわされた教訓や風刺を含む短い文句」といった説明が並んでいます。そして、「花より団子」だとか「まかぬ種ははえぬ」といった具体例が挙げられている。こうした説明はもちろん間違いではないんですが、どうも表面的で、「ことわざ」という語の響きやその生命力、影響力、強い言葉で言えば威力、そういうものをうまくとらえきれていないのではないかと思います。

ちょっと硬い言葉で言いますと、「定義」というのがありまして、「ことわざとはかくかくしかじかである」というところから出発することが学問的には多いかと思います。しかし、ことわざというのは現にあるものですから、定義というようなことにあまりとらわれずに、実際のことわざをなるべく味わっていただきたいと考えています。

レジュメも用意しましたが、それ以外に、いまから3600～3800年ぐらい前のシュメール語のことわざというのが多分、世界中で一番古く記録されているものです。そういうものを紹介したり、沖縄のことわざ、英語のことわざ、あるいは江戸時代の遭難船のことなども時間によって取り上げたいと思います。

とはいえ、なりゆきまかせて話していきますと、全体として、どういう話なのか、よくわからないということになりかねませんので、日本語の八つのことわざを具体的に挙げ、それを素材に「ことわざの魅力に迫るヒント」というレジュメをご用意しました。必ずしもこの順番にやるかどうかわかりませんが、後で振り返るときにはプリントをごらんいただければと思います。

最初の1は「わが身をつねって人の痛さを知れ」。この表現は地域や時代によって多少違いがあるんですけども、つねるということも実際に母親がやるような場合もあるかと思います。そういう小さいころからなじみのある、誰もが耳にして育った表現だと思います。つまり、そう言われると、あるいは実際につねられると、まだまだ理解力が発達していない小さな子どもでも、普段なかなか言うことを聞かない子どもたちにも大きな説得力を発揮するものだと思います。「人のふり見てわがふり直せ」なんていうのも、誰にでもわかる、そして納得できるとい

うことが一つの特徴です。

ことわざと似たものに格言がありますが、格言で同じようなことを言うとなると、論語の中に「己の欲せざるところを人に施すなかれ」というのがあります。これもよく知られた表現ですが、ある程度漢文の素養がなければ理解が難しい。もともと聞いたことがあって知っていればわかるんだけど、高校生ぐらいでも初めて聞いたのではなかなかすんなりわからない表現ですね。もちろん漢文の読みくだし文ですから、その点を少し割り引いたとしても、言い方自体が抽象的で、かくあるべしと上から教える、説論する、そういう響きがあります。それに対してことわざのほうは、ごく身近なたとえを用いて、聞く者の内側から共感を引き出して納得させるところに大きな特色があるだろうと思います。

皆さんはことわざをちょっと堅苦しく、教訓と受け取るような、そういう理解や印象もあるだろうと思います。そういうものがないとは申しませんが、決して上から難しい見方をしていくというものではなくて、感覚的にも理解できるものがある。理屈ではなくて内側から共感を引き出すというところに、ことわざの一つ大きな特色があるということです。

(スライド) 早速ですが、シュメール語のことわざをちょっと見ていただきましょう。シュメールというのは現在のイラクあたりの最も古い部類の文明で、都市文明をつくっているという感じなんです。左上は彫像です。有名なのは粘土の板に楔形の文字で文書を残している。右側がその写真ですが、左下はこういう文字が書かれていたものを手書きにしたものです。

(スライド18) この中にことわざが残されていて、具体的な文を挙げてみましょう。私もシュメール語がわかっているわけではなくて、翻訳あるいは英語訳を見てということですが、「楽しいことはビール。悪いこと、いやなことは旅」というのがあります。

当時、すでにビールがあったんですね。ここでは悪いことと訳されていますが、旅というのは学者によっていろんな説がありまして、軍隊の遠征であるという説と、商人が商売のために遠くまで仕入れや販売をする旅という説があります。いずれにせよ、自分の住んでいるところを離れて、それも現在の旅のように行きたくて楽しんでくるのではなくて、過酷な条件の中を行くという感じですね。つまり、4000年ぐらい前の人たちも、実はわれわれと変わらない感覚を持っていたんだな。もちろん条件はいろいろ違いますが、そういうことがことわざによってわかるんですね。

これまで私たちは世界史などでシュメールのことやバビロニアだとかあの辺りのことを学んだり本で読んだりしていましたけれども、一般の民衆がどんなふうに感じてどんな生活をしていたか、なかなかわからなかったわけです。ところが、こういうのを見ますと、もちろんわかりにくい部分も当然あるんですが、「あ、やっぱり人間て、昔から同じようなことを思っていたんだな」ということがわかります。

(スライド3) 「かわいくて彼は結婚 よく考えて離婚」。彼女の美しさで結婚、後でよく考えて離婚する、こういうところも人間味というか、昔の人の感覚がストレートに伝わってくる。

もっとすごいのは、「宮殿にはばかがうじゃうじゃ」。王宮を取り巻いている、その中にいる貴族であるとか官僚であるとかそういった連中はろくなものじゃないと言ってるんですね。そんな時代にそんなことを言って大丈夫なのか、あるいは書き残して大丈夫なのかということになりますが、公然とではないにしても、多分ひそかに言われてはいたんでしょうね。この時代、シュメール語はすでにほぼ死語になっていて、書記が裁判のため、あるいは学問のために記録をつけることはあっても、当時の偉い人たちはまったくシュメール語の文字が読めませんでした。だから平気でこういうことを書き残していたということのようです。

先ほどのビールの例で言いますと、これは室井和男さんが近年、日本語にしてくれて、私なんかもわかりやすく

なったんですが、先ほどの「楽しみはビール、いやなのは旅」、これは音とかかわってしまっていて、ビールは「カシュ」、旅は「カスカル」で、言葉のうえでも調子がいい表現をもうこの時代からことわざは使っていたことがわかります。室井さんは数学史の研究者なんですが、バビロニアの数学を研究しているうちにシュメール語もやらなければいけなくなって、やり始めたらことわざが大変面白いということで研究された方です。

話が別なところに行きましたので戻りましょう。「わが身をつねって人の痛さを知れ」というのは、シュメールほど古くはありませんが、鎌倉時代の13世紀、將軍は形式だけで執権の北条氏が権力を握っていたわけですが、そのナンバー2であった北条重時、極楽寺殿と言われた人物が記録しているものです。

少しだけ紹介しますと、「わが身を少しなりとも切りも突き刺しもしてみるに、苦なきことあるべからず」。つまり、自分の体をちょっとでも切ったり突き刺したりしてみれば、苦痛がないはずがない。「女などのたとえに、身をつみて人の痛さを知ると申す。本説あることなり」と書いています。

当時、男性で身分の高い人たちは漢文系の教養があるわけですが、女性たちはそういう教育を受けていませんから漢文などほとんどわからない。そういう女、子どものたとえ——「たとえ」というのは比喻という意味でもあるし、同時に現代語に直せばことわざという意味に近い表現です。そのたとえに「身をつみて人の痛さを知ると申す」という、「わが身をつねって人の痛さを知れ」とほぼ同じ表現がすでにあったということです。

こういう女性の言っていることに注目したというのは、この時代非常に珍しい、すばらしいものだと思うんですが、私がそういう説明をしても注意を払ってくれる人がなかなかいないんですが、こういうところもことわざの一つの特色だと思います。

2番目にいきまして、「あばたもえくぼ」。これは、本日お聞きいただいている方は、どちらかと言うと私の年代に近い方が多いので、そんなの説明しなくてもわかってるということになるかと思いますが、学生はわからない人も多いんですね。なぜかという、「あばた」という言葉をあまり耳にしない、通用しない時代になっているからです。疱瘡・天然痘痕というのが一番普通の意味で、にぎびの痕もあばたと言ったりしますけれども、種痘をやるもんですから天然痘にかかる人が少なくなりまして、21世紀に入る前、すでに20世紀の間に天然痘は絶滅宣言を出されているんですね。だから、いまの学生がわからないからといって、「こんなこともわからないのか」とは言えないということです。「えくぼ」はさすがにわかると思いますので、「相手に好意を抱き、惚れ込んでしまうと、欠点さえも長所や美点に感じられてしまう」ということのたとえです。恋愛感情を持つと誰にでも働く心理的なメカニズムで、逆に相手に嫌悪感を持つと、日本のことわざで言うと、「坊主憎けりや袈裟まで憎い」という心理が働くことになるわけです。

ことわざという、なんでも道徳的教訓を引き出そうとする人がいらっしゃいますけれども、この表現の場合は教訓とか善悪の判断はあまり関係がなくて、むしろ好きになったら誰にでもそういう心理が働くわけです。ことわざというのは、極めて長い歳月を費やして、何百年というぐらいの単位で人間を観察して、その人間心理を観察したものの結晶と言ってもいいような側面があるということです。しかも、「あばたもえくぼ」の場合は、これ以上ないぐらい簡潔な短い比喻表現になってしまっていて、あばたをえくぼと見る人はまず現実にはあり得ないぐらいの極端な例を引いています。そのことによって、言われたほうも目を覚ますというか、場合によっては「いや、そんなんじゃないよ」と一緒に笑えるような、非常に辛辣なだけけれども、誇張することによってかえってユーモラスな批評になっているのだと思います。

外国にも似たような表現がいっぱいありまして、たとえば「恋は盲目 (Love is blind)」というのはよく知られていますね。中国で言うと、「恋人の眼には西施が見える」というのがあります。西施というのは中国でもナンバー1の美女で、越から呉に送り込まれて王様をたぶらかす大変な美女ですが、そういう極端な例を持ってきて、誰でも恋人となれば相手の女性が西施のような美人に見えるということです。それ以外にもさまざまな国にそれぞれ固

有の表現があって、大体は極端な言い方、誇張表現をして、痛烈、辛辣でもあるし、ユーモラスでもある。それらの中で日本のものは抜群に短く、かつ視覚的に眼に見えるような表現なので、印象に残りやすいと思います。

あばたについては他にも面白い話がありますが、あまり時間を取るといけないので次に移しましょう。3番目に「なくて七癖」がありますが、比喩表現ということで4番を先にします。「灯台もと暗し」です。周囲を明るくする「灯台」のすぐ下がほの暗いことから、身近なこと（もの）ほど案外わからないことのたとえです。

（スライド）これは江戸時代のもですが、文化年間、19世紀の初め、鋏形蕙斎という当時は北斎をものごとと言われた絵師が描いた「諺画苑」という、ことわざを絵にした、辛辣でもあるしユーモラスでもあるような、「略画」という早描きのデッサンのような、ちょっとマンガのようなものを得意とした人です。

左の明かりが「灯台（照明具）」です。お皿に油を入れまして、ちょっと見えにくいんですが、灯がついている。こういう形ですから、油のお皿の部分は影ができて、下が薄暗くなっている。男が何か本を読んでいるようですが、すぐそばにある灯台の下に実はネズミが隠れている。それに気づかない。もちろん現実にはこういうことがあるということではなくて、そういう極端な例を出してことわざを絵解きして、しかも笑える、そういう図です。現在であれば蠟燭の燭台であるとかランプなどにすると、「灯台もと暗し」というのはこういうことをイメージしていたということがわかるかと思います。

海の灯台でいいじゃないか、岬の灯台でいいじゃないかという考え方もあるんですが、ああいう西洋式の灯台というのは、原則として遠くの船に位置の基準を示すわけですね。周りを明るく照らそうという照明のためのものではありませんから、そばが暗いのはあたりまえでして、たとえとしてイメージがちょっとずれてしまうことになります。

ことわざの構造を考えてみますと、三つの層から成るという考え方をします。表面にあるのは、もちろん言葉、言語表現です。一番奥にあるのは論理です。この場合どういうことかということ、近くにあるものほどよくわからないとか、盲点になるというか、そういう一つの論理があるわけですね。遠いものがわからないのは常識的にわかるけれども、実は近くのほうがわからないことがあるんだという論理が一番奥深いところにある。その間に、民俗、あるいは生活文化、民衆の生活と言ってもいいと思いますが、中層があります。この部分は同じ社会の中にとると当然のこととして了解されていますから、わざわざ説明しないわけです。しかし、時代を隔てたり文化や価値観が違う社会になると容易に理解されなくて、全く見落とされることも多いわけです。「灯台」というのはこの場合、民俗というものの一つの典型だろうと思います。

同じようなことわざは世界じゅうあっちこちにあります。一つだけ沖縄の例をご紹介します。「きらまーみいゆしが まちげーみいらん」という、ウチナーグチという沖縄の言葉を、原語をそのままできるだけ近く発音してみました。

（スライド）「きらまー」というのは那覇から40キロぐらいのところにある慶良間諸島です。首里のあたりのちょっと高いところから写した写真ですが、天気も時間帯もよくないのであまりよく見えませんが、なんとなく水平線の彼方にちょっと島が見えているようです。

（スライド）これを図解したものがありますので、ごらんください。ちょっと見えにくいんですが、よく知られているのは渡嘉敷島ですね。40キロぐらい先に20ぐらいの小さい島々がある。これはわかりやすく描いていますが、大体同じところから見た景色とともに図解したものです。

先ほどの「きらまーみいゆしが まちげーみいらん」というのは、「慶良間は見えるけれども、睫毛が見えない」。睫毛（まつげ）のことをマチゲと言うんですね。ウチナーグチ基本は日本語と同じ構造ですが、発音だとか文法が微妙に違って、語彙も基本形はほぼ似ているものが大部分なんですが、発音が少し違って来る。しかし、「海の彼方に遠いところに慶良間は見えるけれども、一番近い自分の睫毛が見えない」ということですから、非常にわかり

やすいことわざですね。

どういうときに言うかという、いろんな例が考えられますけれども、たとえば老眼鏡なんかを額の上に上げて、「おれの眼鏡、どこへやった」と、おじいさんが言います。そういう場面で「きらまーみいゆしが まちげーみいらん」と、孫が言う。そういうかわいい例だけじゃなくて、「自分の子どものことがちゃんとわかってないのか」とか、いろんな例が考えられますけれども、そんな沖縄のことわざを一つ紹介しました。

3に戻りまして、「なくて七癖」。これはもう皆さんよくご存じで、自分では癖などないと思っている人、あるいはあの人は癖がないなと思っていても、はたから見るとさまざまな癖が七つぐらいはあるよというわけです。これはいままでに言ってきた比喻、たとえではありません。それは明らかなんです、だからといって、誰もが本当に癖が七つ以上あるというわけでもないんですね。いろいろ考えても三つぐらいしか見当たらないという場合もあるでしょう。この場合の「七」というのは、具体的に数え上げて七というよりも、象徴的な数と考えるべきではないかと思います。

一つや二つではなく、多くのというのが常識的な理解ですけれども、「七」のつくことわざで、たとえば「七転び八起き」や「親の七光」とか、いろんなことわざがあります。幾つというよりも、「さまざまな」というニュアンスが付随していると思います。「七転び八起き」というのは同じところで七回転ぶわけではなくて、もちろん比喩的な要素がありますから、「転ぶ」といっても実際に転ぶというよりは、何か大変なことが起こるということです。いろんなピンチ、災いがあっても、起き上がって再起していくということです。この場合、「さまざまな」というニュアンスがあって、かつ、これだけを見ると、若干悪い場合も含まれるということになっていくと思います。「親の七光」の場合も、親のおかげをこうむって何かやっているとということになりますが、単におカネを出してくれるというような一つのことだけではなくて、いろいろ親の関係でほかの人が協力的に接してくれるとか、「さまざまな」ということを考えてよいでしょう。

そうすると、もとの「なくて七癖」というのも、そういうふう理解していいんだらうと思います。この表現が実によくできているのは、「なくて」「七癖」と初めの音を「な、…な」と頭韻を揃えて、音韻としても印象に残り記憶しやすいかたちになっています。ことわざというのは非常に短い表現なんですけれども、実はいろいろな表現の仕方、レトリックと言っているのでしょうか、そういうものがありまして、短いけれども決して単純な表現ではないということですね。

ついでに言いますと、ことわざには数が出てくることが多いんですけれども、「石の上にも三年」だとか「岡目八目」など、もちろん具体的な数と全く無関係とは言いませんが、多くの場合、象徴的な意味を帯びているということ、を、ひとつつけ加えておきます。

5番目に移りましょう。「二兎を追うものは一兎をも得ず」、「一兎も得ず」とも言いますが、一度に二匹の兎を追いかけると、結局一匹も捕まえられない。二つの目標を同時に追求しようとする、いずれもうまくいかないということのたとえですね。兎というのは普通、一匹二匹、あるいは古くは一羽二羽とも言ったわけですが、一兎二兎とは普通言いません。ところが、このことわざの場合は、文字で見るとすぐ了解できます。漢字文化の特色が活かされたことわざと言っているでしょう。

なんとなく漢文の読み下し文の口調で、中国から来たのではないかなという印象を持たれるかと思いますが、実はこれは西洋のことわざで、英語ではIf you run after two hares you will catch neither. と言うわけですが、hareは野兎のイメージです。これは英語だけではなく、ヨーロッパの言語には大体共通し、ほぼ同じかたちのことわざがあります。日本に入ってきたのも、英語が先ではなくて、オランダ語とかフランス語の可能性もあるかと思います。

なぜそれが日本に入ってからすっかり定着して、皆さんが日本のもの、あるいは中国のものと思っているかというと、漢文の読み下しのような口調で訳したことによって、翻訳臭さが完全に消えて、非常に受け入れやすくなった。し

かも、明治の前期から小学校の教科書にも取り入れられまして、大正に入るともう東洋のことわざだという意識が出てきます。

その一方で、以前どういうことわざを使っていたかという、「虻蜂取らず」と言っていたわけですね。二つのことをいっぺんにやろうとしても、どうせ虻蜂取らずになるよというようなことを、私なんかは小さいときによく耳にしていました。しかし、いまでは完全に取って代わられまして、滅多に聞かなくなりましたね。なぜ「虻蜂取らず」が衰退したか、非常に面白いテーマですが、時間があれば後で私の考えを言ってみます。

6番に行きまして、「渡る世間に鬼はない」。7番も同じ行に並べましたが、「人を見たら泥棒と思え」。なぜ二つ並べたかという、言ってみれば全く逆のことを言っている、対になるようなことわざなんですね。

「渡る世間に鬼はない」は、いまは橋田壽賀子さんのドラマのほうが有名になって、「渡る世間は鬼ばかり」が本当だと思っている人も結構いるかと思うんですが、橋田さんはこのことわざをいわば逆手にとってタイトルにした。ことわざを打ち返すという言い方をしますが、確かに「鬼はない」と思うときもありますが、「鬼ばかり」と言われると、それもそうだなという気がしますよね。これは橋田さんがご自分で考えたのかもしれませんが、実は橋田さんよりだいぶ前にすでに短編小説のタイトルになっている例があります。つまり、ことわざを打ち返す、否定することは昔から行なわれていたということだけ、記憶しておいてください。

「鬼はない」ほうの話をしますと、世の中というのは意地の悪い人や全く無情な思いやりのない人もいて、同時に、大変な目にあって、なんで私ばかり辛い思いをするのかということもありますけれども、ところがあるとき、思いがけないところでとても親切な人に会ったり、気持ちが通い合うような人に出会うこともあります。そうするとそのとき、「あ、渡る世間には鬼はないんだな」というふうに実感して、感慨をこめて「そう、渡る世間に鬼はないね」というようなことを言います。

これは冷静に考えると、一種の誇張表現ですね。もともとほんとうに鬼がいなければ、逆に鬼はないと感じることもないわけです。しかし、「鬼はない」という言い方自体は性善説で、人間の本性というのは決して悪いものではなくて、いいものだというものに通じる考え方、それを誇張して言う、「渡る世間に鬼はない」ということになります。しかし、その一方で「人を見たら泥棒と思え」というものもあります。油断ならないよというわけです。こちらは性悪説といいますか、人間本来、決して善ではなくて悪いところも持っているものだから、油断してはならないよというふうに傾いている表現だろうと思います。

両方とも誇張表現と言えるんですが、この二つの例以外にも、「虎穴に入らずんば虎子を得ず」と「君子危うきに近寄らず」、これも全く逆の表現ですね。危険を冒さなければ大きな成果は得られないというのと、ちょっとでも危険があれば、君子（立派な人間）は近寄らないものだということ、対になって逆のことを言っています。また、「二度あることは三度ある」と「三度目の正直」もそうですね。二度あることは三度あるからもうだめだということもあるし、今度は三度目だから自分の実力なり運命が発揮されると考えることもできるわけです。こういう相反する二つの表現が両方とも一緒にある、併存するということが、ことわざの世界にはときたまあるわけですね。

こういう矛盾する二つのことわざの存在をどういうふうにとらえたらよいのでしょうか。一つの考え方は、それぞれケースが違う、だから矛盾しないとするものです。「人を見たら泥棒と思え」というのは、全く見ず知らずの他人、初めて行った土地であるとかそういうときに使うんで、一般的なものではない。だから、「人を見たら泥棒と思え」と「渡る世間に鬼はない」は両立する、そういう考え方です。

確かにそれぞれのことわざの用法が全然違うことも事実ですが、しかし、「虎穴に入らずんば虎子を得ず」と「君子危うきに近寄らず」みたいに、同じ場面でどうしたらよいか迷う、どっちのことわざをとるか迷う場合ももちろんあるわけです。そういうふうにと考えると、むしろことわざというのは一つの眼で見るんじゃなくて複眼で見る。昆虫の眼のように、かたまりとして眼は二つかもしれないけれども、その中にさらにいっぱい感じる部分があって、

いろいろなものを違う角度から見ていける、そういう複数の選択肢を用意しているというふうにとらえたほうが妥当なんじゃないかと私は考えています。

何とかの一つ覚えというのがありますね。バカとかアホとか言うわけですけども、何でもかんでもこのことわざでやる、それを座右の銘なんて言ったりしますけれども、そういうのは実あまりことわざらしい発想じゃない。むしろ刻々と変わっていく状況に対応するには複眼的な複数の回答を柔軟に選んで行くことが必要だし、ことわざはそういうものを備えていて、決して一つのものにこだわらないのがことわざじゃなかろうかと思うわけです。

少し急いで最後の項目になりました。これは皆さんがあまり聞いたことがない表現かと思います。「夜目遠目笠の内」。決してポピュラーではありませんが、私好みのものを一つ入れておきました。「夜見ると、遠くから見ると、笠をかぶっているところを見ると、いっそう美しく見える」、大まかに言うとそういう意味です。何が見えるかというと、まあ皆さん想像してみて、大抵は「女性」ですが、男性とした例も小説なんかにあります。なんとなく光景を浮かべてみると、たとえば夜祭なんかで、遠くから見て、しかも顔が見えないように菅笠のようなものをかぶって踊ったりすることがありますね。そうすると、具体的に顔がどうのというよりも、一層美しく感じられるということが大体想像できるかと思います。

このことわざが大変優れていると思うのは、夜目・遠目・笠の内と三つの言葉をただぼんぼんぼんと並べただけで、風情があって、印象深いものがあるわけですね。頼原退蔵さんという明治、大正ぐらいに活躍された京都大学の日本文学の先生で有名な方でしたけれども、この「夜目遠目笠の内」ということわざを引いて、ことわざを「余情の文学」と評したことがあります。余情とは、そこはかとなく感じられる、余韻とかそういうのに通じる言葉ですね。ストレートに「これだぞ」というのではなくて、情感がそこはかとなく伝ってきて、その雰囲気、情緒が漂う、そういう感覚でしょうか。日本人の言語感覚と美意識の粋がここにあるんじゃないかと思います。

伝統的に日本人は、短歌であるとか俳句であるとか、短詩形のものが大好きですけども、それと同じように、ことわざでも情景を非常にシンプルなかたちで描写していくことができる。そういう例として、ことわざが鑑賞に値するレベルまで達することがあるということです。

多分最初は「夜目遠目」ぐらいで「笠の内」はついていなかった言い方が流布して、そのうち「笠の内」が加えられて文芸と言っているレベルになったんだと思います。難しい言い方をすると記載表現という言い方があるんですが、文字による、あるいは印刷する、そういうイメージの文芸とは別に、口承文芸、口伝えの文芸、oral literature というものがありまして、ことわざは口承文芸の中の一つのジャンルであるということです。

しかも、ことわざのほとんどが、誰が言い出したかわからない。無名の人言い出して、それが受け入れられていくというプロセスを辿ってきている。そこが一般の創作であるとか文芸であるとかそういうものの違いで、誰々作であるとか、あるいは著作権があるぞ、そういうものはことわざではないんです。誰かが言い出したには違いないけれども、それを受け入れて使う人がいてはじめてことわざになる。そのプロセスで、つけ加えたり、あるいは調子をよくしたり、どんどん変えていって構わないんです。そういう意味で、文芸といっても著作権が問題になる近代の文芸とは違うジャンルなんだということです。

以上、八つのことわざを入り口にして簡単にコメントを加えて、少し別な例も紹介してきましたが、現在、テレビなどで盛んに行なわれているのは、「こういうことわざはどういう意味なんだ。3 択」という形でよくやりますね。あるいは皆さんも受験勉強をなさったと思いますが、試験問題で「このことわざの意味は何だ」、そういうやり方が非常に流布してしまっていて、私が学習院大学で教えていたころ、「どういうふうなことわざを覚えたか」というアンケートをとったり学生にいろいろ聞いてみると、やっぱり受験勉強というのがかかなり多いですね。

そういうふうになったことについてはいろいろ原因が考えられるんですが、まず言うておかなければいけないの

は、ことわざというのはことわざの本文、テキストがあります。この例だったら「夜目遠目笠の内」というのがテキストにあたるわけですが、それと、「夜、遠くから、笠の中という、見えないところにあるものが美しく感じられる」。「女性」という言葉を入れてもまあまあいいかと思いますが、そういうふうなものを意味とすると、全てそれをセットで理解しようとしているわけですね。

しかし、前に三層構造の説明をしましたけれども、ことわざというのは、表面の言葉、つまり言語表現と、先ほど論理として説明しました意味と言ってもいいでしょうが、その二つの要素だけで成立しているのではなくて、間に、民俗といいますか、生活文化のようなものがある。そういう構造をしていて、しかも、いつでも使っていていいわけではなくて、ふさわしい場合に、適切なタイミングで使うという要素があります。そのところがうまく身につかないで、ことわざを誤用すると非常にみっともないですね。知ったかぶりで間違った使い方をするというのはみっともないわけですが、ことわざを理屈だけでなく、感覚的にも身につけることが難しい時代になってきたという感想だけちょっと述べておきます。テキストと意味のセットだけではなく言葉を味わってみることが非常に大切だということを述べて、一応一区切りとしたいと思います。

皆さんの質問があれば、質問に答えるかたちで、また続きをお話ししましょう。

（講演後の質疑応答）

質問 いろはがたのまず最初に出てくる「犬も歩けば棒に当たる」、これはどういうふうに考えたらよろしいのか、教えていただきたい。

北村 これは大変難しい、まだ大いに議論のあることわざでして、一般の国語辞典だとかに書かれているのは、「犬も歩けば」というのは比喻ですから、「用もないのにぶらぶら出歩いたりすると、災いが来る。棒で打たれるような災いにぶつかる」というようなことを書いている辞典が多いですね。

しかし、ことわざの意味を決めるうえで、実際にどういう場面で使われているか、用例を検討することが大事です。そうしますと、不幸説と言いますけれども、たまたま不幸に出会うような用例もあるんですが、江戸時代でもよいことに当たると言うことが多くて、近代では、ほとんど実際の用例が幸運にぶつかったときに使われています。

たとえば私が使った例で言うと、神保町に古本屋がいっぱいありますね。いろいろあさっていると、カネもないのになんとなく見ていたら、思いがけず幕末の版画を見つけたことがあります。そういうときに「犬も歩けば」と言ったりします。

私の例では物足りないでしょうからもうちょっと言いますと、半七捕物帳なんかでは、半七が初めて事件を解決したときに、そのときは出発点ですから三下みたいなもので、岡っ引きの末端でまだ全然認められていない時代ですから、親分に「おまえも大したやつだ。犬も歩けば棒に当たると言うけど、大したヤマを見つけたな」、そういうことで使われています。そういう例が江戸時代からいろいろありまして、一つは、「活動的にいろいろやっていると、そのうちいい目にも合う」、そういう感じがあります。

それから「犬」という言葉を使うのは、大体想像がつくと思いますけれども、下層の人間ということを想定しているわけです。話が横道にそれますが、徳川家康はかなりことわざ好きだったようで、侍を召し抱えるときに、「犬犬三年人一生。人人三年犬一生」、だから気をつけろと言ったと言われています。つまり、家康に召し抱えられれば当然社会的な地位が一挙に上がるわけですが、だからといって一人前のつもりで「人人三年」、いっぱしのつもりで、派手というか、それなりの格式を持った生活をいきなりしようとしたら、三年もやっているうちにとんでもないことになって、一生うだつが上がらなくなるぞ。逆に「犬犬三年人一生」というのは、三年ぐらい質素に暮らし辛抱していれば、その後は立派な侍としてちゃんとやっていけるぞと言っています。そういう下層の人間を犬と見るという意識はずーっと古くからあったと思います。

「犬も歩けば棒に当たる」というのが非常に複雑なのは、それをむしろ自分たちが肯定して、われわれは犬かもしれないけれども、しかしやっているうちにはちゃんといいこともあるんだ。それを決して上から目線で否定的なことわざとしてとらえるのではなくて、江戸のいろはかるたをつくる頃までに、視点を逆転させたんですね。

テキストだけを見ると、どう考えてもこれは棒で打たれるんだから不幸だと言う人がインテリには多い。しかし、ちゃんと用法を見て、そこに複雑な屈折した思いがあるということを見れば、むしろ表面は犬ということのを認めながら、実は内心、「これだけのことを、単なる幸運じゃなく、しっかりやったぞ」というぐらいの意識まで出てくるんですね。

実際江戸時代のいろはかるたを見ると、犬棒かるたと言われるようにこのことわざを一番上に持ってきて、しかも赤い地色にするんです。赤というのはめでたい色で、いろはかるたでも1枚だけ、「犬も歩けば」だけです。それはどういうことかということ、土農工商と言いますが、決して地位も高くない、士（さむらい）ではない庶民が、江戸の庶民の心意気として「犬も歩けば棒に当たる」という札を特別なものとして選び取って、それをみんなが支持してというのが、このことわざだと思います。

質問 最後に説明していただきました、クイズ番組とか受験とかで正しい意味というふうになっていくと、本来のことわざの姿じゃないんじゃないかみたいなお話だったんですけども、これからことわざというのはだんだん固定されて、その生命を終えていくということになっていくんでしょうか。

北村 まずなぜそんな状況になってしまったかということが一つ大事だと思うんですが、戦後1950年前後から始まった高度成長の時代に、コミュニティというのは事実上、どんどん崩壊していったわけですね。家庭も、三代いて、いろんな人と交流していく家庭というのではなくて、マイホームというか、団地住まいで親子だけの世界というのが標準的な社会になってきて、いろはかるたで遊ばないんですね。もちろんことわざを生きたかたちで使っている場面に接することが減多にないわけです。

少し私の思い出を言うと、私は戦後すぐの生まれで、石炭屋だったんですが、三代代はもちろん、いろんな働く人たちもいて、中国からの引き揚げ者も蔵のほうに住んでいるような時代で、実に雑多な人たちと子どものころから接するわけです。お店は私は子どものころあまり関係ないんですけども、中で働いている当時の言葉で言えば女中さん、お手伝いさんみたいな人もいりし、親戚の人を預かったり、いろいろあります。

そういう中で、いろいろな立場の人がいろいろなことを言って、それをなんとなく耳にしていって。何か下手な言いわけをすると、「一事が万事」と言われたり、痛烈なことを言ってちょっと気の毒な場合もありますけれども、「魚心あれば水心」とか、子どもは何のことだか全然わかりませんよね。でもまあ、男女の場合もあるし、いろいろな人間関係で、さらに場合によっては商売関係の取引にも使われる。そういうものもなんとなくいろいろ聞いていて自然に、「あ、こういう場合に使われるんだ」と、そのときわかる場合もあるし、ずいぶんおとなになってから「えーっ、そういうことだったのか」と思うこともあるわけです。

非常に不思議に思っていて、「ああ、わかった」と思ったのは、たとえば「据え膳食わぬは男の恥」というのは誰も説明なんかしないんだけど、だんだん大きくなってくると、「あ、あのときああいうことを言ってたな」というのはわかるわけです。

そういうのがいろんなことわざの伝承をずーっと支えていて、生き生きした使い方ができるし、こういう場合は使うもんじゃないよということもわかる。子どもが聞くと、おばあさんたちが子どもにわかるようにある程度教えてくれる。「そんなこと子どもが言うもんじゃない」と言われるとか、そういう伝承の仕方があったんですね。

それが途絶えて、クイズになったり試験の問題になったり受験勉強になったりする。そうすると、ことわざの文化として大事な部分がまるっきり抜けてしまいますから、だんだん伝承されなくなってくる。

しかし、私が大学で授業をしていて、大学で単位を取ったからといって何もいいことがあるわけじゃないんです

けれども、ことわざを教養科目の一つとして自由に選択できるというので、最初用意されたのは50～60人の教室だったんですが、「世界じゅうでもこういう授業は滅多にないよ」というようなことをシラバスに書いたら、200人を超えるようなことがすぐ出てきた。毎年そういう感じで、200人超えて300人という年もあって、さすがにそれは教室を替えるのもやっかいなので、意地悪ではないけれども、少し受講生が減るような話をしたりして、やっと200人前後にして続けるようなことがありまして、実は若者も言葉の生きた使い方というものには興味があって、ことわざの魅力というものにもどこかで惹かれている。そういうところがあるんじゃないかなと感じています。

何年ぐらい前ですかね、ゆとり教育とかそういうことを言い出したころだと思いますが、文部省なんかも総合教育に少しことわざを取り入れようという話がありました。多少はやったと思いますけれども、失礼ながら、現在小学校で教える先生たちがもうすでに伝承から途切れているということ、文部省の意識で教科書をつくる人たちも「故事・ことわざ」という感じで、中国の故事を中心に教えて、「五十歩百歩」だとかそういうのと同じように考えてことわざを教えようとしている。ところが、先ほど言ったように、日本のことわざの99%は直接歴史にかかわりがないし、誰が言ったとかそういうことも関係ない。そういうものであるということを知らずに、まあ伝統的なものだから取り上げましょうとやっているから、結局クイズと変わらないことをやってお茶を濁しているということではないかと思います。

私たち、ことわざを研究している者が研究会から始めて、現在は学会があるんですが、いろはかるたを復活させようと少し試みています。1年に1回、「いろはかるたを楽しむ会」を都立公園の集会室などで20～30人規模でやっています。そうすると小さい子はとっても興味を持って生き生きと遊びます。それがすぐ広がってどうこうということではありませんが、ことわざの一つの入り口として、いろはかるたというのは非常に有効で、文字も覚えられます。考えてみると、元々ことわざのロジックというのは非常に視覚的・絵画的です。先ほど絵を見ていただいたのは、ことわざの論理というのはいわゆる理詰めの論理ではなくて、五感と言ってもよいかもしれませんが、目で見ても、あるいは情景を思い浮かべて納得する。「なるほど。そうだ。よく言った」、そういう感じで身につけていくものではないかと思うんですね。

最初に言ったように、「ことわざ」という言葉はちょっと不思議な感じがするんですけども、まあ言われてみるとなるほどという感じを表す言葉と考えてみましょう。ことわざの「こと」は言葉の「言」じゃないかと思いますが、はっきり分析できない言葉で包括しているのではないかと思うんです。「わざ」は技術だという考え方もあるんですけども、狭い意味の技術、テクニックのようなものではなくて、神業とか仕業とかそういう「わざ」、どこか不思議な力があるものという感じじゃなからうかと思えます。

質問 「二度あることは三度ある」というのは、どちらかと言うと悪いニュアンスとおっしゃったんですけども、私は五分五分ぐらいに、いい場合も悪い場合も使ってみましたけど、間違いでしょうか。

北村 いえ、間違いということではないです。

質問 もう一つは、いまの若い人の言葉を聞いていると、「全然いいね」という使い方をされるんです。「全然」というと否定形が来るんじゃないかなと思うんですけど、定着しちゃったので、そのまま覚えたほうがいいのかと思うんですけども、先生はどういうふうにお考えでしょうか。

北村 「二度あることは三度ある」から言いますと、伝統的な使い方から言うと、どちらかと言うと悪いことという感じで、たとえば食事のとき、誤ってお醤油をこぼしちゃった。もう一回誰かがやったりすると、二度あることは三度あるだから、わざとほんのちょっとお皿にたらし難を避けるというようなことが行なわれていました。

もっと極端な例で言うと、ハーン（小泉八雲）が伝えていることなんですけれども、同じ系統の家で同じ年に二人亡くなった場合、二度あることは三度あるという意味で、人形をお墓に葬って三度目の不幸を避けるようなこともあったようです。

つまり、だんだん近代人になると、不幸なことを恐れるという感覚よりは、なんとなく三度目にいいことがあるかなという感覚も出てきて、いいことも三度あるかという感じで使われて、それはそれでよいと思います。決して悪いことではないし、間違いで排除すべきとは思いますが、ピンチというか危機的なものに対する対処の仕方として、ことわざがある程度そういう側面を持っていることも確かです。そんなこと滅多にないよという場合でも、自分に降りかかってくると思えば、二度あることは三度あるだからと用心して避けるわけですね。

「全然いい」という用法については、私は特に考えを持っているわけではありませんが、口語的なものはいつの時代でもどんどん変わっていく面があります。最近よく言われるのは「ヤバイ」という、もともとあまり人前で言うような言葉でなかった、危ないとか大変だとか危険だとかいう感じだったのを、逆にすごくいい、意識するとすばらしい、そういう場合にも転用するようになってきて、最初はわざと意識的に言う一種の言葉遊びだったものがあたりまえに使われて、もともとやや素性の怪しい危ないというニュアンスがあったことがもう忘れられちゃうようなことになってきていますね。長い眼で見るとそういうことはよくあって、一時の流行で終わることもよくありますから、あまり神経質にならなくてもよいかと思います。

「銀ブラ」なんて言葉も、最初は「銀座のぶら」というような言い方をしていて、非常に悪い意味で使っていたようです。それを知らないで、なんとなくぶらぶらして楽しい使い方が主流になったら、銀座だけでなく、いろんなところで「なんとかブラ」というような使い方をされるようになった。それはそれで、認めざるをえないでしょう。言葉の場合は、誰かが決めてけしからんということで解決するわけではないでしょう。本来はこうですよと言って、それでも変わっていくものは止めようがないのかなという感じがします。

司会 それでは時間になりましたので、ここで講演会は終了させていただきたいと思います。

どうも先生、ありがとうございました（拍手）。

4-1 科学研究費助成事業（文部科学省・日本学術振興会）

【哲学科】

高橋陽一郎 基盤研究（B）（一般）
「ショーペンハウアー研究の新世紀へー主著刊行200周年を機縁とした国際共同研究」

【史学科】

山本孝文 学術図書
「古代朝鮮の国家体制と考古学」

【国文学科】

高 榮蘭 基盤研究（C）（一般）
「冷戦アジアの「革命」とベトナム戦争における「日本語」の役割に関する研究」
武内佳代 基盤研究（C）（一般）
「大岡昇平と女性読者の関係についての総合的研究」
田中ゆかり 基盤研究（C）（一般）
「ヴァーチャル方言研究の基盤形成と展開」
鮮于 媚 若手研究（B）
「聴知覚特性を考慮した日本語学習者の促音挿入およびバイアスの原因究明」
林 直樹 若手研究（B）
「首都圏東部域音調の多角的研究」

【中国語中国文学科】

小浜正子 基盤研究（B）（一般）
「東アジアにおける家族とセクシャリティの変容に関する比較史的研究」
神谷まり子 基盤研究（C）（一般）
「一九二〇年代上海の通俗メディアにみる娼妓観」
三澤真美恵 基盤研究（C）（一般）
「「1945年前後」「1949年前後」の台湾映画統制に関する基礎研究」
渡邊登紀 若手研究（B）
「晋宋における寒門文人の文学活動の研究」

【英文学科】

保坂道雄 基盤研究（C）（一般）
「BE動詞の文法化」

【ドイツ文学科】

初見 基 基盤研究（C）（一般）
「現代ドイツ文化における戦後意識の継承と変容」

【社会学科】

後藤範章 基盤研究（B）（一般）

「交通インパクトの社会的効果に関する研究—量と質とビジュアルの混合研究法—」

菅野 剛 基盤研究（C）（一般）

「社会階層と社会的ネットワークに関する地域比較分析」

中村英代 基盤研究（C）（一般）

「依存問題を取り巻く社会環境と依存問題への支援に関する社会学的考察」

好井裕明 基盤研究（C）（一般）

「産業遺産の記憶と“生きられた”生活世界の社会学：足尾の生活文化史聞き取りから」

久保田裕之 若手研究（B）

「ホームシェアの国際比較による世代間協同居住の理論化」

後藤美緒 研究活動スタート支援

「上方漫才からみる戦後日本における大衆と知識人に関する社会学的研究」

【社会福祉学科】

山田祐子 基盤研究（C）（一般）

「高齢者虐待による死亡事例等の評価と検証にかかわる体制整備に関する研究」

【教育学科】

広田照幸 基盤研究（A）（一般）

「戦後日本における政治・経済変動が教育労働運動に与えた影響に関する研究」

北野秋男 基盤研究（B）（一般）

「テスト・ガバナンスの基盤形成における構造的比較研究」

末富 芳 基盤研究（B）（一般）

「単位学校を超えた教育資源活用の実証的研究—学校横断型人的リソースを中心に—」

挑戦的萌芽研究

「教育困難高校における子どもの貧困対策の開発—大阪・東京の高校プラットフォーム化—」

小野雅章 基盤研究（C）（一般）

「戦後教育における学校儀式と国旗・国歌に関する基礎的研究」

下司 晶 基盤研究（C）（一般）

「戦後教育学における「近代」評価の再検討—1960年代初頭までの梅根悟を中心に—」

【体育学科】

青山清英 基盤研究（C）（一般）

「帰納的理論構築による測定スポーツのコーチング学の体系化」

大嶽真人 基盤研究（C）（一般）

「ブラインドサッカーにおける動作特性に着目した探索的研究」

高橋正則 基盤研究（C）（一般）

「スポーツ選手のマイクロサッカードを指標とした予測反応事態における潜在的注意」

長澤純一 基盤研究（C）（一般）

「心拍ゆらぎを指標とした登山に対する強さの解析」

水上博司 基盤研究（C）（一般）

「総合型クラブの育成支援を担う複数の民間スポーツ組織の相補的關係性が創出する公共圏」

【心理学科】

巖島行雄 基盤研究（B）（一般）

「目撃記憶形成の探求：一瞥に人は何を見て何を覚えるのか？」

岡 隆 基盤研究（B）（一般）

「SNS利用のリスク認知に関する教育社会心理学的解明と教材開発への応用」

坂本真士 基盤研究（B）（一般）

「「新型うつ」の予防と治療に関する心理学および精神医学的研究」

4-2 日本大学学術研究助成金

【史学科】

加藤直人 総合研究

「東アジアにおける都市形成プロセスの実態解明とそのデジタル化をめぐる研究」

4-3 文理学部個人研究費及び付置研究所所員個人研究費

【哲学科】

- 飯田 隆 「日本語における量化についての形式意味論的研究」
嘉吉純夫 「古代ギリシアの思想家たちの老年観」
久保光志 「コスモスから文明社会へ」
合田秀行 「無著の著作問題に関連する比較研究」
小林紀由 「正典と神観の変換に関する研究」
高橋陽一郎 「ショーペンハウアー、ニーチェとドイツ表現主義」
丹治信春 「意識・自由・思考」
永井 均 「無内包の現実性について－「私」と「今」以外の場合」
古田智久 「倫理的規範の正当化について」
三平正明 「プライアーの時制論理とその哲学」

【史学科】

- 上保國良 「京都の公家と江戸の武家」
大塚英明 「文化財の保存と活用」
粕谷 元 「近代カリフ制に関する研究」
加藤直人 「清代の文書史料に関する総合的研究」
坂口 明 「ローマ帝国の都市」
関 幸彦 「日本史上の史実と観念」
土屋好古 「ロシア第一次革命と国会体制の成立に関する研究」
中村順昭 「天平期政治史の研究」
浜田晋介 「埼玉県南中野遺跡の総合研究」
古川隆久 「日本近現代史像の再検討」
松重充浩 「戦前期ハルビン都市形成の歴史的特徴解明に関する基礎的研究」
森ありさ 「近現代史における戦争・紛争とコメモレーションの比較研究」
山本孝文 「東アジアの古代国家形成期における相互交流の考古学的研究」
堀川 徹 「日本古代における地域支配の研究」
山本興一郎 「古代ローマにおける表象利用と政治」

【国文学科】

- 阿部好臣 「『源氏物語』の研究 作品世界の指標を巡って」
荻野綱男 「ウェブをコーパスとして活用する日本語研究」
梶川信行 「『万葉集』の研究」
久米依子 「近現代における少年少女向け文学の特質と諸問題の研究」
高 榮蘭 「帝国日本の空間フレームと書物の移動」
紅野謙介 「日本近現代文学の生産と受容の研究」
佐藤至子 「日本近世文学をめぐる諸問題についての研究」
鈴木功真 「中世漢和辞書に於ける和訓の史的変遷一試論」
鈴木晴彦 「日本近世書学の研究」

- 竹下義人 「伊賀俳壇における芭蕉追善の諸相」
 田中ゆかり 「日本語と日本語社会の実態把握」
 藤平 泉 「鎌倉初期歌壇の研究」
 武内佳代 「三島由紀夫の文芸創作における女性誌の位置づけに関する研究」
 鮮于 媚 「第二言語としての日本語の習得・学習に関する総合的研究」
 高橋優美穂 「足利義教を中心とした室町殿の文学活動の研究」
 鈴木雅裕 「『古事記』を中心とした上代文学の作品分析ならびに国語教科書における上代文学の教材化の研究」

【中国語中国文化学科】

- 青木 隆 「中国清朝ムスリム学者・劉智のコスモロジー（その5）」
 小浜正子 「中華人民共和国の成立とジェンダー秩序の変容に関する研究」
 舘野正美 「加古角洲『吐方撮要』攷—江戸時代における吐方の研究—」
 張 麗群 「中国語教育の立場から見る数量表現」
 平井和之 「中国語教育における直接構成素分析導入の効果について」
 三澤真美恵 「台湾の移行期正義とドキュメンタリー映画」
 山口 守 「華語語系文学の基礎的研究」
 大川謙作 「チベット社会史像の再構築」
 神谷まり子 「民国初期における社会小説の研究」
 渡邊登紀 「晋宋期の文学および文学集団の形成過程の解明」
 片倉健博 「中国明清戯曲における三国志故事の展開について」

【英文学科】

- 関田朋子 「Victoria 朝社会問題小説とジャーナリズム」
 吉良文孝 「英語 ing 形式の意味」
 高橋利明 「エデンの探究——ホーソーンの平衡感覚と『大理石の牧神』」
 塚本 聡 「英語史的コーパスを用いた英語発達史の研究」
 野呂有子 「① 17世紀叙事詩の John Milton の総合的研究—その12
 ② William Shakespeare の総合的研究—その11
 ③アーサー王伝説の総合的研究—その6
 ④より良い授業展開と教材開発のための総合的研究—その1」
 保坂道雄 「言語変化と言語進化」
 マルズ・チルトン 「The Humanities in Cross-Cultural, Multilingual Contexts」
 飯田啓治朗 「Joseph Conrad の *Almayer's Folly* の精神分析学的研究」
 一條祐哉 「事象命題と非事象命題の認知言語学的考察」
 隅田朗彦 「第二言語習得プロセスを重視した効率的な英語ライティング学習指導法，学習者の動機づけを考慮した、四技能スキル習得のための学習法」
 マウロ・ロ・ディオ 「The classical tradition on English literature」
 リチャード・キアラ 「Second Language Acquisition and English as a Second Language Pedagogy」
 桶田由衣 「John Milton (1608-74) 作の仮面劇 *A Mask* (1634) に関する総合的研究」

佐藤健児 「Be about to に関する記述的研究」

【ドイツ文学科】

安達信明 「言語類型論とその関連領域の研究 / 近現代 (19世紀・20世紀) のドイツ音楽劇研究」

板倉 歌 「モダリティ研究と言語行動研究」

大羅志保子 「イゲボルク・バッハマン並びにドイツ語圏現代文学研究」

初見 基 「現代ドイツにおける「記憶文化」形成の検証」

保阪靖人 「ドイツ語の動詞の意味と項構造との関係について」

森田 悟 「E.T.A. ホフマンと時代」

エーリッヒ・モゼン 「Sprache und Zeit in der erzählenden deutschen Literatur von Fontane bis Sebald」

関口なほ子 「ドイツ語圏の女性作家・作品研究－1920-30年代を中心に」

シュテファニー・イーガー 「"Hikikomori" als Thema der Literatur」

跡守美音 「ドイツ語圏の現代文学について」

勅使川原聖子 「ギュンター・グラス研究と現代文学の手法について」

【社会学科】

犬飼裕一 「社会学思想の展開と自己言及社会：理論社会学のさらなる展開」

後藤範章 「視覚/映像社会学とビジュアル・リサーチ・メソッドに関する研究 (11)」

菅野 剛 「社会階層と社会的ネットワークに関する実証的研究」

立道信吾 「日本の企業と雇用システムの社会学的分析」

仲川秀樹 「ローカル百貨店と中心市街地活性化の社会学的研究」

中瀬剛丸 「インターネット上の情報発信と受容に関する実証的な研究」

中森広道 「災害ならびに情報・メディアに関する調査研究」

山本質素 「日本社会とアジア農村における共同慣行の特質についての研究」

好井裕明 「被爆表象のメディア社会学的研究 (6)：エスノメソドロギー的な映像解説・言説解説を中心として」

久保田裕之 「同性パートナーによる共同生活実践と居住政策の国際比較」

中村英代 「「弱い自己」を語り合う共同体の社会学的考察」

松橋達矢 「「新線／新駅」設置を媒介とした都市成長政治に関する社会学的研究」

山北輝裕 「ストリートの現在・社会史」

後藤美緒 「〈上方〉放送文化に関する歴史社会学的研究」

徳山弓恵 「三木清のヴェーバー理解についての研究」

【社会福祉学科】

上之園佳子 「地域包括ケアとアクティブ・エイジング：認知症ケアからの研究」

井上 仁 「子ども権利基盤に関する研究」

今泉礼右 「わが国における貧困現象と社会的排除の構造についての研究」

川村宣輝 「障害者雇用における職場定着の現状と課題に関する研究 (障害者の就労の質について考える)」

諏訪 徹 「ボランティアな地域福祉活動の生成と変容に関する研究」

山田祐子 「高齢者虐待対応ソーシャルワークモデルの発展と上級認定社会福祉士研修プログラムの評価」

- 金子絵里乃 「ソーシャルワーカーが直面する倫理的ジレンマ」
 後藤広史 「ホームレス状態にある人々の類型に基づく支援システムの構築に関する研究」
 鴨澤小織 「メンタルヘルスの支援の課題：ジェンダーとケアの視点から」
 張 珉榮 「高齢者福祉政策における認知高齢者支援のあり方に関する研究」

【教育学科】

- 小笠原喜康 「関係論的教育認識論の構築 2」
 小野雅章 「学校所蔵文書からみる地域と学校との関係史研究」
 北野秋男 「日米の学力テスト体制の構造研究」
 下司 晶 「戦後教育学における「近代」評価の再検討」
 佐藤晴雄 「コミュニティ・スクールに関する研究(6)」
 末富 芳 「教育費の公私負担に関する研究」
 杉森知也 「戦前期日本の中等教員養成-満鉄附属地における実態に着目して-」
 関川悦雄 「ブーバーの教育思想の研究」
 羽田積男 「カリフォルニア大学マーセッド校の10年 ―研究大学への過程に関する研究―」
 平野英俊 「公立図書館における図書館員の専門性の在り方に関する研究」
 広田照幸 「戦後日本における教育改革イデオロギーの研究」
 渡部 淳 「教師研修のシステムおよび教材開発に関する研究」
 松岡侑介 「教育における動機づけと道徳の原理(3) ―ジョン・デューイの理論を手がかりに―」
 内海美由紀 「博物館展示解釈における構成主義の影響」

【体育学科】

- 青山清英 「コーチング学の体系化に関する文献的研究」
 大嶽真人 「ブラインドサッカーにおけるGKからの攻撃パターンに関する研究」
 櫛 英彦 「合宿トレーニングが細胞性免疫能に与える影響」
 久保木優 「剣道競技者の認知特性と熟練度に関する研究」
 鈴木 理 「教師教育プログラムにおける教材研究の試行的実践」
 高橋正則 「スポーツ場面における眼球運動の検討」
 長澤純一 「低酸素ストレスと心拍変動」
 野口智博 「レジスタンス・トレーニングおよび機能性向上のためのトレーニングと競技成績・競技パフォーマンスの関係」
 水落文夫 「スポーツ競技における心理的なストレス反応に対応する感情尺度の妥当性検討」
 水上博司 「民間スポーツ統括組織の施策形成における市民的公共圏に関する研究」
 水島宏一 「体操競技における新ルール対応のための演技構成に関する研究」
 小山貴之 「スポーツ外傷・障害後の疼痛閾値変化に関する研究」
 金野 潤 「男子柔道選手における競技成績の成長における推移―少年期と青年期との比較より―」
 松本 恵 「大学生陸上競技アスリートへのスポーツ栄養サポートの実践と貧血改善について」
 伊佐野龍司 「球技における運動空間・時間の構成過程」
 城間修平 「バスケットボールにおけるプレイヤーの実践知について―一流バスケットボール選手の「語り」を手が

かりに一」

村上幸史 「陸上競技投てき種目における動感の発達過程に関する研究」

吉田明子 「教員養成課程におけるダンス創作の躰きに関する研究」

川井良介 「選択反応課題における剣道競技者の脳内情報処理過程について一左手の重要性に着目して一」

【心理学科】

巖島行雄 「登山の心理学：地図読みの認知心理学：眼球運動を指標にして」

岡 隆 「ステレオタイプ抑制の逆説的効果に関する研究」

岡田和久 「関連性理論を援用した電話相談の質問技法」

坂本真士 「「新型うつ」に関する臨床社会心理学的研究（1）」

津川律子 「対人援助職における倫理及び関連法律」

内藤佳津雄 「高齢者の認知記憶機能と主観的QOLとの関係」

羽生和紀 「生活環境に対する環境心理学的研究（8）」

横田正夫 「映像における衣食住の表現の心理学的検討」

依田麻子 「生理的指標の情動研究における留意点の検討」

菊島勝也 「子育て支援グループが参加者にとってどのように意味づけられるか」

齋藤慶典 「感覚刺激によるリラクゼーション効果についての生理心理学的検討 - 触覚刺激による効果 -」

山口義枝 「対人交流における共感不全がつくる否定的影響」

北村世都 「高齢者の心理的援助に関する研究3」

望月正哉 「身体基盤性を考慮した概念処理過程の検討」

狩野武道 「大学生における無気力の心理学的研究」

【総合文化研究室】

石川晃司 「吉本隆明とアジア」

大塚友美 「アセアン諸国の経済と社会」

椎名正博 「Tancredi 研究一ヴォルテールの戯曲とロッシーニのオペラー」

小林和歌子 「Theory and Practice for Effective Listening Activities - An Action Research-」

ライオン・グレイズ 「オーラル・リピーテッド・リーディングと第二言語の読みにおける流暢さの発達との関係」

4-4 その他の助成金等

【教育学科】

広田照幸 学習院大学

「人文・社会科学教育の内容と方法のイノベーションに関する国際比較研究」

【体育学科】

長澤純一 富士山ツーリズム御殿場実行委員会

「御殿場口新五合目活用に関する調査研究」

松本 恵 株式会社 林原

「L-アスコルビン酸2-グルコシドの女性アスリートにおける鉄吸収促進作用の検証」

【心理学科】

内藤佳津雄 社会福祉法人浴風会 認知症介護研究・研修東京センター

「BPSDの解決につなげる各種評価法と、BPSDの包括的予防・治療指針の開発～笑顔で穏やかな生活を支えるポジティブケア」

5. 研究員受入

上席客員研究員

1. 氏 名	Earl, H. Kinmonth
2. 現 職	
3. 期 間	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
4. 研究プロジェクト名	戦後日本における教育改革の歴史的変容に関する研究
5. 受 入 教 員	広田 照幸（教育学科）

客員研究員

1. 氏 名	土屋 弥生
2. 現 職	聖パウロ学園高等学校通信制課程（エンカレッジコース）教頭
3. 期 間	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
4. 研究プロジェクト名	教職インターンシップにおける実践的指導力の育成に関する研究
5. 受 入 教 員	青山 清英（体育学科）
1. 氏 名	王 穎
2. 現 職	北京心之怡然咨询顾问有限公司研究部
3. 期 間	平成 29 年 7 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
4. 研究プロジェクト名	転換期における日本の会社員の心理状況およびストレス要因
5. 受 入 教 員	岡 隆（心理学科）
1. 氏 名	松村 香
2. 現 職	国際医療福祉大学小田原保険医療学部看護学科精神看護学専任講師
3. 期 間	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
4. 研究プロジェクト名	児童養護施設における人権侵害予防に関する研究
5. 受 入 教 員	岡 隆（心理学科）
1. 氏 名	山本 真菜
2. 現 職	大妻女子大学人間関係学部社会・臨床心理学専攻助手
3. 期 間	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
4. 研究プロジェクト名	思考抑制による逆説的効果に関する研究
5. 受 入 教 員	岡 隆（心理学科）
1. 氏 名	宅 香菜子
2. 現 職	アメリカ合衆国ミシガン州オークランド大学心理学部
3. 期 間	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
4. 研究プロジェクト名	大学生の考え方や性格とストレスに関する研究
5. 受 入 教 員	坂本 真士（心理学科）
1. 氏 名	滑川 瑞穂
2. 現 職	帝京平成大学専門職大学院
3. 期 間	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
4. 研究プロジェクト名	抑うつにみられる認知障害の特徴についての検討
5. 受 入 教 員	横田 正夫（心理学科）

研究員

1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	田澤 慎也 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 非反省的自己意識研究による無神論的実存主義擁護 飯田 隆（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	林 晃紀 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 ウィトゲンシュタインの治療的哲学に関する考察 飯田 隆（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	ブロンズ 石橋 ラヨス 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 遠近法主義についての比較哲学的研究 飯田 隆（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	関谷 雄磨 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 幸福主義および快樂主義の諸相とその限界 嘉吉 純夫（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	中根 宙志 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 倫理的意思決定について 丹治 信春（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	山田 浩司 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 因果の向きと時間の向きに関する考察 丹治 信春（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	赤池 敬 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 ヒュームと現代道徳理論の統合 永井 均（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	清水 将吾 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 主観性と主観概念の研究 永井 均（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	成田 正人 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 帰納を巡る一般化の正当性と未来の経験の問題 永井 均（哲学科）

1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	真鍋 真悟 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 ウィトゲンシュタイン研究 永井 均（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	多々良 圭介 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 18 ～ 20 世紀における中国医学・行政史料の整理 加藤 直人（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	関屋 雄一 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 東国武士団の諸相 関 幸彦（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	千葉 篤志 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 東国武士団の諸相 関 幸彦（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	吉田 修太郎 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 日本古代の異文化交流に関する研究 中村 順昭（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	青木 学 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	荒船 俊太郎 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 明治大正期の山県有朋と「元老制」の形成・変容 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	小形 利彦 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	笠原 亮介 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	佐藤 宏治 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）

1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	椎名 則明 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	多比羅 充 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	中田 崇 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	朴 敬玉 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 20 世紀後半期の東アジアにおける稲作農業と農村社会の変貌 松重 充浩（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	堀本 嘉子 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 国語科における「戦争」 紅野 謙介（国文学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	中野 綾子 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 日本近代文学における戦場の読書行為の総合的研究 紅野 謙介（国文学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	荒川 真一 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 近世における酒吞童子説話の享受と展開 藤平 泉（国文学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	松崎 寛子 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 戦後台湾児童文学の系譜ー日本・アメリカ文学の影響を中心に 山口 守（中国語中国文学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	今滝 暢子 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 文法化研究プロジェクト 保坂 道雄（英文学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	小林 哲也 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 W・ベンヤミンの言語思想と批評実践ーそのアソシエーション構想の可能性 初見 基（ドイツ文学科）

1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	高宮 純子 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 現代ドイツにおける「記憶文化」形成の検証 初見 基（ドイツ文学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	山本 知佳 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 現代ドイツにおける「記憶文化」形成の検証 初見 基（ドイツ文学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	秋 貞子 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 金剛山の観光開発に関するアジア研究 後藤 範章（社会学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	本間 夏海 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 博物館の教材開発 小笠原 喜康（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	松嶋 哲哉 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 日本近代教育に関する史料の体系的調査・収集 小野 雅章（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	水戸部 光則 平成 29 年 5 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 日米におけるペスタロッチ主義の展開と変容 北野 秋男（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	窪 和広 平成 29 年 6 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 コミュニティ・スクールに関する研究 佐藤 晴雄（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	中嶋 亮太 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 戦後日本における教育労働運動の歴史的研究 広田 照幸（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	仲野 由佳理 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 非行少年の「立ち直り」と支援に関する教育学的研究 広田 照幸（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	劉 麗鳳 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 戦後日本における教育労働運動の歴史的研究 広田 照幸（教育学科）

1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	白川 徹 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 目撃証言研究における凶器が人の認知機能に及ぼす影響に関する研究 巖島 行雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	高橋 望 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 顔情報の認知に関する心理学的検討 巖島 行雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	福島 由衣 平成 29 年 5 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 目撃証言の正確さを担保する識別・尋問方法に関する研究 巖島 行雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	朝川 明男 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 ステレオタイプ脅威下におけるステレオタイプリアクタンスの生起の検討 岡 隆（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	伊澤 冬子 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 社会心理学とポジティブ心理学の共同研究 岡 隆（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	杉田 房子 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 同調行動の社会心理学的研究 岡 隆（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	檜原 潤 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 うつ病患者に対するサポート行動を促進するプログラムの開発および効果の測定 坂本 真士（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	勝谷 紀子 平成 29 年 6 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 「新型うつ」に関する心理学および精神医学的研究 坂本 真士（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	亀山 晶子 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 「新型うつ」に関する心理学および精神医学的研究 坂本 真士（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	田中 江里子 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 地域住民を対象とした、自殺予防のための啓発活動の実践と介入効果の検討 坂本 真士（心理学科）

1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	芳賀 道匡 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 大学におけるソーシャル・キャピタルに関する研究 坂本 真士（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	村中 昌紀 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 「新型うつ」に関する心理学および精神医学的研究 坂本 真士（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	相澤 裕紀 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 高齢者介護に関する認知心理学的研究 内藤 佳津雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	玉木 賢太郎 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 良質な高齢者介護の習得と教育に関する心理学的研究 内藤 佳津雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	岩倉 希 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 生活環境に対する環境心理学的研究 羽生 和紀（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	加藤 友衣 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 生活環境に対する環境心理学的研究 (8) 羽生 和紀（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	白川 真裕 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 生活環境に対する環境心理学的研究 (8) 羽生 和紀（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	西本 和月 平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日 生活環境に対する環境心理学的研究 (8) 羽生 和紀（心理学科）

研究協力員

1. 氏 名	深田 喜八郎
2. 期 間	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	肥満者に対する適切な運動処方検討
4. 受 入 教 員	櫛 英彦 (体育学科)
1. 氏 名	吉田 明
2. 期 間	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	大学ラグビーチームの競技力向上に必要な組織変革論を明らかにする
4. 受 入 教 員	櫛 英彦 (体育学科)
1. 氏 名	伊藤 幸子
2. 期 間	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	被撮影者の心理学的研究
4. 受 入 教 員	岡 隆 (心理学科)
1. 氏 名	佐久 浩子
2. 期 間	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	「新型うつ」への心理学的アプローチ
4. 受 入 教 員	坂本 真士 (心理学科)

6-1 研究紀要

人文科学研究所研究紀要第 94 号 総目次

(縦組み)

【研究論文】

コスモスの美学(一)	久保光志	1
五・一五事件後の政党内閣復活工作と前田米蔵 —政友会「更生」から近衛新党へ—	古川隆久	23

(横組み)

【研究論文】

Human Nature [<i>Hsing</i> 性] and the <i>Tao</i> 道 —Philosophy of <i>Mencius</i> 孟子 from the Viewpoint of <i>Laotzu's</i> 老子 <i>Tao</i> —	館野正美	1
Towards a CLIL Syllabus in Japanese Universities	リチャード・キャラカー	15
日本語行為文の再認記憶に人称代名詞が与える影響	望月正哉・相澤裕紀	33
児童養護施設で暮らす子どもの生活安全感・安心感と精神的健康感との関係 —「生活安全感・安心感尺度」の改良を通して—	松村 香・宇津木孝正・岡 隆	47
人権の根拠をどのように考えるか	石川 晃 司	59
戦後昭和期・平成期における日本の人口政策 —人口経済学的分析—	大塚友美	83
Implementing Silent Repeated-Reading: How Much Can Non-Native Readers of English Be Expected to Develop their Reading Fluency?	ティモシー・グティエレス	103
1970年における「国家主席」の設置をめぐる議論の本質に関する考察	日吉秀松	127
人口政策と人口学的慣性	大塚友美	139

【研究ノート】

日本大学文理学部人文科学研究所平成26・27年度総合研究 21世紀における日本の針路に関する学際的研究 —少子高齢化とそれに伴う諸問題の克服策— 研究報告書『人類の歩み—21世紀の分岐点—』	研究代表者：大塚友美 研究分担者：内藤佳津雄・山本 質素 櫛 英彦・上之園佳子 石川 晃司・落合 康浩 安 勝熙・小池 高史	155
--	--	-----

6-2 研究紀要

人文科学研究所研究紀要第95号 総目次

(縦組み)

【研究論文】

『治天の君』論序説

—『王家』の精神史をめぐる一試論—

…………… 鈴木 国 弘 …… 1

(横組み)

【研究論文】

CLIL and Pre-service Teacher Education in Japanese Universities

…………… リチャード・キャラカー …… 1

オンライン英語多読教材を使用した多読学習における読書行動の読解力
および読解速度への影響

…………… 隅 田 朗 彦 …… 21

ドイツ語とソルブ語の語順

—ソルブ語の副文内の枠構造にみられるドイツ語の影響の境界線について—

…………… 山 口 和 洋 …… 35

1980年代の路線選択をめぐる日教組の内部政治

—石井亮一文書に見る400日抗争の実際—

…………… 広田照幸・徳久恭子・高木加奈絵 …… 51

地方学力テストの歴史的展開

—上位県と下位県の比較—

…………… 北 野 秋 男 …… 77

日本の会社員はうつ病症状について誰に相談したいと思うのか

—援助要請意図とその規定因の検討—

…………… 檜原 潤・村中昌紀・山川 樹・坂本真士 …… 95

言語論からイメージ(像)論へ

—吉本隆明の所説をもとに—

…………… 石 川 晃 司 …… 107

失われた20年における人口政策

…………… 大 塚 友 美 …… 137

平成28年度 人文科学研究所総合研究 研究報告

近現代の諸地域における歴史と

歴史認識の関係をめぐる諸相

研究代表者：古 川 隆 久 …… 149

研究分担者：大川 謙作・小野 雅章

粕谷 元・小浜 正子

松重 充浩・森 ありさ

「話芸」の多角的研究

…………… 研究代表者：田 中 ゆかり …… 173

研究分担者：岡 隆・佐藤 至子

閑田 朋子・林 直樹

「現代東アジアにおける情報統制と文化翻訳の攻防に

関する研究」研究報告

…………… 研究代表者：高 榮 蘭 …… 187

研究分担者：大川 謙作・紅野 謙介

武内 佳代・三澤真美恵

山口 守

7 事業報告

I 刊行物発刊

人文科学研究所「研究紀要」第九十四号	平成29年9月30日発行
人文科学研究所「研究紀要」第九十五号	平成30年2月28日発行

II 委員会

人文科学研究所運営委員会

第1回	平成29年4月19日開催
第2回	平成29年7月10日開催
第3回	平成29年11月15日開催
第4回	平成30年3月20日開催

研究活動報告書 第9号 平成30年7月31日発行

編集・発行者 広 田 照 幸

発 行 所 日本大学文理学部人文科学研究所

〒156-8550

東京都世田谷区桜上水3丁目25番40号

TEL : 03-5317-8 6 4 2

FAX : 03-3329-6 6 4 6

(株) 文 成 印 刷

日本大学文理学部人文科学研究所